

特2

37

醫學士柳 倣纂譯  
醫學士甲野 斐校正



# 眼科學

卷之三

明治十五年三月

譯者藏版





○硝子體諸病

- 第一章 硝子體炎
- 第二章 硝子體曇翳
- 第三章 硝子體融解症
- 第四章 硝子體中異物囊入
- 第五章 硝子體動脈遺存
- 第六章 硝子體剝離

一	三	同	五	九	十	十	十	一
丁	丁		丁	丁	丁	丁	丁	丁

自一

第九編

水晶體

○水晶體諸病

第一章 白內障一名內障眼

總論	同
白內障ノ種類	二十七丁
柔軟液樣ノ皮質白內障	同
核白內障	二十八丁
老人白內障	二十九丁
局部白內障	三十二丁
間層白內障	三十三丁

分畫性后皮質白內障 後極白內障

三十四丁

水晶體中異物襲入

外傷性白內障

三十七丁

白內障硬軟ノ監識

三十九丁

白內障手術 概論

四十三丁

瓣狀摘出法

四十六丁

角膜下部瓣狀截開

四十八丁

角膜上部瓣狀截開

六十五丁

瓣狀摘出後偶發スル障害

六十七丁

瓣狀摘出虹彩切除併用法

七十丁

白內障線狀摘出法

七十四丁

單純線狀摘出法

七十四丁

線狀摘出虹彩切除併用法 總論

八十三丁

「フオン、グレイ、フェ」氏變式周邊線狀摘出法	八十六丁
「キムヒレル」一リ、一ブライヒ及ヒ「ローブルン」	
氏手術式	百五丁
白内障ヲ水晶囊ト共ニ摘出スル法	百七丁
通常ノ老人白内障ニハ如何ナル法術ヲ撰	
擇セサル可ラサル歟	百九丁
白内障截開法	百十一丁
白内障截開虹彩切除併用法	百二十一丁
白内障截開法ヲ摘出ノ預備法トシテ施用	
スルノ論	百二十四丁
白内障撥下法	百二十五丁
后發白内障手術	百二十八丁
第二章 水晶體脫位症	百三十九丁

水晶體不全脫位症	百四十丁
水晶體完全脫位症	百四十三丁
第三章 水晶體缺亡症	百五十丁

○第十編

眼球光線屈折及ヒ調節機 百五十二丁

○光線屈折力及調節機能變常

第一章 總論	百六十四丁
第二章 眼鏡ノ種類	百七十丁
第三章 視力ノ年齢ノ關係	百八十丁
老視眼	同
第四章 遠視眼	百八十八丁

水晶體缺亡ニ因スル遠視眼

百九十八丁

第五章 近視眼

二百丁

第六章 亂視眼

二百二十一丁

正亂視

二百二十五丁

不正亂視

二百四十五丁

第七章 兩眼屈折不同症

二百四十七丁

### ○調節機變常

二百五十三丁

第一章 調節機麻痺

同

第二章 調節機痙攣

二百六十二丁

○眼鏡ノ新式曲光力及舊式「ツオル」番號比較表

目次終

## 眼科學卷之三

東京大學醫學部眼科醫員醫學士

神 俣 纂 譯

同

甲 野 棊 校 正

### ○第八編

硝子體

〔解剖的嬰訣〕硝子體ハ水晶體ノ後面ト網膜トノ間腔ヲ充填スル者ニシテ其表面ハ後方ト側方ニ於テ穹窿ヲ前部ハ少シク陷凹狀ヲ以テ水晶體ヲ載ス硝子體ハ粘液樣ノ白色透明ナル物質ニシテ極メテ薄弱ノ硝子膜ヨリ被包セラレ而シテ此膜ハ視神經乳頭ノ周傍及ヒ「チン」氏小帶

ニ近接セル鋸齒狀線ニ於テ周圍ノ組織ト連接ス

硝子體組織ハ未ダ全ク明瞭ナラス、或説ニ云ク、硝子體ハ毫米紋狀ヲ呈セサル無組織ノ體質ヨリ形成スト、然リト雖異物ノ硝子體中ニ竄入スルキハ、其周圍ニ包囊ヲ造成シ、又硝子體ヲ暴露角膜備後ノ如シ、後ノ如シハ變化ヲ生スル等ニ因テ考案スレハ、細胞組織ノ存在セルカ如シ、ブリタケ氏ハ數膜相層疊シテ成ルヲ發見シ、ハンノウエル氏ハ硝子體中ニ於テ夥多ノ中隔アリテ、其狀恰モ橙實中隔ノ之ヲ區分スルカ如キヲ認メシト云フ、其他ノ解剖家ハ以上ノ諸組織ヲ星形狀細胞ナリト認メ、又他ノ解剖諸家ハ皆ナ之ヲ試験ノ際人工ニ生成セル物ト云ヘリ、リットル氏ノ説ニ硝子膜ノ内面ニ於テ薄弱ナル上皮細胞層ヲ有スト云フ、スナルリング氏ハ硝子體ノ中央ニ於テ二ミリメートル以上ノ直徑ヲ有スル一管アルヲ確認セリ、但シ此管ハ視神經乳頭ニ向フニ從テ増大シ、乳頭ニ至レハ其直

# ○硝子體諸病

## 第一章

徑ヨリ二ミリメートル過大ノ一孔ヲ呈ス、又同氏ハ大凡硝子體ノ外三分一ヲ領スル皮質層疊ヲ及ヒ三放線星形入ニシテ水晶體核ト相類似スル核ヲ發見セシト云フ  
硝子體ハ血管神經ヲ有セス、榮養及ヒ其消耗ヲ補給スル物質ヲ深部ノ眼球膜ヨリ攝取ス

硝子體特發炎ハ古來ヨリ一ノ疑問ニ屬セリト雖、最近檢眼鏡ヲ用テ異

物ノ硝子體中ニ竄入シ之ニ因テ生スル變化ヲ認メ得ルヲ以テ遂ニ特  
發ノ炎症アルヲ決定セリ而シテ其症狀タル先ニ異物ノ周傍ニ於テ微濁  
ヲ生シ漸ク稠厚トナリ至ク異物ヲ認知シ能ハサルニ至ル加之同時ニ硝  
子體ノ他部ニ於テ糸狀或ハ雲片狀ノ曇翳ヲ生ス今此病機ノ發育ヲ經  
驗スルキハ異物ヲ被包スル灰白色ノ曇翳黃色ヲ雜ヘ此色澤其周圍ニ  
分布シ異物若シ水晶體后面ニ近接シテ存スルハハ瞳孔モ亦變色スル  
ヲ目撃スヘシ其他角膜葡萄腫切除及ヒ水晶體瓣狀摘出術後ニ硝子體  
化膿炎ヲ發生シ速ニ膿溲潤ノ蔓延スルヲ實驗セリ  
此變化ノ後經過ハ甚々各異ニ或ハ結締組織影シク新生シ眼球内膜  
ト連接スル所ノ血管ヲ造成シ後來其結締組織痕様ニ收縮シ網膜剝  
離ヲ來スアリ或ハ異物ノ周傍ニ包囊ヲ作爲セルカ如キ症ニ於テハ結  
締組織ノ新生唯一局部ニ限畫スルアリ又殊ニ屢目撃スルハ脈絡膜疾  
患ニ由テ硝子體炎ヲ發起スル是ナリ而シテ其症狀タル化膿性脈絡膜

炎ノ徵候ト全ク同一ナリ 第二卷百七 又其治法ニ至テハ化膿性脈絡膜  
炎ト異ナルヲナシ 丁ヲ見ヨ

## 第二章

### 硝子體曇翳 (Opacitas corporis Vitrei)

硝子體曇翳ハ諸般ノ形狀ヲ呈ス

(一) 澄清ナル硝子體中ニ殆ト不動ニテ限畫セル暗黒斑ヲ見ハシ之ヨ  
リ微細ノ突起ヲ生ス此斑點ノ數ハ甚々寡少ニシテ乳頭ノ近傍ニ存在  
スルヲ多シ而シテ此症ハ網膜炎後或ハ后葡萄腫ニ併發シ或ハ老人ニ於  
テ他ノ眼球變狀ナク之ヲ發見ス

(二) 曇翳ハ眼底前ニ懸垂セル微細或ハ顆粒狀ノ白紗ノ如キ看テ做ス  
トアリ故ニ檢眼鏡檢査ノ際眼底模糊トシテ烟霧ニ覆ハルハカ如ク之  
カ爲メ往々網膜曇翳ト誤認スルヲアリ此薄膜狀曇翳ハ殊ニ梅毒性ノ

疾患 網膜炎、脈 二來ルコト多シ

(三)硝子體曇翳ハ多シハ可動糸狀、雲片狀或ハ薄膜狀ノ者ナリ、而シテ  
眼球ヲ疾ヤシ彼此ニ廻轉セシメ檢眼鏡ヲ以テ檢スルキハ容易ニ之ヲ  
確知シ得ヘシ、且ツ曇翳移動ノ速力及ヒ其運動ノ狀態ニ從テ硝子體融  
解ノ強弱ヲ審ニシ得ルモノナリ、此曇翳ハ殊ニ深部ノ眼球膜ノ疾患、毛  
體炎、脈絡膜炎後ニ發見ス

視覺障害ハ此曇翳ノ網膜上ニ陰影ヲ投寫スルニ因ス

網膜知覺ノ過敏ナルキ、又ハ知覺過敏ヲ發セサルモ、明處ヲ視望ナルキ  
ハ、患者種々ノ狀形、各箇若クハ球數狀ニ連合セル小キ有スル細小ノ暗  
黒體ヲ自覺ス、此小體ヲ名テ可動暗點 [Spotoma mobile] 一名飛動蚊虻  
Mouches volantes ト云フ、而シテ此暗點ハ不快ノ感覺ヲ與フルモ、視力尋  
常ニシテ檢眼鏡ヲ以テ真個ニ硝子體曇翳ヲ見ルコトナクシテハ意ニ介ス  
ルニ足ラサル者トス

真個ノ硝子體曇翳ハ視覺上ニ種々ノ作用ヲ及ボス、則チ蔓延性曇翳ハ  
全視界ヲシテ多少模糊タラシメ、雲片狀或ハ薄膜様ノ曇翳ハ其數ト其  
散布トニ從テ夥多ノ光線ヲ吸收シ細小ノ物體ヲ視覺スル能ハサラシ  
ム、通常患者ハ劇甚ノ眼球運動ヲ營ミ、瞬間曇翳ヲシテ視界ノ中央部  
ヨリ周邊ニ散放スルヲ習熟スト雖、直チニ舊位ニ復シ、視界再ヒ曇暗ト  
ナル、而シテ患者屢讀書等ノ際ニ當テ此運動ヲ反復スル者ニシテ、唯此症狀  
ノミヲ以テ大凡硝子體中移動曇翳ノ存在スルヲ鑑識スルニ足ルコトア  
リ、<sup>フオン、グレ</sup> <sup>フオン、グレ</sup> 氏說

今若シ患者ニ一小孔ヲ透シテ白壁若クハ曇天ヲ望視セシムレハ、患者  
自ラ其硝子體曇翳ノ形狀ヲ看認シ得ル者ナリ、殊ニ強度ノ凸面照子ヲ  
副用スルキニ然リトス

(原因) 硝子體曇翳ハ特ニ脈絡膜若クハ網膜ノ疾患ヨリ來ル者トス  
而シテ此疾患ハ(一)榮養障害或ハ炎症性刺戟ニ由リ(二)漿液膿、及殊ニ血液



ノ如キ諸般ノ滲漏ニ因テ硝子體變化ヲ發生スルモノナリ、又眼球損傷、突衝諸筋ノ過勞嘔吐下血若クハ月經ノ卒然遏止ニ因リ發起スル眼球充血ノ如キモ皆硝子體中血液滲漏ヲ來スノ原因トナル、而シテ此漏血ハ硝子體ノ一部或ハ全部ヲ充盈シ、暫時ニシテ沈降シ、吸収ニ依テ多分消滅スルモ、爾後久時ヲ經テ尙ホ檢眼鏡ヲ用ヒ雲片狀ノ曇翳ヲ認知ス、但シ其運動ノ強弱ハ硝子體融解ノ度ニ準ス

〔預后〕ハ曇翳ノ性質ト原因トニ從テ長否アリ、即チ曇翳若シ出血性ニシテ脈絡膜疾患其原由カラサルノミナラス、他ニ硝子體ノ變化無キモハ、速ニ吸収消失スルモノナリ、然レモ曇翳ハ屢遺存シ、或ハ殆ント消滅スルモ、猶ホ其一部分ヲ殘ス者ナリ、又從來ノ實驗ニ據ルニ若シ近視眼ニ曇翳ヲ生スレハ屢網膜剝離ヲ繼發スルコトアリ、但シ此剝離ハ亦近視ノ有無ニ關セスシテ、硝子體中ノ新生結締織萎縮スルニ由テ生スルコト時々之アリ

〔治法〕脈絡膜若クハ網膜疾患ニ因スル曇翳ニハ、其治法ヲ行フヘシ、又全身血行障害或ハ局所損傷ニ因ル硝子體內滲漏ニハ、顳額部ニ人工蟻針ヲ貼シ、眼胞ニ冷捲法ヲ行ヒ、脚湯ヲ施シ、眼球ヲ安靜ニ保護スルヲ要ス、且ツ痔血、月經障害等ニハ殊ニ注意セサル可ラズ

曇翳吸収ヲ促進スル爲ニピロカルピンノ皮下注入法ヲ施シテ發汗セシメ、或ハ下劑猛瀉、沃度加里温捲法及ヒ壓迫繃帶ヲ用ヒ屢効驗ヲ取ルコトアリ、后葡萄腫ニ因テ生スル硝子體曇翳ニ數回前房穿針術ヲ施シ、徐ニ房水ヲ流出セシムルキハ、屢大効ヲ奏スル者ナリ、又輒近二三ノ醫士ノ說ニ平流電氣ヲ用テ曇翳ノ速ニ吸収セルヲ實驗セリト

「ラオン、グレイ、フエ氏ハ一患者ニ針ヲ用テ薄膜樣硝子體曇翳ヲ破壞轉位シ、大ニ視力強長トナルヲ目撃セリト云

第三章

硝子體融解症 (Synchysis corporis vitrei)

硝子體ハ其膠樣ノ性質ヲ失シ多少流動形ヲナスコトアリ之ヲ硝子體融解ト云フ而シテ此變質ハ唯其一部ノミハ前部或ハ後部ニ發顯スルコト多シ同時ニ硝子體曇霧ノ存在スルキハ確然診定シ得ル者ニシテ殊ニ其運動ノ速力ト方向トニ注目スルキハ硝子體流動ノ稀濃ヲ確知スルニ足ル者ナリ

眼球ノ柔軟ヲ以テ硝子體融解症ノ徵候トナスハ大ニ誤レリ然レモ柔軟ノ眼球ハ大抵融解セル硝子體ヲ含藏スル者ナリ又是ニ反シ緊張セル眼球ニ於テ融解セル硝子體ノ存在スルコト往々之アリ又虹彩殊ニ其周縁ノ震盪スルヲ融解症ノ一徵候ト爲セリト雖此震盪ハ決シテ融解セル硝子體ニ關スルニ非ス唯水晶體前面ニ虹彩ノ靜置セサルニ由ル者ナリ故ニ此症狀ハ唯硝子體融解ヲ爲ス所ノ一原因同時ニ水晶體變位水晶體ヲ維持スルヲ營爲スルヲ示スノミ

局所融解ハ鞏膜擴張腫ノ周傍ニ於テ生ス全部融解症モ亦葡萄腫眼ニ

發見シ其他之ヲ硝子體內滲漏後水晶體脫位後硝子體一部ノ缺亡後及ヒ深部ノ炎症脈絡ヲ患フル眼球ニ於テ目擊セリ

今若シ變質セル硝子體中ニ胆硬脂ノ結晶ヲ生スルキハ大ニ美觀ヲ呈ス即チ檢眼鏡ヲ以テ眼球内ヲ窺フニ光彩燦然タル物體眼球ノ運動ニ從テ彼此ニ移動シ運動休止スルニ至テ其沈降スルヲ認ムヘシ斯ノ如キ症ヲ名テ**眼球閃爍症** [Scintillatio oculi]ト云フ胆硬脂ノ結晶ハ透明ナル硝子體中ニ發現スルアリ或ハ糸狀曇霧ト共ニ來ルコトアリ而シテ其發生如何ハ未タ明亮ナラス但シ此胆硬脂結晶ハ又水晶體中網膜中或ハ網膜及ヒ脈絡膜間ニ發見スルコトアリ

**第四章**

**硝子體中異物襲入**

異物小彈丸、燧木頭、小片、硝子體中ニ竄入シ而シテ光線屈折體ノ猶ホ透

明ナルハ、檢眼鏡或ハ眼内物體自覺法<sup>七丁</sup>ヲ或ハ視界檢査ニ依リ直  
 ナニ之ヲ發見シ得ル者ナリ、然レモ暫時ニシテ異物ノ爲ニ炎症ヲ起シ、  
 爲ニ之ヲ發見スル能ハサルコト往々之アリ、而シテ異物若シ包囊ヲ造成  
 スルキハ、爾後數時間ヲ經ルモ猶其囊ヲ通過シ來ル所ノ金色燦爛タル  
 光彩ヲ見ルヲ得、然レモ異物ノ襲入スルヤ直チニ化膿性硝子體滲潤ヲ  
 發生スルキハ、忽チ之ヲ見ル能ハサルニ至ル  
 又異物ハ其周傍ニ包囊ヲ造成シテ、視機障害ヲ起ストナク、經久眼球内  
 ニ保存スルコトアリ、又數年ヲ經ルノ後之カ爲ニ眼球ニ危險症ヲ將來ス  
 ルコトアリ、蓋シ包囊ヲ有フル異物  
 其他一眼異物ヲ存在スルキハ他眼ヲシテ交感性疾患ニ陷ルノ危險ヲ  
 來ス  
 是故ニ異物竄入ニハ直チニ摘去法ヲ行ハサル可カラス、即チ異物猶ホ  
 創口ニ存在スルキハ、速ニ之ヲ摘去シ、若シ創口ノ擴開ヲ要スルハ、之

チ行フテ而後異物ヲ摘出シ、壓迫繃帶ヲ施ス可シ、次テ其后ノ治法ハ損  
 傷ニ關シテ殊異ナリ、<sup>冷捲法</sup>、<sup>アト</sup>  
 然レモ異物既ニ硝子體中ニ潛在スルキハ、檢眼鏡ニ依リ或ハ有頭消息  
 子ヲ以テ鞏膜ノ表面ヲ探檢シ、其位置ヲ精細ニ確定スヘシ、今此探檢ノ  
 際、鞏膜ノ一局部殊ニ疼痛ヲ覺ルハ、其異物ノ大約此部ニ適セル硝子  
 體中ニ存在スル者トス、<sup>フオン</sup>、<sup>グ</sup>、<sup>レ</sup>其他外創ノ位置、異物襲入ノ方向及ヒ  
 注意シテ探創スル等皆ナ異物ノ位置ヲ確定スルニ緊要ノ件トス、而シ  
 テ異物摘出法ハ其位置ニ從テ異ナリ、若シ硝子體ノ下部ニ於テ水晶體  
 ヨリ少シク離レテ異物ノ存在スルキハ、内障眼刀ヲ用テ眼球赤道ヨリ二  
 三ミリメートルノ距離ニ於テ其位置ニ適應セル部ニ大約十五ミリメ  
 ートル大ノ鞏膜創口ヲ造ルベシ、但シ此切創ハ角膜縁ト併行ニシテ硝  
 子體中ニ達スルヲ可トス、又刀ヲ穿入貫出スルニ當リ一筋ヲ全ク横斷  
 ス可ラス、若シ二直筋間ノ距離創口ヲ造ルニ適セスシテ小ナルキハ、一

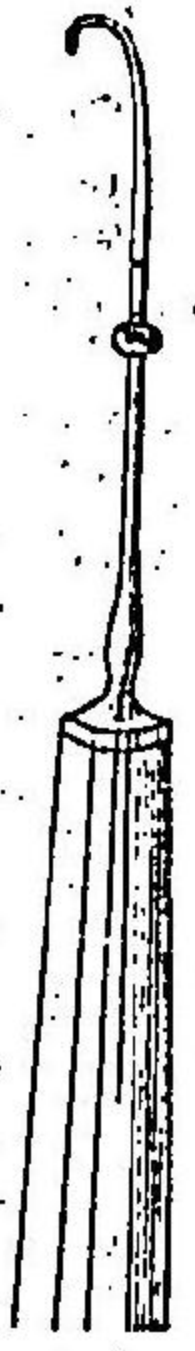
筋ヲ全ク切斷セズ、直筋ノ相對向セル側縁ヲ切截ス可シ、フォングレ且ツ創口ヲシテ可成異物浸入ノ際生スル鞏膜穿孔部ニ施シ異物浸入ノ方路ニ從ヒ器械ヲ送入スルヲ可トス、以上ノ方法ヲ守テ鞏膜ヲ截開シ終ラバ眼球上ニ輕壓ヲ加ヘ硝子體ヲ脱出セシムヘシ、而シテ若シ其度ヲ過メズ異物ヲ近傍ニ切創ヲ爲スルハ異物ハ必ス創口若クハ其近傍ニ顯出シ、或ハ先ツ異物ヲ包圍スル濁暗ノ物質ヲ見ルコトアリ、然ルキハ鑷子ヲ以テ之ヲ外方ニ狭出ス可シ、  
 硝子體曇翳ヨリ圍擁サレタル異物直チニ水晶體ノ后方ニ存スルキハ、虹彩切除法ヲ兼ル水晶體周邊線狀摘出法ヲ以テ之ヲ除出スヘシ、而シテ此法ハフオングレン氏ノ硝子體囊蟲摘出法ト全ク同一ナル者ニシテ猶ホ之ヲ後章ニ記載ス可シ、  
 上記ノ手術ハ又脱位セル水晶體白內障撥下施行后ニ炎症性眼疾ヲ喚起シ、全身或ハ他眼ニ障害ヲ與ヘ外科的手術ヲ要スルカ如キ際ニ稱用セラル、

今若シ動搖セル水晶體ヲ硝子體ノ下部ニ發見スルハ、上記ノ規則ニ從テ試ニ單一ナル鞏膜截開術ヲ行ヒ、或ハ虹彩切除ヲ兼ル周邊線狀截開法ニ依テ之ヲ摘去ス可シ、而シテ今此乙法ヲ施行スルニハ、角膜ニ周邊線狀創ヲ造リ虹彩ヲ切除スルノ後、水晶體ヲ排出スルニ匙子或ハ鉤ヲ用ルヲ可トス、  
 〔硝子體內囊蟲〕囊蟲未タ硝子體中ニ浸入セサル前、其發育ヲ經驗スルキハ、眼底ニ於テ硝子體ニ向テ少ク突出セル球形ノ網膜剝離ヲ發見シ、而シテ網膜若シ猶ホ透明ニ存スルキハ、其后方ニ當テ青色圈狀ノ血管ヲ有セサル分畫胞子小シシ扁平ヲ認知スルコトアリ、ベッセル氏說、其他網膜剝離部ノ卒然特發波動ヲ呈スルニ因テ網膜下囊蟲タルヲ監識シ得ルナリ、而シテ后期ニ至レバ囊蟲網膜ヲ穿通シテ硝子體內ニ墮入スルモノナリ、

硝子體囊蟲ハ檢眼鏡ヲ以テ之ヲ檢スルニ其狀半透明帶青灰白色ノ小

胞ニシテ其縁ニ帶紅白色ヲ呈ス、而シテ其檢查ノ際、暫ク之ニ注視スルキハ、瞬時間囊蟲ノ其頭及ヒ頸ヲ伸縮スル者ナリ  
 末期ニ於テハ、硝子體曇翳ヲ生スルニ由テ、囊蟲ノ監視容易ナラサルニ至ル、此曇翳ハ半透明ノ連續セル薄膜ニシテ、互ニ相層疊セル帷幕ノ形狀ヲ爲シ、眼球内ヲ横走シテ、斷續ヲ爲サス、只數多ノ皺襞ヲ呈ス、此皺襞ハ、檢眼鏡檢查ノ際、溝或ハ暗黒ノ線條トナリテ現ハレ、其形狀眼球ノ運動ニ準テ變換ス  
 視覺妨碍ハ、初メ視界中ニ不動分畫セル黒丸形ノ飲損ヲ呈ハスモ、末期ニ至テハ是ニ廣大ナル雲樣曇翳ヲ見ル  
 若シ此疾患ニ治療ヲ施サハ、ルキハ、遂ニ慢性虹彩毛樣體炎ヲ誘起シ、時々發作緩急ヲ爲シテ、遂ニ眼球萎縮症ニ陥ル者ナリ、又間、化膿性眼球炎ト眼、球突出症ヲ併發スルコトアリ  
 古來唯一回一眼ニ於テ二囊蟲ヲ發見セリ、「ベッケル」ト雖モ、未タ兩眼同時

ニ囊蟲ノ存スルヲ經驗セシコトナシ、而シテ一眼ニ囊蟲ノ現存スルモ、他眼ニ交感性疾患ヲ誘起スルノ素因ヲ有セサルニ似タリ  
 蓋シ此疾患ハ、指テ治療セサルキハ、通常不幸ニ陥ルヲ以テ、必ス其摘出法ヲ行ハサル可ラス  
 濃稠ナル硝子體曇翳ノ存在スルキハ、鞏膜赤道部截開術ヲ以テ胞子ヲ摘去スルヲ優トス第十三丁ヲ見ユ  
 囊蟲ノ所在猶ホ明亮ナル症ニ於テ「フオン、グレイフェ」氏ハ、次法ヲ施セリ、其法先ツ患者ヲ椅子ニ靠ラシメ、定則ニ遵テ下方ニ水晶體ノ周邊線狀摘出法、鞏膜部截開、虹彩切除、水晶體ヲ行ヒ、而シテ「フオン、グレイフェ」氏鈍鉤ヲ囊蟲ニ向テ硝子體內ニ送入シ、適宜ニ鉤ヲ前後ニ運動シ、囊蟲ヲ其硝子體包第一圖「フオン、グレイフェ」氏鈍鉤  
 囊ト共ニ漸々創口ニ牽出ス可シ、而シテ此際囊蟲ヲ損傷セザラント欲セハ、創口ニ黃色糸狀及ヒ薄膜狀ノ曇翳物ヲ認知スルニ至テ、鈍鉤ヲ桿ヲ使フ



カ如ク運動ス可シ、而シテ靈蟲創口ニ近接セハ、鉤ヲ拔去シ、水晶體摘出法ニ於ル如ク、輕壓ヲ行テ創縁ヲ哆開セシメ、角膜上縁ニ硬護膜製匙子ヲ占置シ以テ靈蟲ヲ排出スヘシ

### 第五章

#### 硝子體動脈遺存

*Arteria hyaloidea persistens*

夫レ胎兒ノ未タ子宮内ニ生育スル間、硝子體動脈ハ眼球ノ中央ヲ通過シ視神經乳頭ヨリ皿狀窩ニ達スル者ナリ、而シテ其胎生ノ末期ニ至レハ動脈自然ニ消亡スル者ナリ  
然リト雖モ甚々罕ニハ此動脈終身現存スルコトアリ、即其動脈ハ微灰白色ノ縁ヲ有スル不透明ノ紐條ヲ爲ス、ゼーミツ氏說而シテ之ヲ集光照法ニ依テ檢スルハ、蓋シ赤色ヲ呈スルナリ、且ツ此紐條ハ少シク伸張セラレ波動ヲ顯ハス、ツエーヘン氏說「フオン、ウエツケル」氏ハ一回遺存セル動脈ノ脱位水晶

體ニ連接セシヲ實見セリ

### 第六章

#### 硝子體剝離

*Solubio corporis vitrei*

「イワノフ」氏ハ損傷セル近視眼ノ解剖的試験ノ際、偶然硝子體剝離ヲ實見セリト云  
檢眼鏡上ノ徵候ハ未タ明白ナラス

# ○第九編

## 水晶體

〔解剖的要訣〕水晶體ハ兩凸照子形ノ透明體ニシテ、其前面ハ虹彩及ヒ前房水ニ接シ、其後面ハ前面ニ比スレハ強ク凸隆シ、硝子體ニ直接シ、居テ其皿狀窩ニ占ム

水晶體ハ硝子膜ニ屬スル所ノ透明強彈力性ノ囊膜ヨリ包圍セラレ、者ニシテ此囊ニ前後ノ二部ヲ區別シ、甲ハ其内面ニ一層ノ上皮細胞ヲ有ス、而シテ水晶體ハ其囊ニ由テ「チン」氏小帶ニ固着ス、但シ此小帶ハ硝子體膜ノ連續ニシテ毛樣突起部ニ於テ別レテ二葉トナリ、其一ハ前水晶體ニ、其一ハ后水晶體ニ移行ス、此ノ二葉ト水晶體赤道部ノ間ニ存在スル空隙ハ「ペチト」氏管ト稱スル者ニシテ、内ニ少量ノ水樣液ヲ有ス

水晶體ノ實質ヲ區別シテ皮質及ヒ核ノ二部トス、其皮質部ハ葱根狀層ヨリ構成シ、核ニ比スレハ迥ニ柔軟ナリ、又少年ノ時透明ナル水晶體モ老年ニ至ルニ從ヒ黃色乃至褐色ニ變シ、加之核増大シテ皮質部其柔軟性ヲ失フ由リ硬固トナル者ナリ

〔組織〕水晶體ノ原質ハ細長六側柱狀ノ水晶體纖維ニシテ、薄包膜及ヒ液樣ノ内質ヨリ形成シ、少年時ニ於テハ内ニ小核ヲ有スルモノナリ、此纖維ハ互ニ相併列シテ葱根狀ノ層疊ヲ造成シ、而シテ各層ニ於テ纖維ノ序列常ニ同一ニシテ、一纖維ノ側面相合シテ殘ル所ノ角度ヲ充實スルニ第三纖維ノ銳線ヲ以テスルカ細キ結構ヲ呈ス、但シ各纖維ノ一端ハ銳尖ニシテ一端ハ圓形ナリ

今水晶體ヲ細密ニ検査スルキハ、其兩面ニ於テ三條ノ放線形（△）ヲ見ルヘシ、其前面ノ上方ニ向ヘル放線ハ眼球ノ鉛直經線ニ符合シ、後面ノ下方ニ向ヘル放線モ亦之ニ同シ、故ニ乙線ハ甲線ニ對シテ

百八十度廻轉セルガ如キ看ヲ做ス、但シ此放線ハ水晶體纖維ノ末  
端互ニ相對觸シテ成ル者ナリ、又此水晶體纖維ハS狀ニ迂回シ水  
晶體後面ヨリ前面ニ向テ經線狀ニ走行スルモノナリ、且ツ總テ一  
層ニ屬スル纖維ハ同長徑ヲ有スルカ故ニ後面ニ在テ其中心ニ近  
接セル部ヨリ起首スル纖維ハ前面ニ至テ其邊縁部ニ附着スル者  
ナリ

# ○水晶體諸病

## 第一章

### 白內障 [Cataracta] 一名內障眼

#### 〔甲〕總論

白內障トハ多少水晶體系統ノ曇濁ヲ云フ、而シテ此症ノ初期ニ於テハ、  
其微濁ノ存在及ヒ其廣狹ヲ確知スルハ、太ク容易ナラス、常ニ精密ノ檢  
査ニ依ラサル可ラス、殊ニ亞篤魯比涅ヲ以テ瞳孔ヲ散大セシメ且ツ集  
光照法ト檢眼鏡ヲ使用スルヲ緊要トス  
水晶體曇濁ハ集光照法ニ依テ灰白色或ハ白色ヲ呈ス、蓋シ高年ニ至レ  
ハ水晶體光線ヲ反射スルコト甚ダ強ク、又核ハ黃色ニ變スルヲ以テ老人  
ヲ檢査スルニ當リ、此生理的狀態ヲ眞ノ曇濁ト誤認ス可カラズ、今患者  
其年齡ニ適セル尋常ノ視力ヲ有シ、加之檢眼鏡ヲ用テ眼球内ヲ照シ、水



晶體ノ全ク透明ナルヲ發見スルハ、白内障ニアラサルモノトス  
 檢眼鏡就中弱光ノ平面鏡ヲ以テ照透スルキハ、僅微ノ曇濁ト雖モ、容易  
 ニ發見シ得ル者ニシテ、則チ不透明ニシテ照透シ能ハサル曇濁ハ、暗黒ノ  
 斑點或ハ線條トナリテ、赤色ノ眼底ニ映出ス。古來大ニ稱用セシ所ノ「ア  
 ルキン」ニ、サンリソノ氏ノ反射試驗法ハ、輒近上記ノ試驗法發明アリシ以  
 來之ヲ用フル者ナシ

水晶體ノ一大部或ハ全部ニ蔓延セル曇濁ハ、瞳孔ヲシテ灰白色或ハ白  
 色ニ變セシムルヲ以テ、既ニ一見シテ之ヲ認知シ得ル者ナリ、而シテ最モ  
 罕ニ之ヲ瞳孔部ノ成形性滲出物ト誤認スル「アロ」假性白内障。然レモ此假  
 性白内障ハ必ズ同時ニ虹彩後癒着ト、虹彩外形ノ變狀ヲ現スヲ以テ、之  
 ヲ確然監別シ得ヘシ、其他此類似白内障性水晶體ニ於テハ虹彩瞳孔縁  
 ノ暗影ヲ見ル「アロ」ナシ

〔視覺障害〕曇濁若シ中心部ニ在ルキハ、患者ハ弱光ト瞳孔散大セ

ル際トニ於テ最モ善ク物體ヲ視覺ス、然レモ曇翳邊縁部ニ存スルキハ、  
 全ク反對ノ關係ヲ見ハス

患者屢其初期ニ於テ多視症ヲ訴ヘ、且ツ物體常ニ白紗或ハ雲霧ヨリ被  
 掩セラル、如キヲ覺ラズ次テ視覺障害漸々進行シ、遂ニ數月乃至數年ヲ  
 經テ漸ク晝夜ヲ辨別シ得ル如クニ減衰スル者ナリ

〔經過〕白内障ハ通例徐々ニ經過スル者ニシテ、多クハ高老ニ至テ初テ  
 發生スルモノナリ、但シ先天若クハ外傷性、白内障ハ或ハ緩徐或ハ急速  
 ニ經過シ、罕ニハ停止性ノ如キ者アリ、然レモ遂ニハ水晶體全部或ハ其

大部ノ曇濁ヲ發生スル者居多ナリ、又白内障ノ初起ヨリ其成熟ニ至ル  
 マテ數月或ハ數年ヲ費ス者ナリ、且ツ通例漸々兩眼ヲ侵ス者トス

〔原因〕水晶體曇濁ヲ發生スル原因ハ未ダ全ク明白ナラス、而シテ全身  
 榮養妨碍、糖尿病、麥奴中、或ハ水晶體又水晶體ノ炎症病機ハ白内障ノ原  
 由ヲ爲スカ如シ

如斯キ炎症性障害ハ大抵葡萄膜或ハ總テ深部ノ眼球膜疾患脈絡膜炎、虹脈絡膜炎、虹膜炎等ヨリ誘發スル者ナリ、又白内障發生チ水晶體纖維ノ退行性變質機ニ由リ纖維脆弱トナリ、其透明性ヲ失スルモノトスルアリ

白内障ハ其原因ノ如何ヲ問ハス、殊ニ四十五歳以上ノ老人ニ發生スル疾患ナリ、而シテ其幼年ニ於テスルハ、大抵眼球内部疾患虹彩炎、脈絡膜炎、全身諸病、糖尿病、或ハ眼球損傷ニ因ル者ナリ、又生來ノ白内障ヲ發見セシコアリ、先天白内障或ハ初生兒ノ期ニ於テ角膜穿孔ノ爲ニ發生セルヲ實見セシコアリ

〔治法〕白内障ハ固ヨリ藥力ノ能ク治癒ス可キ者ニ非ス、人若シ藥効ニ因テ恢復スルヲ實見セリト云ハ、恐ラクハ監識ノ誤認ニ屬スルナラシ、或ハ間、虹彩炎若クハ虹彩毛樣體炎ヲ誘起スル、一時ノ水晶體炎症性障害ヲ、白内障ト誤認セシナリ、又白内障ニ於テ偶然視力ノ善良トナルコアルハ、蓋シ不明透ナル水晶體ノ脫位シ、或ハ柔軟液樣白内障ノ吸收其

ノ偶然損傷ヲスルニ基因スル者ナリ  
受ルニ由リ  
白内障ハ特リ手術ニ依テノミ治癒スル者ナリ

〔乙〕白内障ノ種類

既ニ往時ヨリ白内障ヲ數種ニ區別セリ、即水晶體ノ渾濁セル者ヲ名テ水晶體白内障〔Cataracta capsularis〕ト云ヒ、水晶體實質ニ曇翳ヲ生スル者ヲ水晶體白内障〔Cataracta lenticularis〕ト云ヒ、兩質共ニ渾濁セルヲ水晶體兼其囊白内障〔Cataracta capsulo-lenticularis〕ト云フ、水晶體白内障ハ或ハ唯一局部ヲ侵スノミニシテ停止性ノ者アリ、問層障或ハ全部ヲ侵シ進行性ノ者アリ、老人皮質白内障如シ、或ハ全部ヲ侵シ進行性ノ者アリ、内障ノ如シ

〔イ〕柔軟液樣ノ皮質白内障

水晶體ハ灰白色若クハ乳色ニ渾濁シ、通常其膨脹ヲ兼ヌ、而シテ此容積増大スルニ由テ、虹彩ハ僅ニ前方ニ突出シ、瞳孔ハ少シク散大シテ其閉闔

活潑ナラス、而シテ后期ニ至レハ水晶體内容物全ク液様トナリテ、經久其状態ニ止ルアリ、之ヲ**囊腫様白内障** [Cataracta cystica] ト云フ、或ハ漸退行性變質ニ罹ルコアリ

此退行性變質ニ於テハ流動物漸々吸収セラレ、水晶體上ニ脂肪及ヒ石灰ノ沈澱物ヲ造成ス、而シテ此變化ニ因リ、容積漸々減少シ、遂ニ上記ノ沈澱物ニ因リ變形セル囊膜ノミヲ遺殘スルニ至ルコアリ、之ヲ**乾性石灰白内障** [Cataracta arido-siliquosa] ト云フ

此症ニ於テハ水晶體容積減少スル由リ、前房非常ニ深廣トナリ、虹彩ハ眼球運動ニ從ヒ震盪ス、而シテ屢、虹彩瞳孔縁ト、水晶體トノ癒着ヲ發見ス

(ロ) **核白内障** [Cataracta nucleata]

此症ハ瞳孔ヲ散大セシムレハ、灰白色或ハ黄色ノ反射光ヲ呈ハス、而シテ之ヲ側方ヨリ、輝照スルキハ、水晶體中心部ニ限畫性ノ曇濁存在シテ

透明ナル皮質ヲ以テ水晶體ヨリ隔離スルヲ認ムヘシ、又檢眼鏡ヲ以テ照透スルニ、中央ノ曇濁ハ間、微少ニシテ明カニ分界シ、皮質ハ透明ナルヲ見ルヘシ

視覺妨碍ハ水晶體曇濁ノ爲ニ視力減衰スルト、近視或ハ近視性亂視ノ發生スルトニ因ル者ナリ、而シテ此發生ハ渾濁セル水晶體纖維ノ光線屈折力變常ニ基因ス、故ニ亞篤魯比涅ヲ用テ瞳孔ヲ散大セシメ、又凹面眼鏡或ハ凹面圓柱眼鏡ヲ施用スルキハ、視力強良トナル

此ノ如クシテ病機長ク停止存在スルコアリ、而シテ其久時ヲ經ルニ隨ヒ白内障ノ色澤愈濃厚トナリ、赤色ヲ帶ヒ褐色或ハ暗褐色トナリ、遂ニ皮質ニ曇濁ヲ生シ全部白内障トナル

(ハ) **老人白内障** [Cataracta senilis]

老人白内障ハ最も屢發見スル者ニシテ、初メ核ニ密接スル皮質ニ短線或ハ不正斑點狀ノ灰白色曇濁ヲ生シ、同時ニ核ハ黄色或ハ褐色ヲ帶フ

此白内障發生ノ際皮質ニ於テ或ハ臃狀ノ光澤ヲ現ハス所ノ廣キ線條  
或ハ甚ク微細ノ白線ヲ見又線條全ク缺如シテ唯不正ニ散布セル灰白  
色斑點ヲ發見スルコアリ

白内障ノ中央部ハ其色濃厚ナリ琥珀色ハ琥珀色或ハ黄色而シテ褐色ノ稠厚及ヒ其莖  
延ニ由リ核ノ硬軟ト大小トヲ確知シ得ルナリ

水晶體ノ實質全ク不透明トナルキハ之ヲ白内障ノ成熟ト云フ而  
シテ此狀態經久停止スルキハ皮質稠厚トナリ其外觀ト硬軟トヲ變ス  
但シ皮質ノ稠厚トナルハ亦他ノ皮質猶ホ透明ナルニ於テモ能ク之ヲ  
來スコアリ

白内障ノ全經過ハ數月乃至數年ニ亘ル者ナリ  
老人白内障ニ於テ水晶體核非常ニ暗色ヲ帶ヒ裸眼ヲ以テ瞳孔ヲ見ル  
ニ其黒色ヲナスコ開之アリ此黒内障〔Cataracta nigra〕視器官能變常ニ  
ト誤ルハ即チ核ノ硬結セシ結果ニシテ檢眼鏡及ヒ集光照射法ニ依リ容

易ニ監識シ得ルモノトスニフオン、クレーフ、エ氏ノ説ニ此着色ハ蓋シ「ハマ  
チン」ノ浸潤ニ因ル者ニ其「ハマチン」ハ眼球内ノ舊滲血ヨリ來リ、交流  
機ニ依リテ水晶體內ニ滲スト云フ

老人白内障ハ固渾濁セル硬固ノ核及ヒ全ク流動セル皮質ヨリ造成ス  
ルコアリ之ヲ「モルガン」氏白内障〔Cataracta Morgagni〕ト云フ此  
變形ハ水晶體透明ナルニ於テ容易ニ診定シ得ル者ニシテ即チ核ハ白内  
障中央部ニ存セス下方ニ沈逆シ患者頭部ヲ前方ニ傾クルニ從ヒ現出  
シ、后方ニ轉スルニ由リ没入スルヲ見ルヘシ

老人白内障若シ眼球内膜炎ト合併スルキハ屢、水晶體ノ内面ニ石灰質  
沈逆物ヲ生シ、渾濁セル水晶體ノ萎縮ヲ兼ルアリ之ヲ名テ石灰一名  
白聖性白内障〔Cataracta calcaria s. stracua〕ト云フ此症ハ白聖狀ノ反

射光ヲ現ス者ニシテ同時ニ硝子體融解及ヒ「チン」氏小帶ノ弛緩ヲ兼  
テ、眼球運動ノ際白内障モ亦震盪スルコアリ然ルキハ別ニ名稱ヲ下シ

震盪白內障 カタラクタ トレムランズ [Cataracta tremulans] トニフ

又水晶體ノ内面ニ於テ脂肪粒ト一種特異ノ燦光ヲ發スル胆硬脂結晶ヲ發見スルヲアリ加之ステルワグ氏ハ水晶體質ノ纖維樣變質及ヒ花骨ヲ實驗セシト云フ

局部白內障 カタラクタ パルチアルズ [Cataracta partialis]

水晶體皮質ノ邊緣部ニ於テ間各箇ノ狹線狀曇濁ヲ發見スルアリ此濁濁ハ通例虹彩ヨリ掩ハルヲ以テ視覺妨碍ヲ起サズ且ツ他部ヲ侵ス下ナク數年間依然トシ存在スル者アリ  
又罕ニハ前水晶體ヨリ少許ノ距離ニ於テ皮質中ニ限畫セル孤立ノ曇濁ヲ發見スル下アリ  
是ニ反シテ屢透明ノ皮質中ニ數多ノ曇濁セル斑點或ハ線條ヲ見ル下アリ此濁濁ハ甚シク視覺ヲ障害スル者ニシテ間經久停止性ナルアリ或ハ徐々ニ増進スルアリ

〔イ〕間層白內障 カタラクタ ゾンナリス [Cataracta zonularis]

間層白內障トハ核ニ近接セル水晶體層ノ渾濁セルヲ云フ者ニシテ核及ヒ周邊ノ皮質層ハ全ク透明ナリ瞳孔ヲ檢査スルニ灰白色或ハ白色ノ曇濁ヲ發見シ之ヲ側方ヨリ廻照スレハ曇濁層ト虹彩トノ間ニ透明ナル水晶體層ヲ見ル又瞳孔ヲ十分散大セシメ檢眼鏡ヲ用テ之ヲ照スレハ曇濁ノ判然分畫シ水晶體赤道部ヨリ透明ナル一層ヲ以テ隔離スルヲ認ムヘシ此白內障ハ先天或ハ初生兒ノ期ニ發生スル者ニシテ多クハ終身停止性ノ者ナリ然レモ透明ナル水晶體層中ニ二三ノ渾濁セル線條或ハ斑點ヲ呈スルモハ進行性白內障ノ特徴ナリ  
「フォン、グレ」氏說  
視覺障害ハ瞳孔ノ大小ニ關スル者ナリ瞳孔縮小ナルモハ患者稍ヤク獨歩シ得ルノミナレモ瞳孔散大スルモハ往々文字ノ如キヲ視讀シ得ル者ナリ又患者ハ網膜像ノ大ナルヲ要スルカ故ニ物體ヲ甚シク眼ニ近接シ恰モ強度ノ近視症ニ於ル如キ看ヲナス而シテ之カ爲メ屢遠ニ

眞ノ近視眼トナルコアリ、又間層白内障ハ間、眼球震動症ト合併スルコアリ

間層白内障ハ屢一親族中ニ發顯シ、多クハ兩眼ヲ侵スモノナリ、而シテ其初生兒ニ於テ發生スルハ、播擲ヲ誘發スル腦髓障害ト關係アリト「アル」<sup>「ホル」</sup>氏説又「ホル」子「ル」氏ハ、間層白内障ハ多ク英吉利病患者ニ齒牙ニ横線ニ發見スト云ヘリ

間層白内障若シテ停止性ニシテ視力其患者ノ職業ニ妨碍ナキトハ、收テ施術ヲ要セス然レモ瞳孔ノ散大スルニ非サレハ患者善ク讀書シ能ハサル也ハ、亞篤魯比涅ヲ常用シ或ハ假瞳孔ヲ造リテ光線ノ通路ヲ開クヘシ、又間層白内障非常ニ廣大或ハ進行性ナルモハ、水晶嚢截開法ヲ行フヘシ

〔ロ〕分畫性后皮質白内障

後極白内障 [Cataracta posterior] カタルクタ ポスター

檢眼鏡ヲ以テ檢スルニ、水晶體後層ニ於テ其後極ニ向ヒ集合スル曇濁線條ヲ見ル、今側方ヨリ趣照スルニ、前層ハ全ク透明ナリ、而シテ此白内障ハ屢、眼球深部ノ疾患、脈絡膜網膜炎、色素性網膜炎ニ罹ル者ニ發生スルモノトス、後極白内障ハ限畫セル圓形ノ曇濁ニシテ、水晶體ノ後極部ニ發生ス、而シテ此白内障ハ、檢眼鏡ヲ以テ檢査スルニ當リ患者ニ眼球ヲ運動セシムルモ、常ニ其中央部ニ存在スルヲ以テ、其位置ヲ知ル者ナリ、此白内障モ亦眼底疾患ニ伴フ者ニシテ、屢、后葡萄腫及ヒ萎縮性脈絡膜炎ト共ニ發見ス

〔ハ〕水晶嚢白内障 [Cataracta capsularis] カタルクタ カプスラーリス

水晶嚢ハ決シテ曇濁スルコナクシテ、或ハ健全ニ存シ或ハ唯僅ニ破綻ヲ生スルノミ、然レモ之ニ曇濁ヲ呈スルハ、水晶嚢ノ外面或ハ内面ニ沈着物アルニ由ル者ナリ、今左ニ水晶嚢白内障ノ種類ヲ掲グ

〔一〕中心性水晶嚢白内障 [Cataracta capsularis centralis] カタルクタ セントラーリス ハ瞳孔部ノ中

尖ニ於テ灰白帶ヨリ圍擁サレタル圓形純白色ノ斑點トナリテ現ハル、  
 此曇濁ハ少シク水晶嚢面ヨリ突出スルヲ常トス、又罕ニハ小尖柱形ヲ  
 爲シ、其尖端ヨリ角膜後面ニ向テ糸狀ノ突起ヲ派出スルヲ往々之レア  
 リ、名テ尖柱白内障 [Cataracta pyramidalis] ト云フ  
 此曇濁ハ又水晶嚢ノ内面即チ水晶體中ニ存在シ、而シテ先天或ハ角膜  
 穿孔又虹彩炎ニ因テ小兒ニ發生スルモノナリ  
 又水晶嚢後面ニ於テ先天ニ發スル類似ノ曇濁ヲ見ルコトアリ、此白内障  
 ハ少シク硝子體中ニ突出シ、以テ硝子體動脈附着點ヲ特徴スル者ナリ、  
 中心性水晶嚢白内障ハ停止シテ終身存在スルコトアリ、然ルモハ別ニ視  
 力障害ヲ起サ、ルヲ以テ施術ヲ要セズ

(二)水晶體實質白内障ニ伴フ囊白内障ハ石灰質沈澱ニ基因  
 セル白垩様色ノ外觀ヲ具フルニ因リ容易ニ診定シ得ル者ニシテ、屢過熱  
 ノ白内障ニ發見スル所ノモノナリ、其他網膜剝離脈絡膜炎及ヒ虹彩炎

ニ罹ル眼球ニ來ル、就中其虹彩炎ニ伴フモハ屢水晶嚢ト虹彩瞳孔縁ト  
 ノ癒着ヲ見ル、然ルモハ名テ癒着性白内障 [Cataracta adherens] ト云

〔丙〕水晶體中異物襲入

外傷性白内障 [Cataracta traumatica]

總テ水晶嚢ヲ穿孔スル所ノ眼球損傷ハ皮質ヲシテ房水ト觸接セシメ、  
 房水ノ滲入スルニ因テ皮質ニ白色ノ曇濁ヲ生シ、漸膨脹シテ嚢傷口ヨ  
 リ脱出シ、前房中ニ沈澱スルモノナリ、而シテ斯ク水晶體ノ各層順次ニ  
 膨脹脱落シ、遂ニ全水晶體漸吸收セラレ消亡スルニ至ルモノナリ、但シ  
 此轉歸ハ唯壯年ノ者ニ於テ、水晶嚢傷口微小ナラサルトニ發見スル者  
 トス  
 極メテ狭小ノ嚢傷口ハ暫時ニシテ再ヒ鎖閉シ、分霽セル灰白色曇濁ヲ  
 遺スノミ、且ツ此曇濁漸縮少シ、遂ニ全ク消亡スル者ナリ

大ナル水晶體破開ハ、老年ノ者ニ於テ卒然水晶體ノ膨脹ヲ發シ、眼球ヲシテ虹彩炎或ハ脈絡膜炎ノ危險症ニ陥ラシムルヲ常トス、且ツ患者愈老年ナレハ危險愈大ナリ、何トナレハ老年ニ至ルニ從ヒ白內障性水晶體ノ吸収スルハ愈困難トナルヲ以テナリ、其他預后ヲ定ルニ當テハ、同時ニ發起セル他ノ眼球損傷即チ角膜穿創虹彩脫出及ヒ破裂眼球一般ノ震盪、眼球内出血、網膜剝離等ニ注意セサル可ラス

治法ハ先ツ亞篤魯比涅ヲ點眼シテ充分ニ瞳孔ヲ散大セシメ、之ヲ持久ス可シ、然レ而此目的ヲ達スル能ハスシテ却テ水晶體膨脹ノ爲メニ全眼球如何ナル轉歸ヲ得ルヤ圖リ難キトハ、虹彩切除法若クハ水晶體摘出法ヲ施スヲ最良トス

異物 鐵片、木頭片、水晶體中ニ竄入シテ未ク水晶體質ノ曇濁セサル間ハ、容易ニ其所在ヲ確知ス可シ、就中金屬小片ノ如キハ假令ヒ數日ヲ經ルモ其周圍ニ褐色金屬ノ酸化ヲ顯スニ因テ之ヲ認定シ得ル者ナリ、而

シ此際白內障ノ吸収スルキハ、異物ハ殘留シテ水晶體ニ附着シ、或ハ前房中或ハ虹彩ノ后方ニ沈澱スル者ナリ、殊ニ異物虹彩ノ後方ニ脱落スルキハ、眼球ヲシテ眼球内異物存在ト同一ノ危險ニ陥ラシム、虹彩毛様ノ交感但シ異物水晶體ヲ透過シテ眼球ノ深部ニ潛在スルモ亦同一ノ危險症ヲ來スモノナリ、卷之二十九丁交感性異物ノ存在スル白內障性水晶體ヲ摘去スルニ當テ注意ス可キハ、同時ニ異物ヲ除去スルト、異物ヲシテ吾人器械ノ達シ得サル眼球部ニ沈澱スルコト無ラシムルトニ在リ、故ニ通常匙子ヲ異物ノ後方ニ送入シテ以テ其脱落スルヲ防クヲ最要トス

(丁)白內障硬軟ノ監識

先ツ亞篤魯比涅ヲ用テ瞳孔ヲ散大セシメ、集光照法ヲ行ヒ、白內障ノ色澤及ヒ紋形ヲ精密ニ検査スヘシ



水晶體核ノ存在ヲ監視スルニハ、其中央部ノ暗色、琥珀色或ハ黃色ナルニ注意シ、其着色ノ濃淡及ヒ蔓延ニ據テ核ノ硬軟、大小及ヒ厚薄ヲ知ルモノトス

皮質ノ硬軟ヲ監視スルハ頗ル困難ナリ、先ツ白内障ノ容積ニ注目シ、皮質若シ膨大シテ虹彩前方ニ突出シ、從テ前房淺狹トナリ、瞳孔ノ反應活潑ナラサルトハ、殆ント軟性白内障ナルヲ知ルヘシ、然レテ此諸徴ハ兩眼ヲ比較シテ其生理的形狀ニ非サルヲ証シ、又眼球内壓増加ノ如キ他症ヲ發見セサルキニ於テ、初テ白内障ノ所爲タル者トス

皮質ノ紋形モ亦其硬軟ヲ判決スルニ於テ極メテ必要ノ者トス、蓋シ皮質若シ一種ノ光澤ヲ有スル所ノ帶青色或ハ灰白色ナル廣幅放線ヲ顯スキハ、其質柔軟ナリ但シ此線條間ニハ水晶體僅ニ渾濁シテ、彼此ニ灰白色點或ハ不正小斑ヲ呈ハスヲ正規トス、又白内障ノ線條、中等幅ニシテ強ク光趣ヲ發スルキハ、皮質一般ニ柔軟ナリト云フト雖モ、已ニ核ノ

排出ヲ妨害スルカ如ク硬固ナリトス、又細狹或ハ尙ホ廣キモ中等幅ノ白色線條ヲ有スル皮質ハ、軟性ノ如シ、色澤ニ注目スルキト雖モ、皮質硬固ニシテ從テ白内障モ亦硬固ナリ、又線條極メテ細狹ニシテ放線狀ヲナスキハ、其色澤ニ關セズ、皮質常ニ硬固ナルモノナリ

總テ白内障ハ核ノ巨大ナルニ從テ愈々硬固ナリ、若シ線條ヲ具フル皮質、明カニ核ヲ透見スル如ク薄弱ナルキハ、白内障ハ特ニ暗黒ノ外觀ヲ呈シ、兼テ虹彩瞳孔、水晶體間ニ廣幅ノ間隙ヲ顯ハス、而シテ是ニ由テ白内障ノ既ニ退行性變質ニ罹レルヲ知ルヘシ

以上ノ紋形全ク缺亡スルキハ、皮質ノ硬軟ヲ判定スルヲ甚ク難シ、然ルモハ次ニ掲グル性質ニ因テ之ヲ密決ス可シ、即皮質些ニ曇濁スルモ猶ホ透明コシテ灰白色ヲ帶ルキハ、尋常ノ硬度ヲ存シ、未ダ軟化ニ至ラサル者トス、之ニ反シテ皮質全ク透明性ヲ失シ、線條或ハ斑點ノ痕跡ヲモ認知シ能ハス、且ツ灰白色或ハ白色ノ外觀ヲ呈スルキハ、皮質全ク

液樣ニ融解セルノ徵候ナリ、今此ノ如キ症ニ於テハ、水晶體核其中央部ニ存在セスシテ、其最下部ニ沈降スルヲ容易ニ發見スヘシ、而シテ核ノ位置ニ注意スルハ、皮質流動ノ強弱ヲ判決スルニ緊要ノ件トス、又灰白色ニ曇濁セル皮質ノ表面ニ於テ平等ニ斑點ノ散布スルヲ見ルキハ先ツ其透明性ニ從テ硬軟ヲ定ム、即皮質ニ畧完全ノ曇濁アルキハ其質柔軟粘稠ニシ、核ヲ摘出スルノ際其囊ニ粘着シ、之ヲ爲メ押壓或ハ匙子ヲ要スルニ至ル、又曇濁間ニ猶ホ透明ナル皮質ヲ發見スルキハ、其質殆ント健全ノ水晶體質ニ同シ、即膠樣殊ニ透明部愈多ク存在スルキハ、其質愈健質ニ近シ、是ニ反シテ斑點間ニ細小ノ線條ヲ顯ハスキハ皮質硬固ナリ

白内障硬軟ノ鑑識ニ就テ、愛ニ「フジグレイ」氏說ヲ掲ケ之ヲ追加セン、今若シ白内障ノ硬軟ヲ確然診定シ能ハサルキハ、先ツ之ヲ硬固ノ者ト假認スヘシ、何トナレハ硬固ノ白内障ヲ摘出スルニ大ナル創口ヲ造ルハ、微小ノ創口ヨリ之ヲ摘去スルノ困難ナルニ比スレハ、手術后長結果ヲ得レハナリ

### 〔戊〕白内障手術

#### 概論

今白内障ニ手術ヲ施サント欲セハ、先ツ眼球一般ノ景況、殊ニ其機能ヲ確定スヘシ、手術後ニ至リ初メテ其黒内障タルヲ發見スルカ如キ誤リ勿ラシムルヲ緊要トス、且ツ眼球ノ硬軟、虹彩及ヒ瞳孔ノ状態ヲ精細ニ檢査セサル可ラス、其他白内障ノ未タ發生セサル以前ノ視力如何及ヒ白内障發生ノ遲速ヲ確知スヘシ、就中白内障性眼球ノ機能ヲ直ニ試驗スルヲ緊要ナリトス

白内障性眼球ハ、他ニ疾患ナキハ、最小ノ燈光ヲ眞暗ト辨別スルノ視力ヲ有セサル可ラス、卷一第三十九丁ヲ見ヨ、若シ其光覺減衰シテ此需要ニ應セザ

レハ、白内障ノ他尙オ一ノ眼球疾患アル者トス又第一卷四十丁ニ掲載セル方法ニ依リ精密ニ視界周邊ヲ検査セサル可ラス蓋シ此検査法ヲ行ヘハ外邊視力ノ衰弱或ハ網膜剝離若クハ他ノ合併症ニ因スル如キ視界欲損ヲ發見スレド敢テ難ニアラス

又眼球外部ノ検査モ緊要ナル成積ヲ與フル者コソ虹彩癒着症ノ存在特ニ亞篤魯比涅ニ由虹彩ノ模様變色縮眼球緊張ノ増減等ヲ他眼ニ比較リ容易ニ發見シ得ルスレハ合併症ノ性質ニ就テ要目ヲ發見スヘシ若シ年少ノ者ニ於テ白内障特異ノ容觀ヲ呈シ就中以前ヨリ高度ノ近視眼ニシテ他眼ニモ亦廣大ナル后葡萄腫ノ存在スルハ特ニ眼球ノ機能ヲ綿密ニ検査セサル可ラス

以上掲載ノ諸合併症ハ視覺上ニ多少關係ヲ有スルヲ以テ施術ニ先ツテ豫メ注意シ或ハ視力ノ善良トナルヲ推知スル能サハルキハ全ク施術セサルコアリ

又結膜眼瞼或ハ涙器ノ合併症ヲ發見スルキハ手術ニ先ツテ之ヲ除去ス可シ

一眼健全ノ者ニ白内障手術ヲ行フテ可ナル歟ノ問アリ一フオン、グレイフニ氏ハ曰ク若シ果シテ手術ノ効績善良ナリト思考スルキハ例水晶囊截開法或ハ單純線狀之ヲ行ヒ否ヲサレハ寧ロ着手セサルヲ優レリトス然リト雖モ他眼モ亦白内障ノ初起ニ罹リ或ハ白内障既ニ進行シテ患者其職業ヲ操ル能ハサルハ其ノ全ク盲目トナルヲ待テ手術ヲ行フハ甚ク不可ナリ

又白内障ノ成熟ニ至ルヲ待テ初メテ手術ヲ施スヘキ歟ノ問アリ實驗ニ由テ之ヲ觀ルニ全ク曇濁セル白内障ハ水晶囊ヨリ充分ニ排出シ鼻キ者ナリ故ニ通常ハ其成熟スルヲ待ツヲ佳トス然レモ熱期遲延シ白内障兩眼ニ於テ既ニ發育シテ患者操業スル能ハサルニ至ル時ハ其全熟ヲ待テサル者トス又先天或ハ初生兒ノ期ニ於テ發生スル

白内障ニハ可及的速ニ施術スヘシ、何トナレハ、此期ニ發生スル白内障ハ弱視ヲ誘起スルヲアルノミナラス、又容易ニ斜視或ハ眼球震動症ヲ續發スル者ナルカ故ナリ

又一問アリ、兩眼一時ニ手術ヲ行フ可ヘキ歟、曰ク通例先ツ一眼ニ手術ヲ行フ、何トナレハ、第一回ノ手術中患者ノ行狀、治癒經過及ヒ手術ノ成果ニ由リ、往々第二回ノ手術如何ヲ推知シ得ルヲアルヲ以テナリ、然レモ患者事故アリテ一旦醫院ヲ出ルノ後ニ於テ再ヒ手術ヲ受ル能ハス、而シテ其非常ニ施術ヲ希望スルモ、己ムヲ得ス一時ニ二術ヲ行ハサル可ラス

〔一〕瓣狀摘出法 (Lappenection)

〔適應症〕 瓣狀摘出法ハ核ト皮質ト明瞭ニ區分セル白内障ノミニ稱用スル法ニシ、即(一)硬固ノ核ト膠樣軟化或ハ流動セル皮質ヲ有スル老人白内障(二)年少ノ者ニ發生シテ、非常ニ巨大ノ核ヲ有スル白内障(三)前房

中ニ脱落セル白内障ニ適應ス

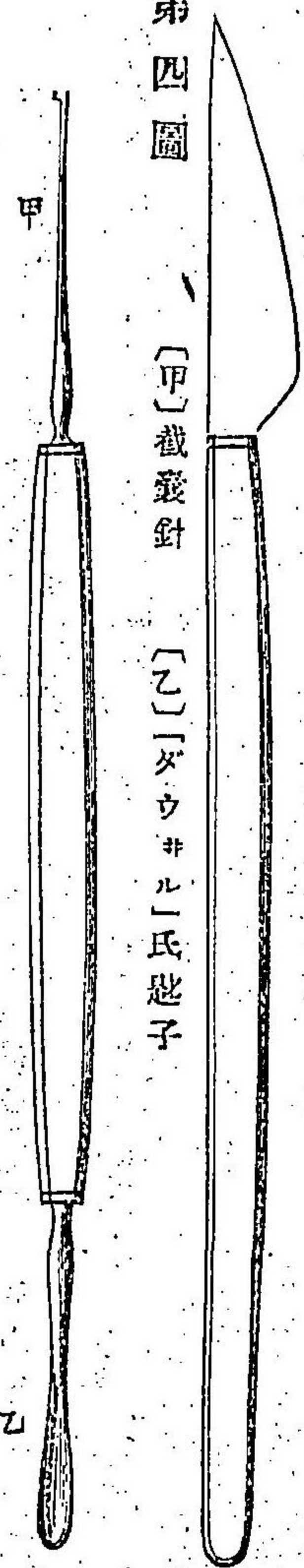
〔手術ノ準備〕 其施術ノ前夜ニ於テ、亞爾魯比涅ヲ點眼シテ瞳孔ヲ可及的十分ニ散大セシム可シ、又施術後總テ安靜ヲ要スルカ故ニ、病牀ニ就テ手術ヲ行フヲ佳トス、其他患者ヲシテ頭部或ハ全體ノ各運動ヲ防ク爲メ、熟練セル看護人ヲ使フ可シ、而シテ病室ハ僅ニ陰暗ニシ空氣ノ流通ヲ善良ナラシム可シ

手術ニ須要ナル器械ハ、眼球固定鑷子、圓及若クハ直刃ノ内障眼刀、第二圖及

第二圖 直刃ノ内障眼刀

第三圖 圓及ノ内障眼刀

第四圖 (甲)截囊針 (乙)「ダウナル」氏鑷子



三圖ヲ及ヒ截囊針第四圖或ハ虹彩小鉤是ナリ  
見ニ

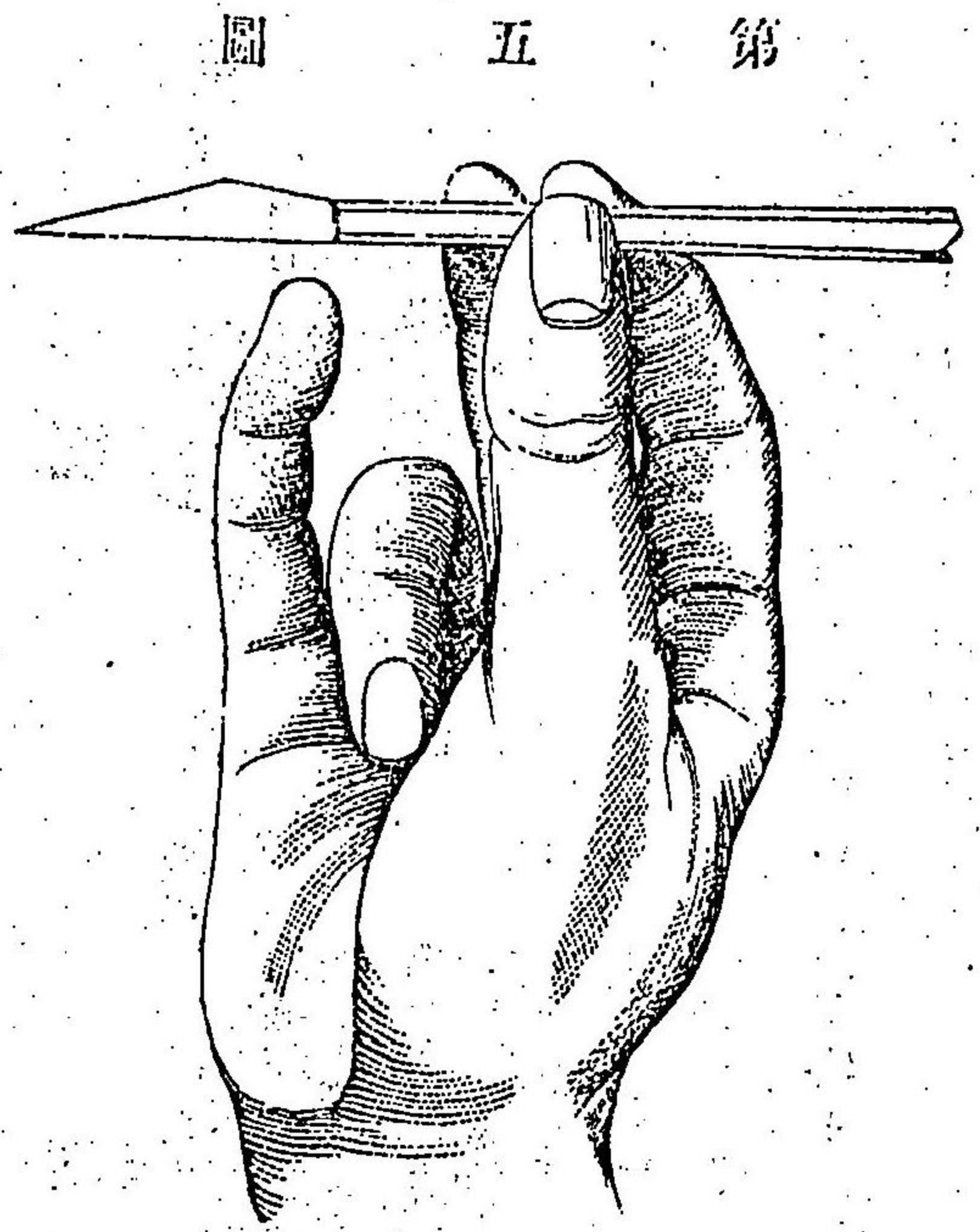
〔施術式〕先ツ健眼ニ輕ク繙帶ヲ行テ之ヲ蔽掩シ患者ヲシテ適宜ニ床上ニ靜臥セシメ手術ヲ受ヘキ眼球左眼ヲ恰好ニ照明ス可シ又一介者ハ患者ノ頭部ヲ固定シ他ノ介者ハ患者頭部ノ後方ニ立テ眼瞼ヲ擴開ス可シ

手術ノ第一節ハ角膜ノ上半部或ハ下半部ニ於テ膜瓣ヲ造成スルニ在リ角膜上部截開或ハ而シ角膜上部截開ハ施術スルニ甚タ困難ナリト雖ニ總テ之ヲ良法トス何トナレハ角膜上部ノ切創ハ容易ニ硝子體脫出ヲ誘發セス加之術后上眼瞼ハ創縁ニ當抵レテ自然ニ繙帶ノ作用ヲナスヲ以テナリ然リト雖ニ(一)瞳孔ノ上縁ト水晶囊トノ癒着ヲ現シ瞳孔下縁ハ全ク遊離セルキ或ハ(二)患者自ラ其眼球ヲ施術中絶エス下方ニ轉置シ能ハサルキハ己ムヲ得ス下部ニ施術セサル可ラサル者トス

〔イ〕角膜下部瓣狀截開

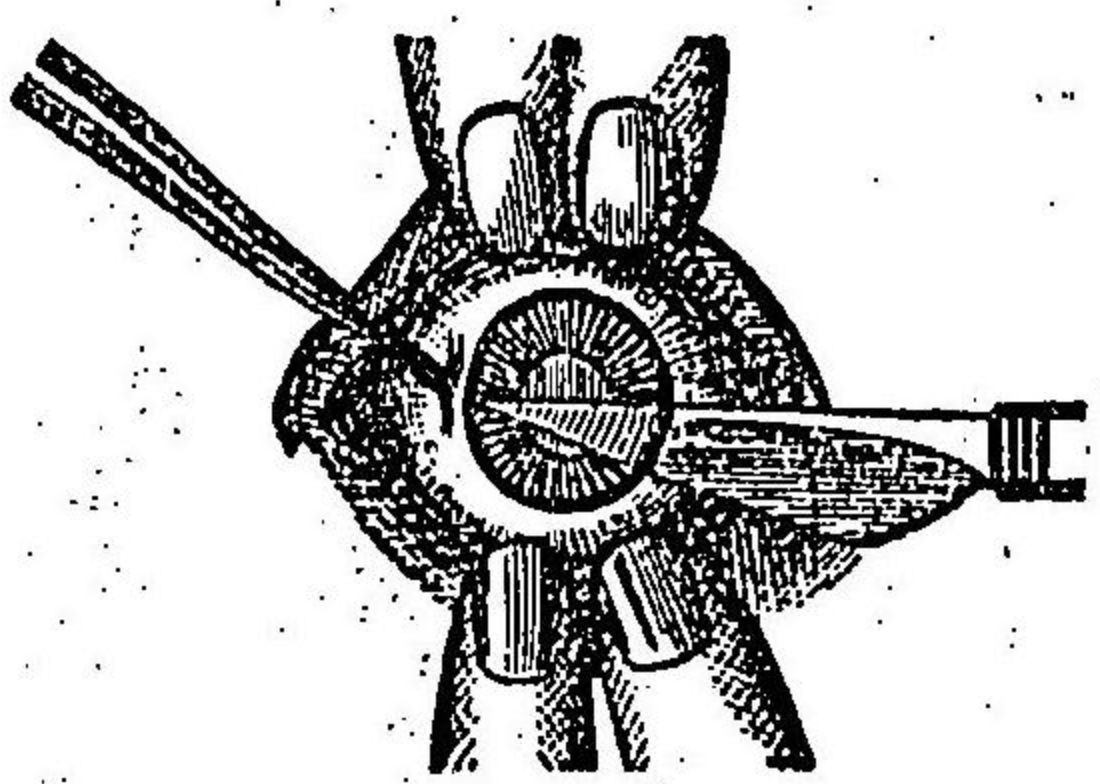
〔手術ノ第一節〕角膜截開

術者ハ先ツ左手ニ眼球固定鉗子ヲ採リ右手ニ內障眼刀ヲ取リ其刃ヲ下方ニ向ルヘシ而シテ固定鉗子ヲ以テ角膜内縁ニ當リ地平線ヨリ少シク上方ニ於テ眼球結膜ヲ狹撮ス可シ但シ鉗子ヲ用ルル患者ヲシテ些ク上外方ヲ瞻視セシムル際ニ於テ

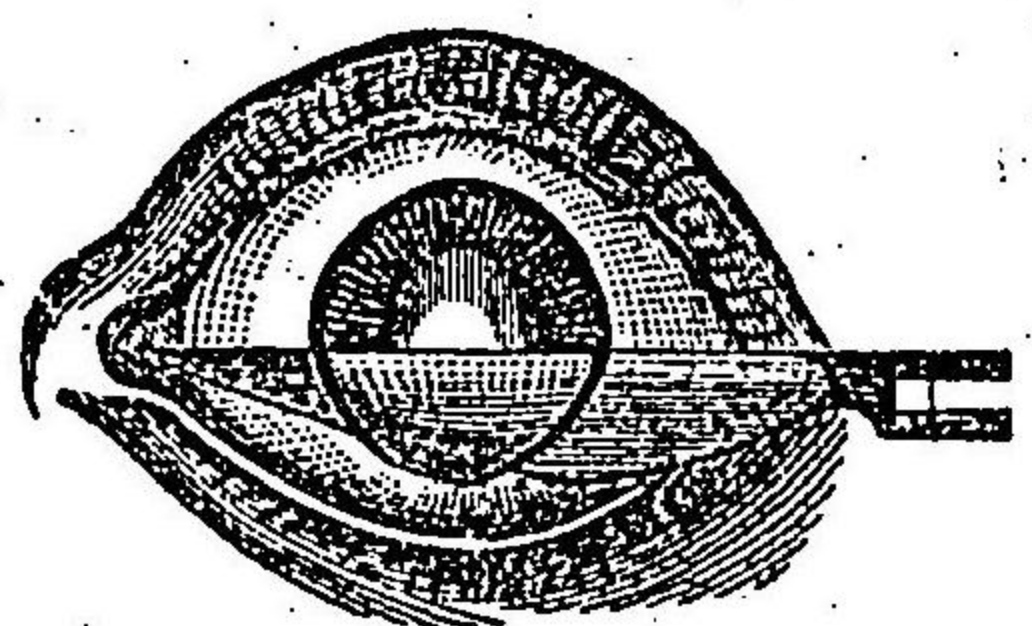


スルヲ良トス又眼球ヲ固定スルニ當リ鉗子ヲ以テ必ズ眼球ニ牽引及ヒ壓迫ヲ受ケシムルヲ勿レ  
內障眼刀ヲ固持センニハ第五圖ニ示ス如ク示指及中指ヲ拇指ニ相對シテ刀ヲ撮ミ環指ヲ手掌ニ向テ屈シ小指ヲ患者ノ頰骨或

第六圖 下部周圍瓣狀截開法



第七圖 同

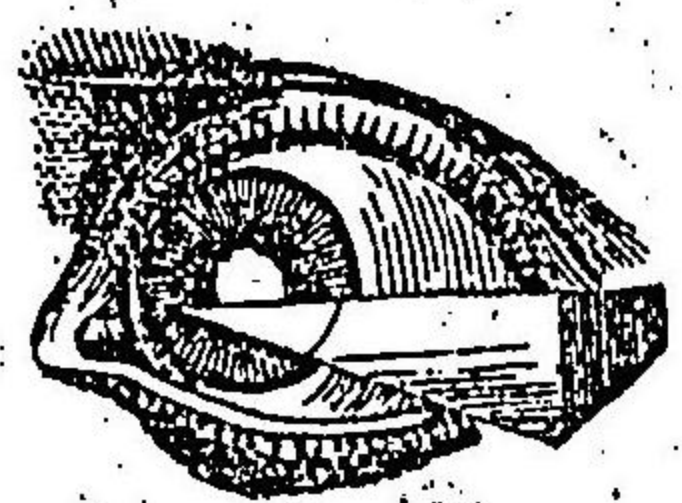


ハ前頭ニ支定スルヲ可ト  
ス、而シテ術者ハ先ツ病眼前  
ニ於テ豫メ刀ノ方向ヲ定  
メ其尖ヲ水平ニシ、刀ヲ下  
方ニ向ケテ虹彩面ト併行  
ニ維持スヘシ、爰ニ於テ術  
者其指ヲ伸張セハ刀ヲ適

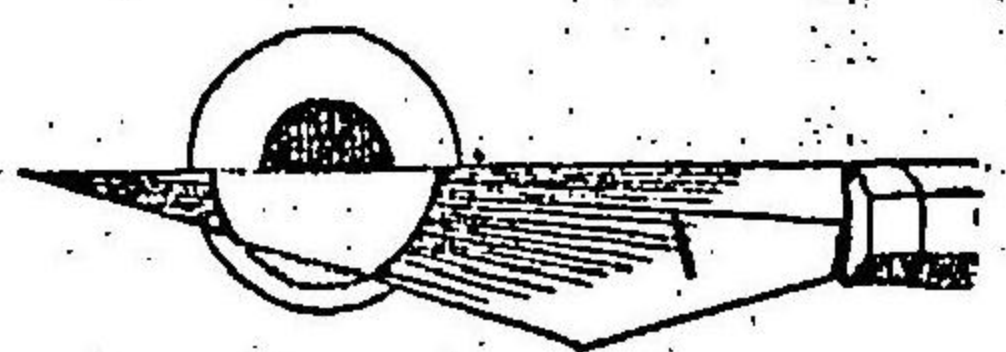
宜ニ使ヒ得ルヲ確知スルキハ、刀尖ヲ角膜ノ外縁ニ於テ角膜横經下一  
「ミリメートル」ノ所ニ刺入ス可シ  
舊式ニ依レハ、角膜中ニ於テ膜瓣ヲ造成ス、即チ結膜輪ヨリ「ミリメー  
トル」兩膜中央ノ方向ニ於テ刀ヲ送入及ヒ貫出ス  
新法及ヒ舊法ノ差異ハ、前後ノ圖式ヲ比較一覽シテ明瞭ナル可シ、即第  
六及ヒ第七圖ハ新法「ヤコブ」ニ依ル瓣狀截開ヲ示シ、第八及ヒ第九圖ハ

舊法ヲ示ス

第八圖 舊法下部瓣狀截開圖



第九圖 同



刀尖既ニ前房内ニ至ルモ、術者ハ刀背ヲ  
水平ニ維持シ、刀面ヲ虹彩前面ト相併行  
シテ漸ク送入シ、刀尖角膜對縁ニ至テ結膜  
輪ニ貫出ス可シ、次テ術者ハ三指ヲ伸張  
シテ尙ホ刀ヲ内眥ノ方向ニ進メ、瞳孔ノ  
下縁全ク刀刃ノ後方ニ隠滅スルヲ度ト  
シテ固定鑷子ヲ去リ、刀柄ヲ僅ニ顛顛部

ニ傾歛シ、兼テ眼球ヲ微ニ外方ニ廻轉セシメ、尙ホ刀ヲ進メテ以テ截開  
ヲ終フ可シ

今當ニ全ク角膜ヲ截開シ終ラントスルニ方リ、術者ハ刀ヲ可及的徐々  
ニ運動シ、之ヲ抜去スル際、刀尖ヲ下方ニ輕壓シテ以テ截開シ終ルヲ佳  
トス、蓋シ斯ノ如クスルハ、刀ノ卒然他ニ逸スルト、角膜ノ牽引トヲ防

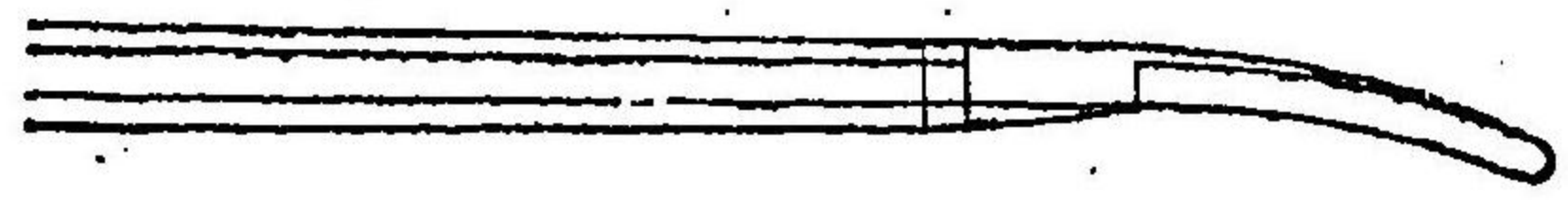
キ、角膜縁ニ正規ノ弓狀截開ヲ爲シ得ルモノナリ  
上式終テ介者ハ靜ニ眼瞼ヲ放緩シ、術者ハ刀ヲ拔去シ、患者ヲシテ睡眠  
ニ就ケル如ク閉眼セシム可シ

〔第一節中偶發スル障害〕今内障眼刀ヲ穿入スルニ當リ、誤  
テ適宜ノ部位ヨリ上方或ハ下方ニ於テスルモ其差異大ナラサル  
キハ、之ニ關セス手術ヲ施行シ、只刀ヲ貫出スルノ部位ニ注意シ、以  
テ恰好ノ膜瓣ヲ造ルヘシ、若シ誤テ結膜輪ヨリ遠隔ノ部位ニ刀ヲ  
穿入シ、而シテ刀刃ヲ前後ニ傾ルモ、創口ヲシテ角膜縁ニ來ラシム  
ル能ハスノハ、先ツ刀ヲ拔去シ、暫ク其術ヲ停ムルヲ最良トス、其他  
不正、微小若クハ巨大ノ膜瓣ヲ造成シ、以テ手術ノ后期ニ避除スヘ  
カラサル不幸ヲ將來スルモノアリ  
刀若シ前房内ヲ通過スル際、虹彩前面ニ併行ノ行路ヲ逸スルキハ  
刀尖角膜或ハ屢、虹彩中ニ穿入スルモノナリ、故ニ刀尖前房ニ達シ、

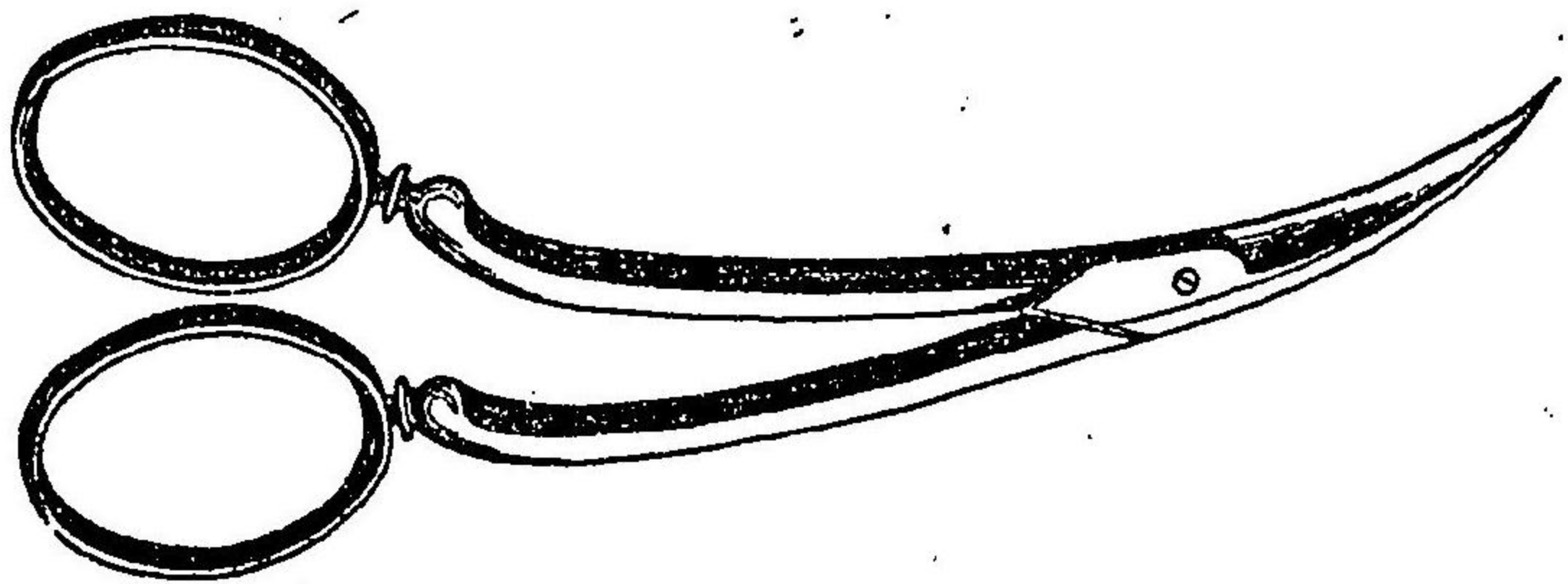
テ、直ニ虹彩ニ抵觸スルキハ、單ニ刀柄ヲ傾向シ、以テ虹彩ヲ避離ス  
可シ、但シ此際刀ヲ拔去ルヲ禁ス、何トナレハ、若シ之ヲ行フキハ、房  
水直ニ流出スルヲ以テナリ、又刀尖既ニ虹彩中ニ深入シ、之ヲ除去  
セントスル際、房水流出スルキハ、刀ヲ拔去シ、暫ク手術ヲ間歇スル  
ヲ最良トス、次テ眼球回復スルヲ待テ再ヒ之ヲ行フヘシ  
若シ虹彩瞳孔縁ノ近傍ヲ損傷スルキハ、刀尖ヲ避離セン爲メ手術  
ヲ中止スルヲ要セス、唯手術後ニ虹彩ノ損傷部ヲ切除スヘシ  
貫出部ハ刀尖ヲ早ク角膜、或ハ遲ク鞏膜ニ刺入スル由リ不正トナ  
ル者ナリ、今誤テ其貫出部ヲ結膜輪ヨリ僅ニ角膜中心ノ方向ニ爲  
スルハ、刀刃ヲ適宜ニ後方ニ傾クルニ依リ、創口ヲ再ヒ結膜輪ニ  
來ラシムルヲ得、又刀尖ヲ遠ク鞏膜部ニ貫出スルキハ、刀刃ヲ前方  
ニ廻轉スヘシ  
房水若シ手術中忽チ流出スルキハ、虹彩刀刃ノ前方ニ來ルヲ間之

アリ、而シテ今既ニ刀尖ヲ貫出スルノ后、此障害ニ逢フハ、暫ク示  
 指ノ尖端ヲ以テ角膜ヲ輕摩シ、以テ虹彩ヲ牽縮セシメ、速ニ角膜截  
 開ヲ終フヘシ、然レモ此際虹彩ノ一片ヲ截除スルト多シト雖モ之  
 レ免ル能ハサル者ニシテ、若シ之カ爲メ虹彩中ニ一孔ヲ生スルハ、  
 手術ノ終ニ臨ミ此孔ト瞳孔間ニ展張セル虹彩橋狀片ヲ截離ス可  
 患者不穩ニ強ク眼瞼ヲ閉鎖シ、或ハ刀ヲ穿入貫出スルノ不正ナ  
 ルニ因テ預メ膜瓣ノ過大若クハ過小ナルヲ察知シ、又膜瓣過小ニ  
 シテ創口ヲ擴開セサルヲ得サルキ等ニ於テハ、完全ノ膜瓣ヲ造ラ  
 スシテ、其尖端ニ橋狀片ヲ殘留スルヲ良トス、「デスマ」氏說此橋狀片ハ手  
 術第二節ニ於テ離斷ス可キ者ニシテ、容易ニ虹彩及ヒ硝子體ノ脱出  
 スルヲ防キ、加之創口ヲ擴開スル際、若クハ手術ノ第二節ニ於テ患  
 者靜穩ナラサルモ、容易ニ眼球ヲ固定シ得ルノ用ヲナス者ナリ

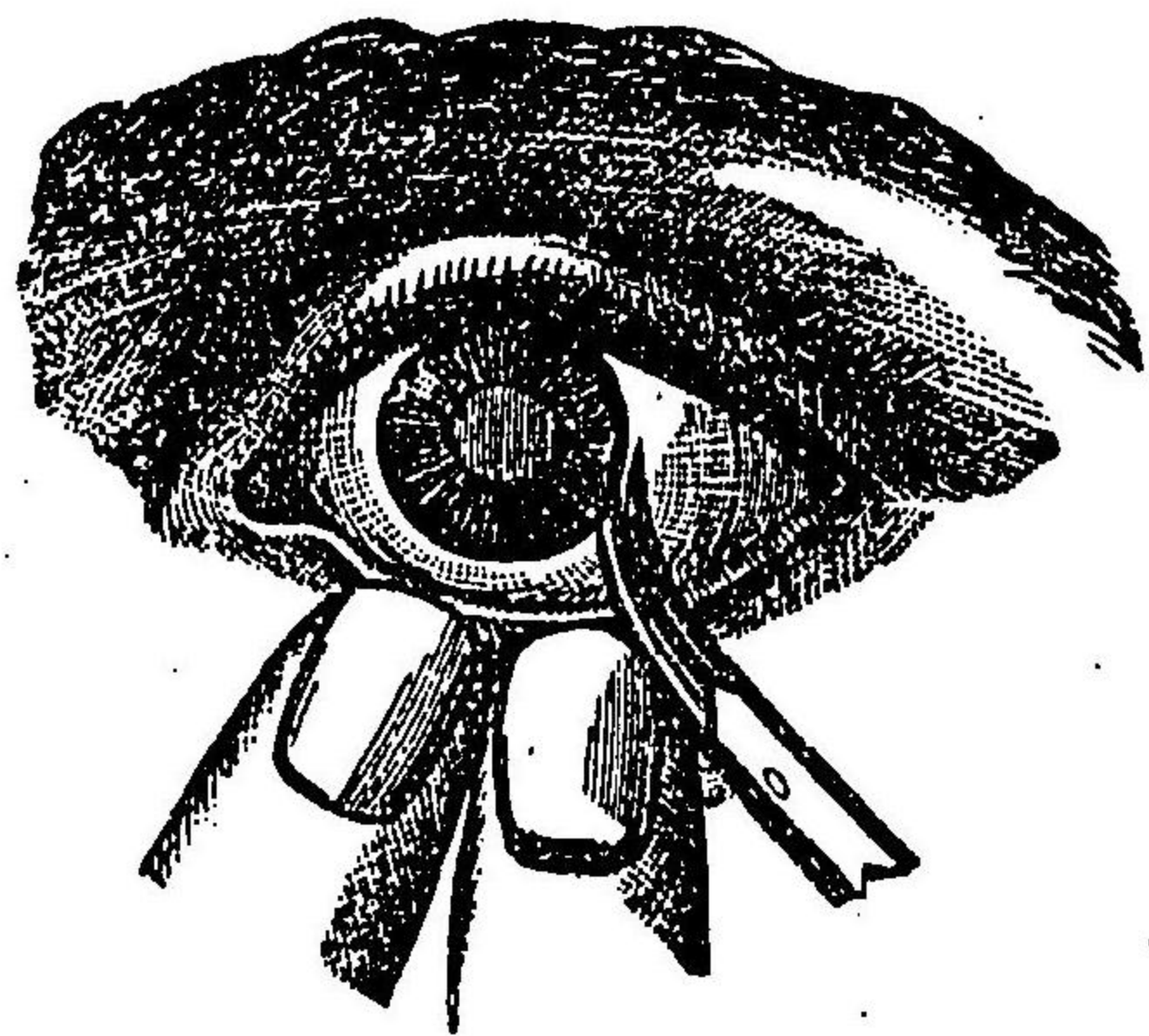
第十四圖 及刀



第十圖 一狹



第二十圖 角創膜ヲ覆開スル



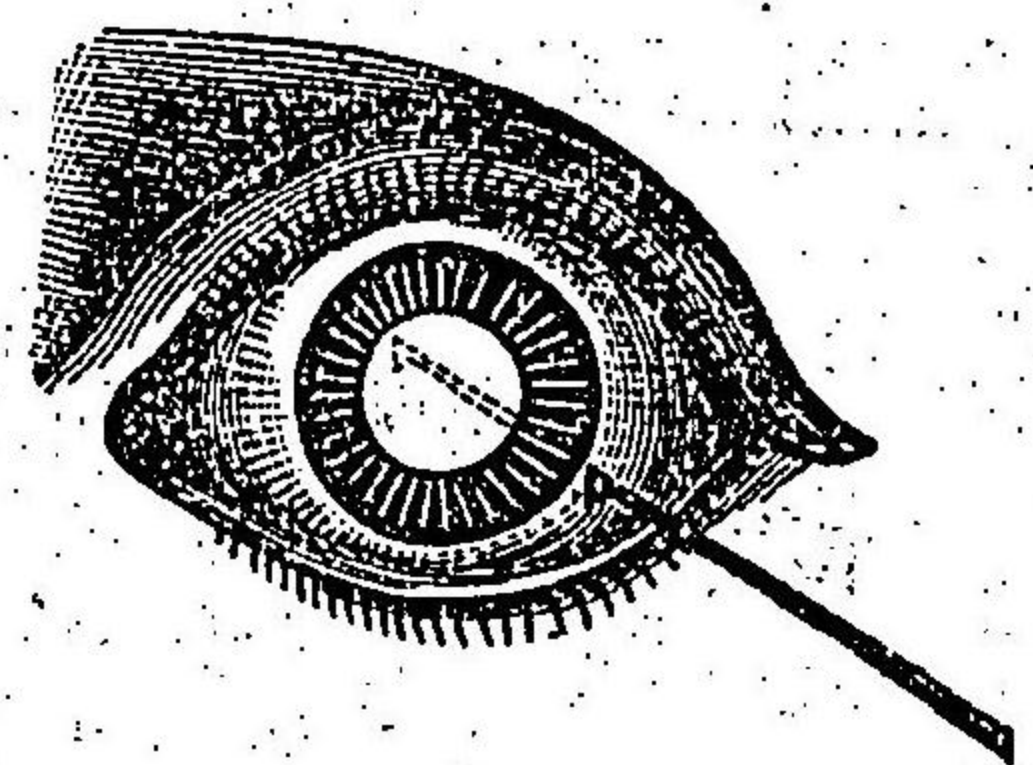
今弓形創口微小ニシテ之ヲ擴開セ  
 ント欲スルハ、第十圖ニ示ス如  
 キ凹刃ノ刀、或ハ第十一圖ノ如キ  
 彎曲セル剪刀ヲ用フヘシ、就中剪  
 刀ハ速ニ創口ヲ擴開スヘシ、又眼



球ヲ壓迫スルコトナキヲ以テ通常之ヲ優レリトス 第十二圖

〔第二節〕水晶囊截開

患者ヲシテ暫時休憩セシメ、柔軟ナル布片ヲ以テ眼瞼縁ヲ拭ヒ、而后再ヒ介者ヲシテ慎テ上眼瞼ヲ掣上セシメ、術者ハ自ラ眼球ヲ壓迫スルコトナク、下眼瞼ヲ掣下ス可シ、然レモ上眼瞼ハ決シテ之ヲ強テ掣上ス可ラス、只輕シ固持シテ以テ患者其眼瞼ヲ強閉スル際之ヲ放緩スヘシ、爰ニ於テ術者ハ截囊針ヲ把リ、蓋リニ角膜瓣ヲ



第三十圖 截囊針送入ノ圖

牽上スルコトナク、只針尖ヲ創口ノ鞏膜縁上ニ輕壓シ、創縁ヲシテ彫開セシメ、以テ針尖ヲ前房ニ送入スヘシ 第十三圖 但シ其之ヲ送入スルニ當リ、針背ハ上方ニ向ヒ針尖ハ平ニ角膜後面ニ抵觸スル如クシ、且ツ針尖瞳孔部ニ達スル前角膜後面ヨリ離去セサルヲ可トス、如斯ニシテ截囊針背ヲ虹彩ニ抵觸セサル如ク注意シテ瞳孔ノ上縁ヨリ些少ノ距離ニ達セシメ、針ヲ

微ニ廻轉シテ針尖ヲ水晶囊ニ向ケ、以テ針ヲ瞳孔下縁近傍ニ至ルマテ牽出スルニ依テ囊ヲ截開スヘシ、而シテ此動作ノ際截囊針ノ頸部ヲシテ誤テ創縁ニ箱入スルコト勿レ、故ニ截囊針ハ初メ其背ニ向シテ之ヲ拔去シ、其際蓋リニ角膜瓣ヲ牽上スルヲ禁ズ、而シテ既ニ器械ヲ眼中ヨリ拔去セハ、靜ニ眼瞼ヲ放下ス可シ

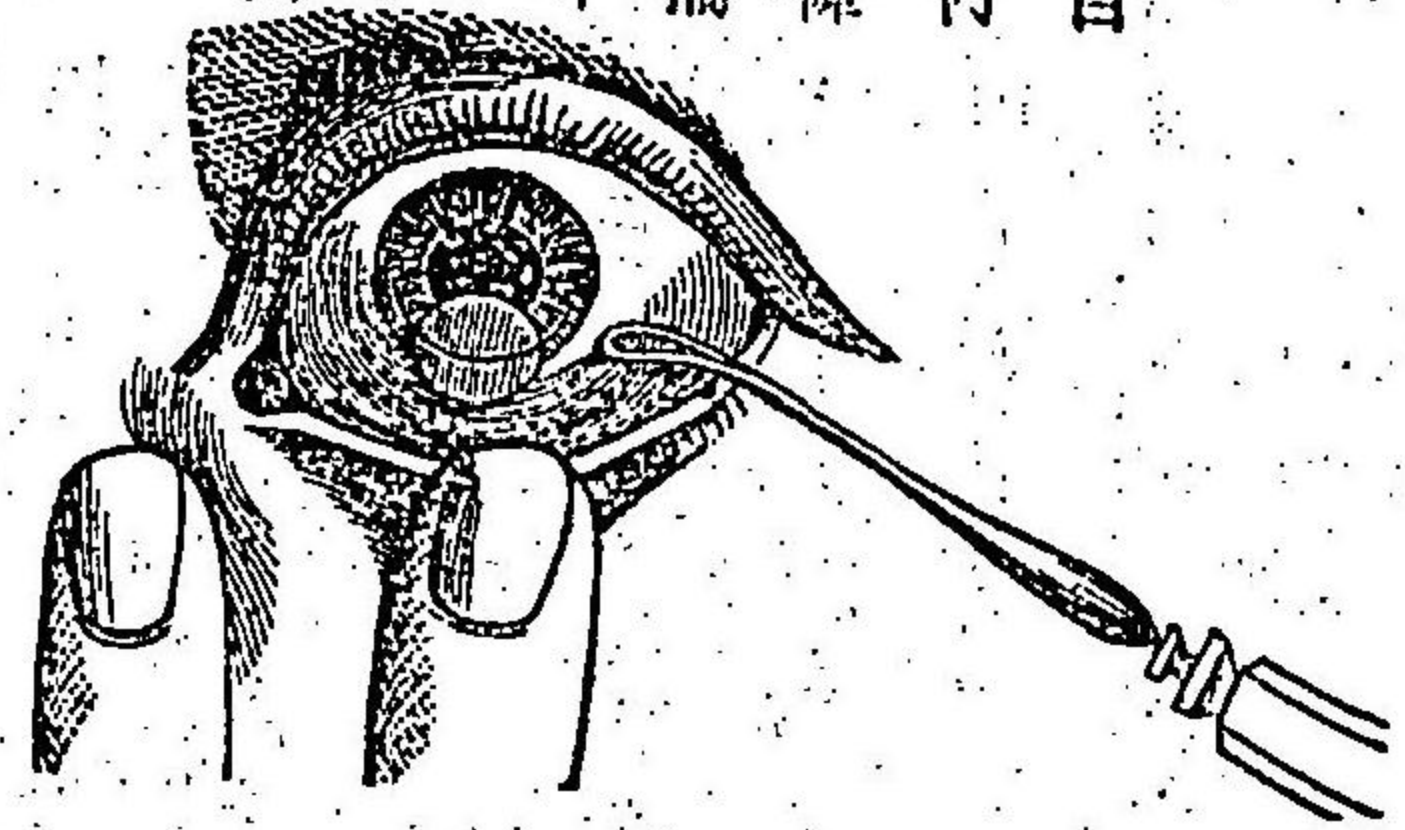
〔第二節中偶發スル障害〕第二節ノ初メニ於テ上眼瞼ヲ掣上

ズル際、往々虹彩脫出ヲ來ス下アリ、然ルモハ角膜ヲ輕摩シ括約筋ノ收縮ヲ促シ、或バゴウケール氏匙ヲ用テ脫出セル虹彩ヲ本位ニ復ガルヲ以テ療法ト爲ト雖モ、是レ全ク危險ナシト云フ可ラス、何トナレハ脫出セル虹彩片ハ、容易ニ炎症ノ起首點トナルコトアレハナリ、故ニ介者ヲシテ、上眼瞼ヲ少ク掣上セシメ、脱出セル小片ヲ切除スルヲ佳トス、但シ其方法ハ后章ニ讓ル

截囊針ヲ送入スル際精細ニ上記ノ方法ニ從フモハ、容易ニ虹彩ニ

鉤スルヲ免レ得ヘシト雖厄不幸ニシテ此難ニ係ルキハ勤メテ器  
 械ヲシテ虹彩ヨリ拔去スヘシ但シ是ニ由テ虹彩甚シキ牽引ヲ受  
 ルルハ破傷セル細片ヲ切除スルヲ畏トス  
 水晶嚢ヲ截割スルニ困難ヲ極ムルコトアリ特ニ過熟ノ白内障ニ  
 於ルカ如ク嚢ノ硬固ナルトニ甚トス然ルルハ針尖ニ輕壓ヲ與テ  
 以テ嚢ヲ截開スヘシ但シ其際硝子膜破損及ヒ硝子體脫出ノ危險  
 ヲ免レンニハ素ヨリ巧手ヲ要スル者ニシテ習熟ニ由ラサレハ之  
 ヲ自得スル能ハサルモノナリ而シテ針尖既ニ白内障實質中ニ穿入  
 セハ直ニ壓迫ヲ絶止シ器械ヲ嚢截開中輕ク保持スルヲ佳トス若  
 シ斯ノ如クナラサルキハ容易ニ水晶體脫位ヲ將來スル者ナリ又  
 嚢截開完全ナラサルノ疑問アルキハ截嚢針ヲ眼中ヨリ拔去スル  
 ノ前再ヒ上記ノ方法ヲ守テ截開ヲ試ムヘシ而シテ若シ嚢ノ充  
 全ナルルハ水晶體少シク前方ニ突出シ瞳孔著ク散大シ角膜瓣ハ

第十 五 圖  
 白 障 隔 摘 出 圖



微ニ上起シテ以テ截嚢針ヲ去ルニ便ナラシム  
 若シ角膜瓣ノ尖端ニ角膜或ハ結膜橋狀片ヲ殘留スルキハ水晶嚢  
 第十四圖「デスマル」氏截嚢針



截開ヲ行フニ「デスマル」氏截嚢針ヲ  
 用ルヲ佳トス此針ハ背側ニ刃ヲ有  
 シ嚢ヲ截開スルノ后角膜截開ヲ爲

シ得ル者ナリ又此手術節ニ至ル迄眼球ノ固  
 定ヲ要スルコト時ニ之アリ然レモ此際白内障  
 ノ急劇ニ排出スルヲ避ント欲セハ角膜截開  
 ノ將ニ終ントスルニ當リ固定鑷子ヲ除去シ  
 可及的徐々ニ角膜ヲ截開スルヲ法トス

〔第三節〕白内障摘出 術者ハ左手ノ拇指ヲ用

テ慎テ上眼瞼ヲ牽上シ右手ノ示指及ヒ中指ヲ以  
 テ靜ニ下眼瞼ヲ製下シ兼テ患者ヲシテ上方ヲ瞻

視セシムヘシ、蓋シ此手術ニ依リ水晶體ハ屢排出スル者ナリ、若シ白内障ノ最大直徑角膜創口ニ來ルキハ、ダウキール氏匙子第四圖ヲ以テ其排出ヲ輕易ナラシムルモ亦可ナリ第十五圖ニ示ス如ク

今此患者ノ動作ニ由テ水晶體ノ排出セサルキハ、術者其指ヲ眼瞼上ニ當抵シテ輕壓ヲ行フ可シ、卽上眼瞼上ノ手指ハ水晶體上縁ヲ壓スルニ備ヘ、下眼瞼ニ在テハ鞏膜上ニ輕キ對壓ヲ行フ者ニシテ、初メハ極メテ輕ク壓迫シ、漸増壓シテ水晶體ノ最大直徑瞳孔ヲ通過スルニ至ラハ、押壓ヲ減シ、水晶體縁ヲサニ創口ヨリ排出スルヲ竣テ之ヲ止ムヘシ、若シ此方法ニ依ルモ水晶體排出セサルキハ、水晶體截開ノ充分ナラサルカ或ハ瞳孔ノ狭小ナルカ、將テ角膜瓣ノ細小ナルニ由ル者ナリ、故ニ先ツ甲ニ於テハ再ヒ截囊針ノ使用ヲ要シ、乙ニ在テハ直ニ虹彩ノ小片ヲ切除スルニ依リ、白内障ハ容易ニ排出スルモノトス、今此等ノ妨害ヲ驅除スルモ、白内障猶ホ未ク排出セサルキハ「シリチエ」氏匙子或ハ之ニ一等優

第十六圖 「クリチエ」氏匙子



ナルハ金屬線ノ係蹄ヲ水晶體ノ後方ニ送入シテ以テ之ヲ摘出セサルヲ得ス

又介者ノ罪ニ由リ、或ハ患者強劇ノ押壓ニ依リ、或ハ眼球ノ特異素因ヨリ、水晶體摘出前ニ於テ硝子體脫出ヲ將來スルハ、匙子ヲ用テ速ニ摘出法ヲ終ル可シ

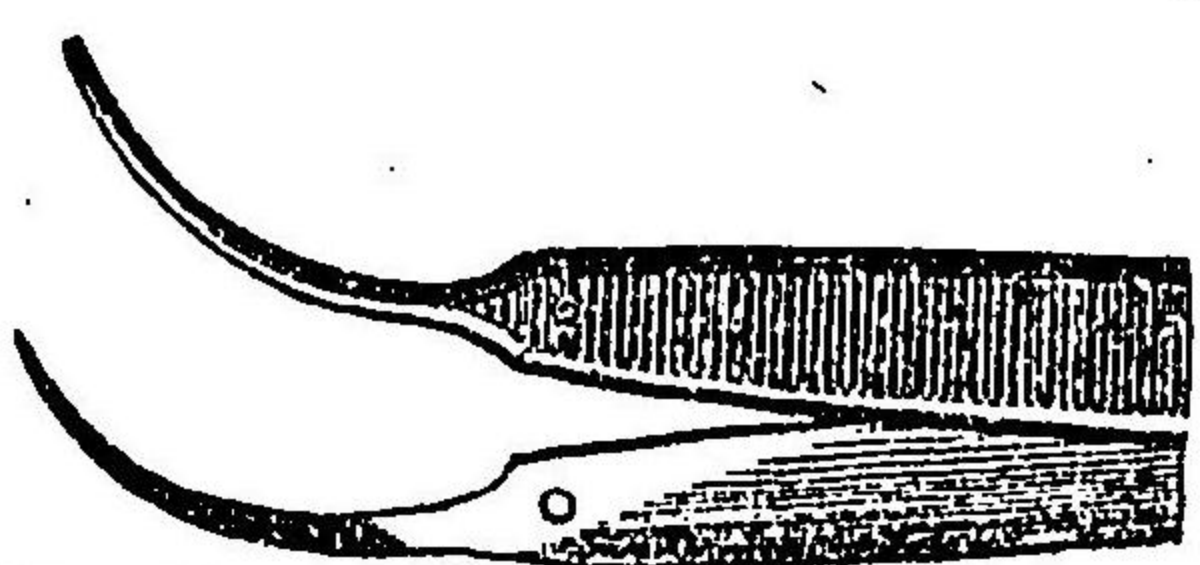
以上第三節ニ於テ恙ナク水晶體ヲ摘出シ終ルハ、暫時患者ヲシテ其眼瞼ヲ放下シテ休憩セシメ、次テ第四節ノ方術ニ移リ、瞳孔及ヒ結膜囊ヲ清淨ニシ、彼此ニ遺殘セル皮質片ヲ除去シ、創口ノ好ク符合セルヲ審查ス可シ

先ツ下垂セル上眼瞼上ニ拇指ヲ觸レ、輕ク輪狀ノ摩軋運動ヲ爲シ以テ

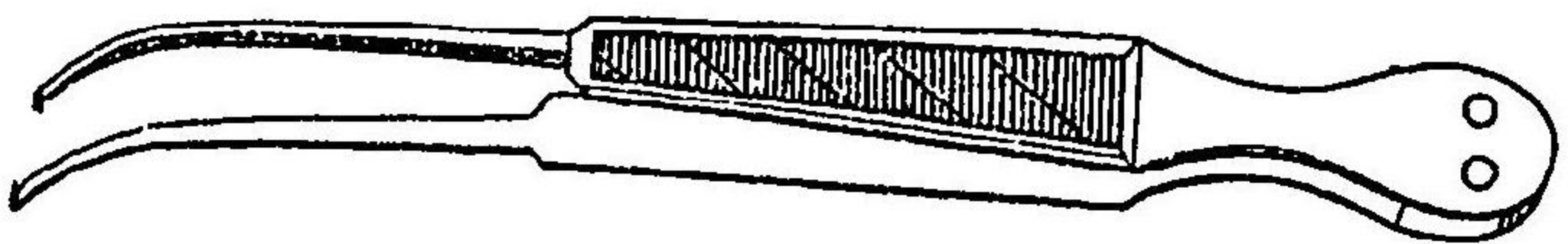
虹彩ノ後方ニ潛在セル皮質片ヲシテ瞳孔部ニ露出

セシム可シ、而シテ此輕壓ニ依リ上眼  
瞼ヲ漸々下方ニ押下スルハ、皮質片  
前方ニ移動シテ遂ニ創口ヨリ排出ス  
ル者ナリ、又皮質片全ク排出スルノ後  
ニ至リ水晶嚢ニ曇濁ヲ發見セハ、小鉤  
ヲ有スル鑷子第十七圖或ハフオン、グレ  
フ、氏水晶嚢鑷子第十圖ヲ以テ之ヲ牽出ス可シ、但シ虹彩  
ヲ損傷セサランカ爲ニ鑷子ヲ閉鎖シテ之ヲ角膜後面ニ沿  
テ送入シ、以テ硝子嚢ヲ鉤スルコトナク、渾濁ヲ挾撮シ之ヲ  
牽出スルヲ法トス

第十圖 フォン、グレ氏水晶嚢鑷子



第十七圖 彎曲セル小鉤鑷子



今上法ニ依リ皮質ノ殘塊及ヒ水晶嚢ノ曇濁、瞳孔部ニ存  
セサルハ、瞳孔ハ深黒色ヲ呈ス者ナリ

玆ニ於テ角膜瓣ノ善ク癒合ス可キヤ否ヲ檢セサル可ラス、蓋シ此癒合  
ヲ障害スル所ノ原因タルヤ、創口ニ皮質ノ筋入、或ハ虹彩脫出、或ハ硝子  
體箱頓ニ外ナラス

今皮質ヲ創口ヨリ除去センコトハ、暫ク房水ノ再ヒ積蓄スルヲ待テ創縁  
ヲ少シク哆開セシム可シ、然ルハ、噴出セル房水ニ依リ、白内障遺殘物  
ヲ押流スルモノナリ、然レモ是ニ據リ、其効ヲ見サルハ、硬護膜製匙子  
ヲ以テ創口ノ鞏膜縁ヲ鼻側ヨリ顯顯側ニ向ク輕摩スヘシ

角膜創口ノ癒合ヲ障害スル虹彩脫出ハ、直ニ之ヲ除去スヘシ、「ウシケル」氏  
ハ硬護膜製ノ小籠ヲ以テ之ヲ前房中ニ却送シ、而シテ「エゼリン」ヲ點眼セリ、  
硝子體ハ硝子嚢ト共ニ創間ニ箱入シ、以テ角膜瓣ヲ上起スルコトアリ、然  
ルハ、剪刀ヲ把テ硝子嚢ニ小孔ヲ穿テ、硝子體液ノ數滴ヲ流出セシム  
可シ

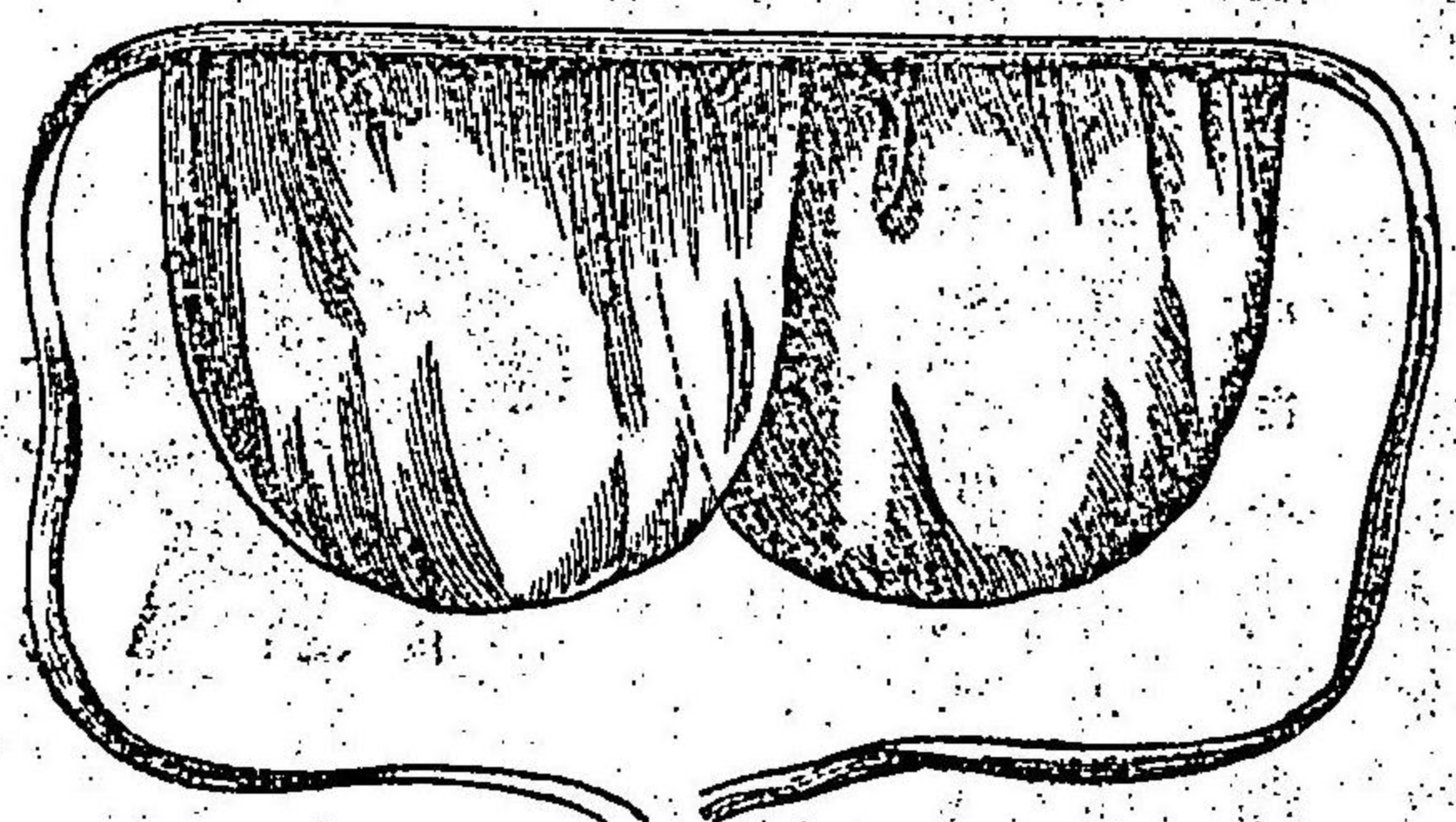
角膜瓣歪形ニシテ、創縁互ニ善ク密接スル能ハサルハ、壓迫繃帶ヲ施

シテ以テ、不良結果ノ將來スルヲ防クハシ  
 又水晶體摘出後ニ至リ、角膜弛緩シテ平坦トナリ、皺裂ヲ生スルノミナ  
 ラス、深ク陥没スルト間之アリ、是レ房水ノ蓄溜スルニ依テ、再ヒ尋常ノ  
 穹窿ニ復スルモノナレド、亦堅固ノ壓迫繃帶ヲ施スニ非サレハ、其舊ニ  
 復セサルトアリ、ハズテ氏ハ角膜ノ弛緩セル者ニ、硝子體ヲ刺穿シテ  
 其液ヲ前房中ニ導ギ、角膜天然ノ穹窿ヲ再造シ、以テ創縁ヲ密接スルノ  
 方法ヲ行ベリ。

〔繃帶及手術后措置〕

施術セル眼上ニハ、壓迫繃帶ヲ施シ、他眼ハ  
 二三條ノ英吉利絆創膏ニテ鎖閉スベシ、又病室ハ帷幕ヲ垂レテ少シク  
 暗黒ニシ、患者ハ百事ヲ拋棄シテ、一切看護人ニ委託シ、以テ二十四時間  
 全ク安靜ナルヲ要ス、又此時間ニハ咀嚼運動ヲ避ル爲メ唯液様ノ食物  
 ノミヲ與フベシ、而シテ通例施術日ノ晩景ニ至リ、患者ヲ診問シ、若シ患者  
 眼中ノ疼痛ヲ訴ヘサルノミナラズ、繃帶モ猶ホ善ク附着スルトハ、翌朝

第十圖  
 覆眼布

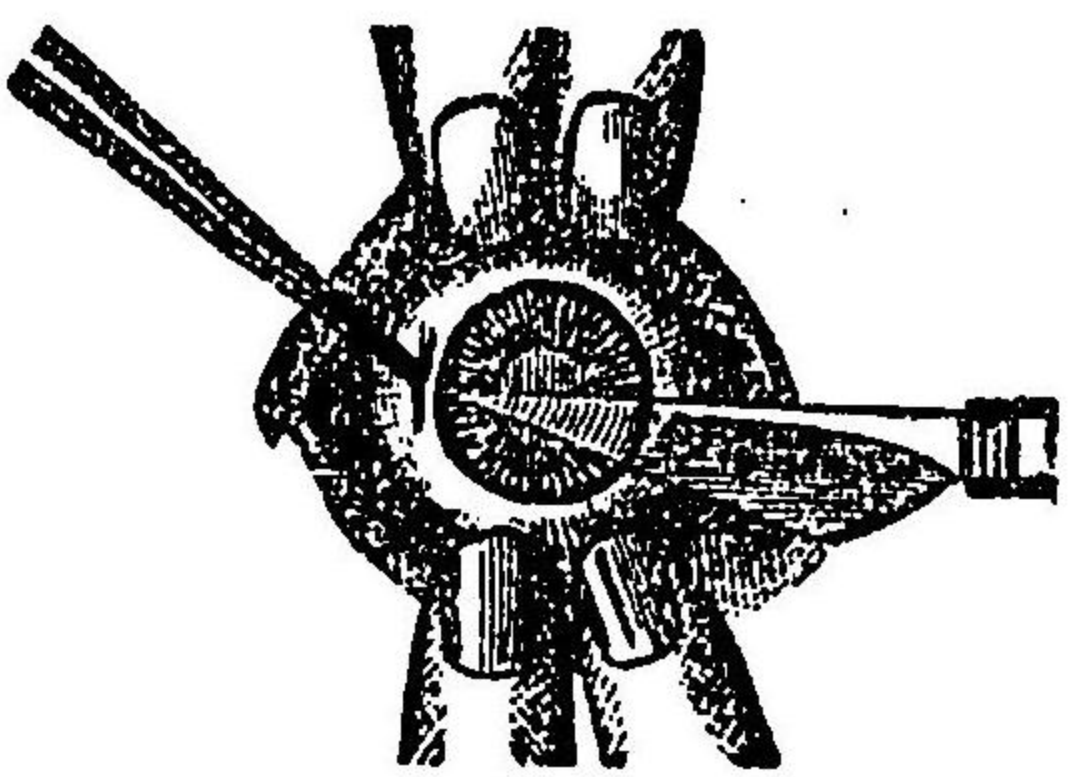


至ルマテ之ヲ用フベシ、若シ患者興奮性ニシテ自ラ安眠スル能ハス  
 ンハ、莫爾比湿度下注入ヲ行ヒ、或ハ抱水シ、ロ  
 ラールヲ投ス、次テ翌朝ニ至リ繃帶ヲ新調シ、  
 爾后之ヲ交換スルト一日二回ニシテ、大約五  
 六日ヲ經ルノ后、唯夜中ノミ之ヲ施シ、日中ハ  
 單純ノ防護繃帶ヲ行フ、而シテ患者毎日一二時  
 間起居スルモ、敢テ害ナシトス、次テ八日乃至  
 十日後ニハ、患者ニ黒絹ノ覆眼布ヲ與ヘ、后ニ  
 ハ、暗色ノ眼鏡ヲ裝用セシメ、羞明ノ減スルト  
 否ヲサルトニ從テ、或ハ第二週ノ終或ハ第三  
 週ノ初メニ於テ退院セシム可シ。

〔角膜上部鑷狀截開〕

準備ハ下部截開法ニ於ルト同一ナリ、今若シ左眼ニ施術セント欲セハ

第二 十 圖  
角 膜 上 部 截 開



術者ハ患者ニ對シテ坐ヲ占メ、又右眼ヲ手術スルニ右手ヲ以テ之ヲ行ハント欲ヒハ、患者頭部ノ後方ニ立ツヲ佳トス、但シ介者ハ常ニ術者ニ對居スヘシ

此術式ハ先ツ眼球固定鉗子ヲ以テ角膜横徑ヨリ三ミリメートル下方ニ當テ眼球結膜ヲ箝撮シ、内障眼刀ノ刃ヲ上方ニ向ケニ示ス如ク上記ノ方法ニ依テ以テ角膜瓣ヲ造ルヘシ

第二節ハ下瓣ヲ造成スルニ比スレハ甚ク困難ナリ、何トナレハ眼球ハ常ニ上方ニ廻轉スルノ癖アルヲ以テナリ、故ニ未熟ノ術者ニシテ特ニ患者不穩ナルキハ、角膜瓣ノ尖端ニ角膜若クハ結膜橋狀小片ヲ遺殘シ、以テ眼球ヲ固定シナカラニ、水晶囊截開ヲ行フヲ佳トス  
第三節ニ於テハ下部截開ニ於ル如キ手工ヲ以テ水晶體ヲ排出セシム

可シ、此際主トシテ右手ノ示指及ヒ中指ヲ以テ水晶體下縁ニ當リ輕壓ヲ行フハ勿論ニシテ、總テ其他ノ手術ハ下部截開ニ於ルト同一ナリ、但シ患者隨意ニ其眼球ヲ下方ニ轉スル能ハサル由リ、脫出セル虹彩ヲ切除シ能ハサルト、皮質排出ノ困難ナルトハ言テ贅セサル所ナリ

瓣狀摘出後偶發スル障害

手術後二三時間眼部ニ微痛ヲ覺ルハ別ニ意トスルニ足ラズ、老人ニ在テハ此症候全ク疼痛ナキニ比スレハ却テ佳良ナルカ如シ、然レモ疼痛夜中ニ至ルモ止マヌシテ安眠スル能ハサルキハ、莫爾比涅ノ皮下注入或ハ抱水シロラールヲ與フヘシ

患者若シ手術ノ翌日若クハ其后ニ至ルモ、眼球内或ハ前額及ヒ頭部ニ疼痛ヲ訴ルキハ、燭光ヲ用テ側方ヨリ直ニ眼内ヲ照照シ、或ハ凸面照子ヲ副用シテ眼部ヲ審査スルヲ緊要トス、然ルキハ多クハ角膜瓣好ク接合セスシテ、其縁ニハ屢既ニ帶黃白色ノ滲潤アリテ角膜ノ中心ニ向テ

灰白線條ヲ派出スルヲ發見スヘシ而シテ此等ノ餘症ハ未タ眼瞼ヲ開關セザル前既ニ上眼瞼ノ浮腫及ヒ饒多ノ淚漏アルニ依テ預メ推知シ得ル者ナリ蓋シ斯ノ如キ化膿ノ初期ヲ遏止シ且ツ角膜瓣ノ接合ヲ營爲スルノ最良法ハ堅固ノ壓迫繃帶ヲ施スニ在リ但シ眼胞ニ水蛭法ヲ施シ眼胞ニ水蛭ヲ貼スルハ却テ良効ヲ見スシテ徒ニ障害ヲ招クト多シ又疼痛持續ノ長短ニ依テ屢繃帶ヲ交換スヘシ總テ其交換前ニハ十五分時間眼胞ニ加密列ノ溫捲法ヲ施シ石炭酸或ハ水楊酸溶液ヲ以テ綿密ニ結膜囊及ヒ創口周傍ヲ洗滌スヘシ且ツ疼痛アル者ニハ莫爾比涅皮下注入ヲ施シ緩解スルモノナリ

又手術後二十四時乃至四十八時間ヲ經テ上眼瞼甚シク浮腫シ光澤ヲ放チ加之黃色或ハ灰白色ナル饒多ノ液樣質ヲ分泌スルコトアリ殊ニ此分泌液ハ僅ニ繃帶布片上ニ附着シ存スト雖モ多クハ内眥ニ於テ蓄積シ眼瞼ヲ開關スルノ際淚液ト共ニ流出スル者ナリ其他著シキ眼球結

膜ノ浮腫及ヒ全角膜ニ滲潤ヲ發見ス而シテ其最モ滲潤ノ甚シキ角膜瓣ハ初メニ化膿シ繼テ漸ク他ニ波及ス而シテ充全タル蔓延性化膿ニ於テハ藥餌或ハ繃帶ヲ行フモ効ヲ奏スルコトナク唯溫捲法及ヒ后ニハ溫蒸繃布ヲ用ヒテ疼痛ヲ緩和セシムルノ他方法ナキ者トス

以上角膜瓣ヨリ偶發スル障害ノ他尙ホ虹彩ヨリシテ危險症ヲ發生スルコトアリ此症ハ通常手術後二三日ヲ經テ發スル者ナレモ若シ眼球内ニ遺殘セル皮質片之カ原因タルハ此例ニ非ストス而シテ虹彩炎ノ初期ニ於テ患者ハ眼胞ニ穿痛ヲ訴ヘ淚漏ヲ來シ眼中赤色ヲ呈シ時トノ輕易ノ漿液性結膜浮腫ヲ起スコトアリ且ツ房水渾濁シ瞳孔縮小ス此ノ如キ症ニハ亞篤魯比涅ノ點眼ヲ最モ佳トス即チ其強溶液以下一倍ヲ五分時毎ニ點眼シ以テ半時間持長シ次テ一日數回之ヲ行フヘシ又莫爾比涅ノ皮下注入ハ疼痛ヲ緩和シ睡眠ヲ助ル者ナリ又同時ニ灰白水銀軟骨ノ塗擦ヲ行ヒ甘汞ヲ數回分服セシメ水蛭ヲ耳ノ前部或ハ後

部ニ貼スルモ亦佳ナリ、但シ虛弱ノ患者ニハ之ヲ施スヲ勿レ  
若シ角膜癢痕造成ノ初期ニ於テ虹彩炎ヲ發シ、虹彩脫出ニ起因セルガ  
如キハ、壓迫綳帶ヲ連用ス可シ、蓋シ此壓迫綳帶ハ癢痕ノ造成ヲ促進  
シ、角膜穹窿變異ノ發生ヲ預防スルヤ疑ヲ容レサル所ナリ、又脫出セル  
虹彩ヲ腐蝕スルハ必常危險ニシ、之ヲ切除スルハ結痕ヲ跋テ施行スル  
ヲ適當トス

又偶發症ノ全身療法ハ、每常患者ノ體質及ヒ年齡ニ從フヘシ、總テ頭部  
充血ニ罹リ易キ患者ニハ、緩性下劑及ヒ清涼飲料ヲ與ヘ、高老ニシテ虛  
弱ノ患者ニハ、滋養物葡萄酒、幾那等ヲ投スヘシ

### (二) 瓣狀摘出虹彩切除併用術

本來瓣狀摘出法ニ虹彩切除法ヲ兼ヌルハ、虹彩挫傷シ或ハ角膜創開ニ  
虹彩ノ脫出セルキニ於テノミ施セリト雖、後世ニ至リテハ、患者既ニ  
白內障摘出後虹彩炎ニ因テ一眼ヲ失シ、或ハ手術前亞篤魯比涅ヲ點眼

スルモ瞳孔ノ散大ハ徐々且ツ不充分ナルニ據テ、預メ虹彩炎ノ素因ア  
ルヲ明證シ得ルカ如キ症ニ於テ、此併用術ヲ行ヘリ、然ルニ輓近遂ニ瓣  
狀摘出法ニハ必ス、虹彩切除ヲ兼用スルヲ正規トナスニ至レリ、而シテ  
孔變形ニ由リ、起因スル視學上ノ障害及ヒ外視ノ醜ナルハ、手術成  
績ノ善良ナルニ比スレハ甚々些少ナルカ故ニ、此併用術ハ益々正確ノ者  
ト看做スルニ至レリ、但シ虹彩切除ハ白內障摘出ヲ行フ數週前、十四日乃  
或ハ角膜弓狀離開ト共ニ施行スルノ二法アリ

「ジャコブソン」氏 瓣狀摘出及ヒ虹彩切除併用ハ、角膜下緣ニ於テ結膜輪ニ  
弓狀ヲ截創シ造レリ、而シテ斯ノ如キ角膜周緣部ノ離開ハ、常ニ善良ナ  
ル經過ヲ以テ治癒スル者ニシテ、同氏ハ世人ヲシテ此法ノ有益ナルニ  
注目センコトヲ促カセリ、蓋シ其益タル左ノ數件ニ歸ス、(一) 結膜輪ハ饒多  
ク血管ヲ有スルカ故ニ、角膜損傷又ハ潰瘍ノ如キハ愈々角膜線ニ近ク發  
來スルニ從ヒ、其治癒モ亦愈々容易ナリ、是以テ截創ニ於ルモ亦同一ノ癒



機ヲ取ラサル可ヲサル者トス(二) 截開ヲ角膜周縁部ニ行フモハ、虹彩ヲ其毛様縁ニ至ルマテ切除シ得可ク、以テ皮質ノ殘片虹彩ノ後方ニ隱匿シ其膨脹スルニ依テ炎症ヲ誘發スルヲ防クモノナリ(三) 虹彩切除法ヲ前施スルモハ、截囊針ヲ以テ水晶體邊縁ニ至ルマテ其囊ヲ截開シ得可シ是ニ依テ皮質ハ全ク此廣大ナル水晶體截開口ヨリ排出スルヲ得ヘシ(四) 白內障ヲ容易ニ摘出スルヲ得可シ、何トナレハ白內障ノ邊縁角膜創口ニ接近セルヲ以テ、水晶體ハ廻轉スルヲナク、直ニ排出スルヲ得レハナリ

然リト雖モ角膜周邊部ノ截開ハ甚ク硝子體脫出ヲ將來シ易キ者ナリ、是故ニ「シヨブソン」氏ハ「施術ニ臨ミシロ、「フォルム」麻醉法ヲ行ヘリ此併用法施術式ニ就テ單純瓣狀摘出法ト異ナル所ハ、第一及ヒ第二節間ニ於テ虹彩ノ一小片ヲ切除スル是ナリ、而シテ此虹彩切除ノ際眼球固定器ヲ除去スルヲ欲ヒスノハ、角膜瓣ノ尖端ニ於テ角膜或ハ結膜橋

狀小片ヲ殘留スルヲ良トス

術者虹彩ヲ切除セント欲セハ、角膜弓狀截開後眼球固定鑷子ヲ介者ニ與ヘ、自ラ左手ニ虹彩鑷子ヲ把リ、其凸側ヲ以テ創口ノ鞏膜縁ニ輕壓ヲ與ヘ、以テ創縁ヲシテ膨開セシメ、鑷子ヲ閉鎖シテ角膜後面ニ沿テ送入シ、其尖端虹彩ノ瞳孔縁ニ達スレハ、鑷子ヲ三乃至四「ミリメートル」許發開シ、虹彩ヲ狹撮シテ外方ニ牽出シ、之ヲ角膜ノ直上ニテ一回或ハ二回ニ切除ス可シ

時トシテ虹彩切除後ニ前房内出血ヲ起ストアリ、然ルモハ上眼瞼ヲ以テ角膜表面ヲ輕摩スルニ由リ、血液多クハ流出スルモノナリ、尙ホ漏血前房中ニ殘止スルモハ、是ニ關セシメテ水晶體ヲ截開ス可シ、然ルモハ皮質水晶體截開口ヨリ排出スルニ當リテ、血液ハ前房ノ周邊ニ追却セラレ、モノナリ、又繃帶及ヒ施術後ノ措置ハ單純瓣狀摘出術ニ於ルト同一ナリ

(三) 白内障線狀摘出法 (Linear extraction)

既ニ前章ニ論載スル所ノ線狀摘出法ハ其截開部ノ大ナル由リ角膜  
其榮養血管ノ大半ヲ失シ加之創縁ノ接合モ亦非常ニ困難ナルヲ以テ  
吾人ハ水晶體排出ニ備フル角膜截口ヲシテ可及的小ナラシムルヲ欲  
ス然レモ若シ創口太小ニセハ創縁ノ挫傷及ヒ創端ノ牽引ヲ受ルハ言  
ヲ待スシテ明瞭ナリ而シテ之カ爲メ癒機ヲ妨害シ危重ノ續症ヲ將來ス  
ルハ吾人ノ日常實驗スル所ナリ是故ニ角膜創口ノ廣狹ハ白内障ノ大  
小及ヒ硬軟ニ適應セザル可ラザル者トス

(イ) 單純線狀摘出法

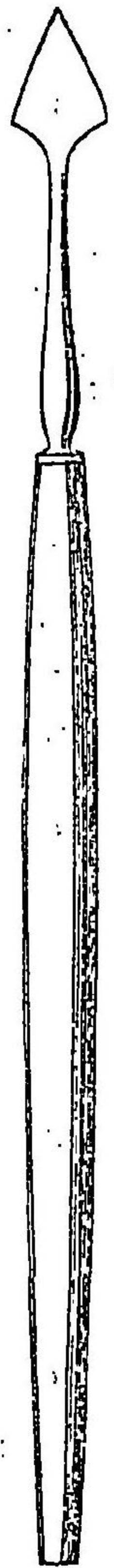
〔適應症〕 此手術ハ總テ軟柔或ハ液樣ノ白内障ノミニ適應スル者  
ニシテ此症ノ特發若シハ年少ノ人ニ於テ水晶體傷損ヨリ發生ルスカ如  
キ原因ニハ毫モ關涉セズ  
此白内障ハ大抵小兒及ヒ二十乃至二十五歳ノ壯者ニ限ルモノトス若

シ此年齒ヲ超ヘテ發生スル者ヲ見ルルハ宜シク眼球深部ヲ合併症ノ  
有無ニ注意スヘシ故ニ手術ヲ行フ前ニ先ツ視官機能ヲ精密ニ検査シ而  
シテ其視力ノ完全ナラサルヲ確知スルルハ唯眼部醜態(白色ノ)ヲ除クノ  
目的ヲ以テ手術スヘシ  
又乾殼樣水晶體白内障ヲ角膜線狀截開ニ依テ摘出スルハ唯水晶體遺  
殘物ト虹彩腫孔縁トヲ癒着ヲ發見セサルルノミニ行フ可シ但シ此際  
ト雖モ術者ハ慎テ手術シ若シ渾濁物ヲ輕ク牽引スルモ排出セサルル  
ハ強テ摘出法ヲ行フ可ラス何トナレハ虹彩或ハ毛樣突起部ヲ久時牽  
引スルルハ屢虹彩炎虹彩毛樣體炎ヲ發シ終ニ失明ニ至ルノ恐アルヲ  
以テナリ

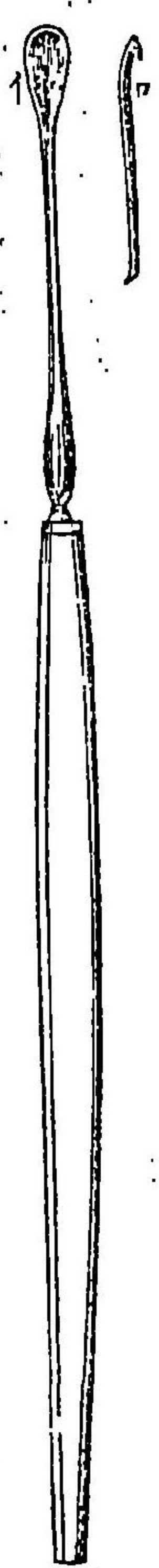
〔施術式〕

手術ニ要スル器械ハ(一)彈發セサル開險器(第二卷八(二)眼  
球固定錐子(第二卷九(三)廣幅ノ鉗形刀(第二十(四)フアンダレーフ氏截囊  
針五廣幅ノ匙子(第二十二是ナリ

第二十一圖 鉗形刀



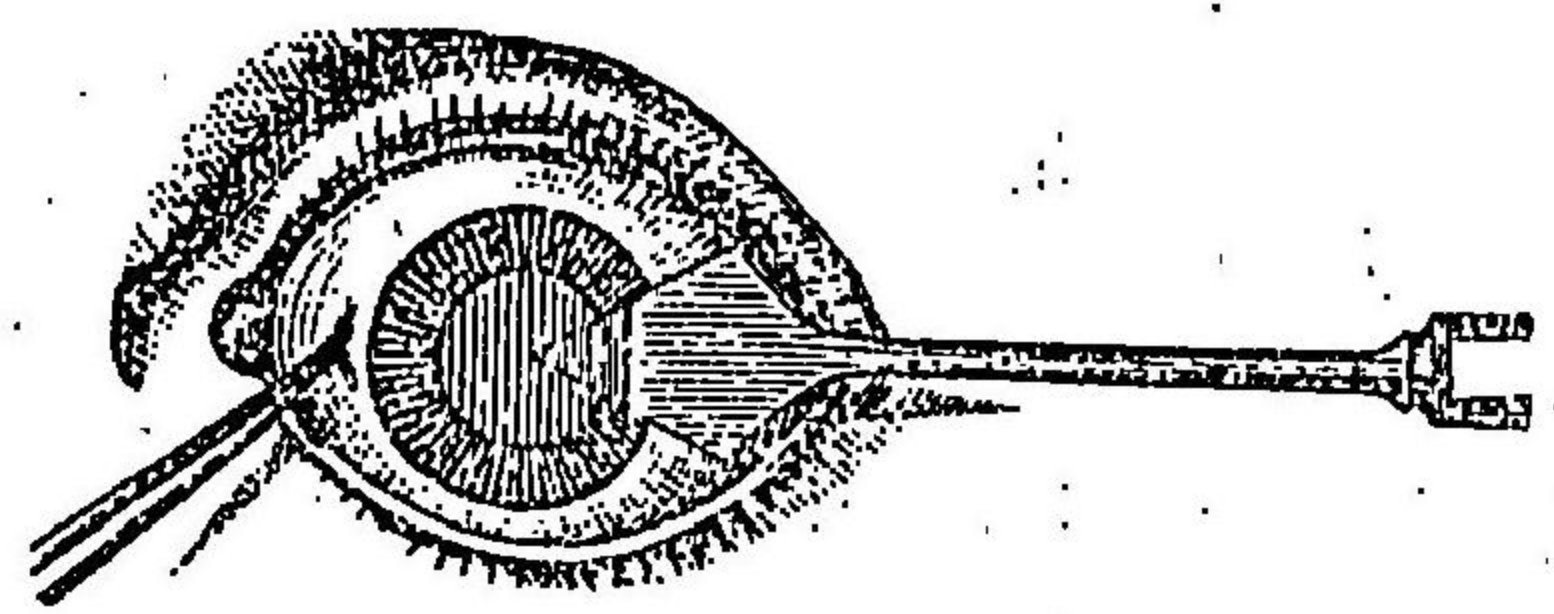
第二十二圖 廣幅ノ匙子 [イ]前面 [ロ]側面



其他創口ヲ擴開スル爲メ鈍尖刀又脫出セル虹彩ヲ切除スル爲メ虹彩  
鑷子ト彎曲セル剪刀ヲ預備ス可シ

〔第一節〕角膜截開 先ッ患者ヲ通式ノ如ク床上ニ臥セシメ術者  
ハ左眼或ハ右眼ニ施術スルニ從テ或ハ患者ニ對坐シ或ハ其頭部ノ後  
方ニ占居シ而シテ開瞼器ヲ以テ眼瞼ヲ能ク離開シ左手ニ眼球固定鑷  
子ヲ把リテ眼球結膜ヲ角膜橫徑ノ鼻側端周傍ニ於テ挾撮シ以テ眼球  
ヲ固定スヘシ而シテ鉗形刀ヲ右手ニ把リ固定鑷子ニ對シテ角膜橫徑

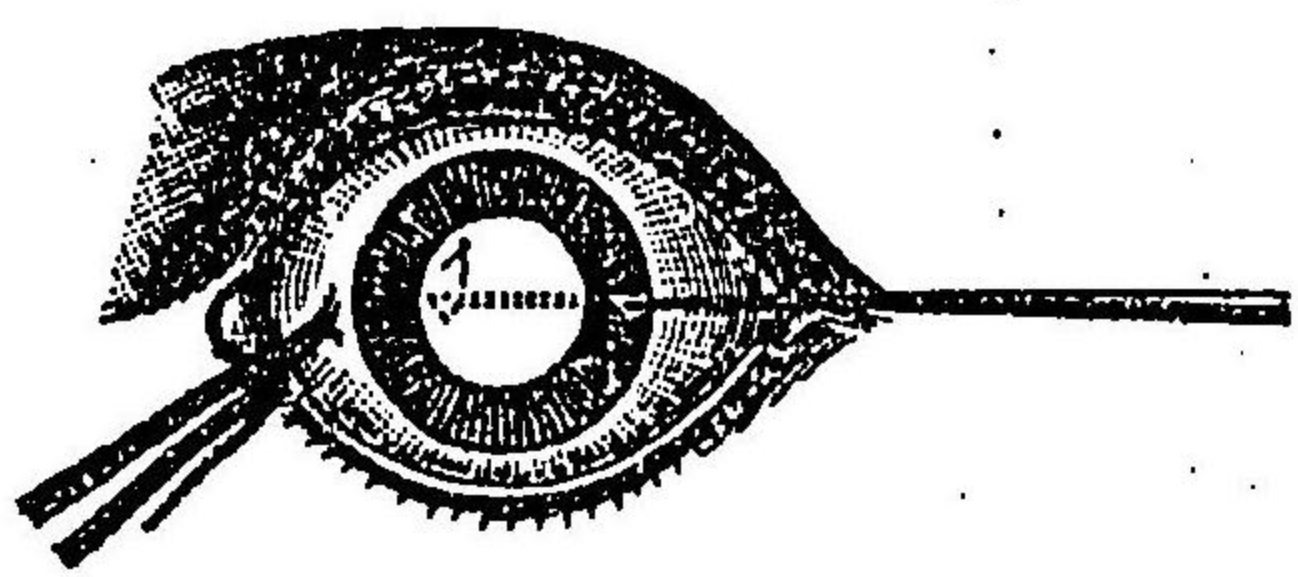
第二十三圖 角膜線狀狀圖



ノ顯端端ニ當テ角膜線ヨリ大約四ミリメートル内方ニ平ニ當抵シ玆  
ニ於テ刀尖ヲ穿入部ニ輕壓シテ前房内ニ穿入シ  
刀尖ヲ固定鑷子ニ向テ虹彩面ト併行ニ送入シ  
十三圖 六乃至七ミリメートル大ノ創口ヲ造爲ス  
ヲ見ヨ 續テ刀柄ヲ患者ノ顯端部ニ傾ケテ其尖端ヲ  
角膜後面ニ向ハシメ以テ房水流出後前方ニ突出  
スル水晶體系統ノ損傷ヲ免ル可シ而后刀ヲ徐々  
ニ退却シ此際角膜創ノ内口ヲ開擴ス可シ即チ刀  
ヲ拔去スルノ際刀柄ヲ患者ノ頰或ハ前額部ニ向  
ケテ傾歛スルキハ創口ヲシテ容易ニ廣大ナラシ  
ムルヲ得可シ

〔第二節〕水晶體截開 眼球ヲ固定シナカラニシテ截鑿針ヲ平ニ創  
口ノ外縁ニ載置シ 第二十四圖ヲ見ヨ 輕ク之ヲ壓シ針ノ背側ヨリシテ角膜後面

第二十四圖 針送



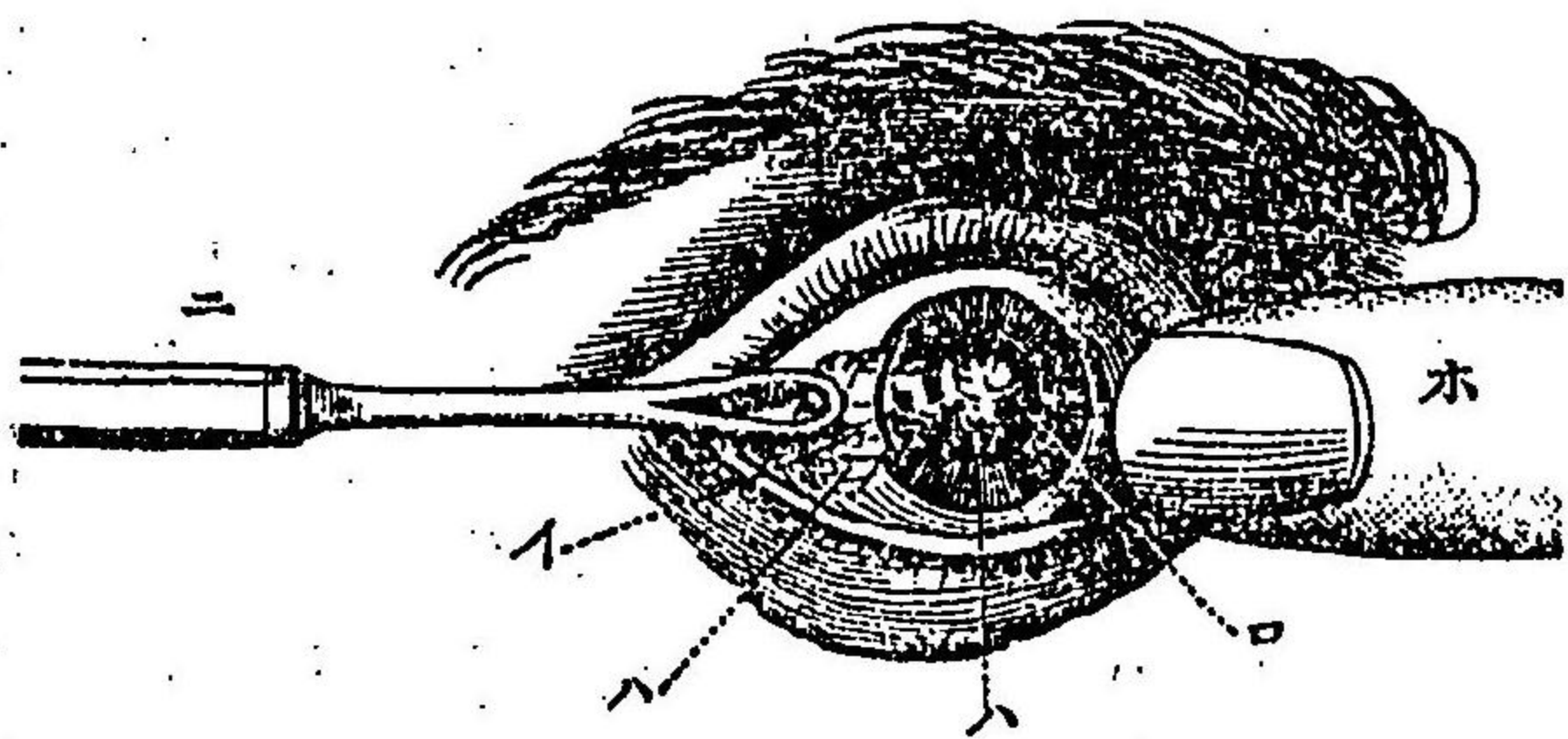
ニ沿テ前房中ニ送入シ、針尖瞳孔ノ鼻側縁ニ至ラ  
 ハ第二十四圖ノ〔イ〕針及チ水晶嚢ニ向ハシメ、以テ器械ヲ  
 退却シテ瞳孔外  
 縁ニ至ルマテ之  
 ヲ截開スヘシ、是  
 ニ於テ截囊針ヲ  
 再ヒ廻轉シテ創

口ヨリ平ニ退却スヘシ

〔第三節〕白内障摘出 廣幅ノ匙

子ヲ創口外縁ニ壓抵シ、以テ創口ヲ哆  
 開セシメ、又同時ニ固定鑷子或ハ指端  
 ヲ以テ眼球ノ鼻側ニ輕壓ヲ行フヘシ  
 第二十五圖ヲ見ユ 然ルキハ液様白内障質ハ排

第二十圖 〔イ〕角膜 〔ロ〕瞳孔 〔ハ〕白内障 〔ニ〕匙子 〔ホ〕眼球ヲ押スル手



出シ得ルモノトス、而シテ瞳孔既ニ黒色トナルキハ、押壓ヲ止メ、且ツ固  
 定鑷子及ヒ開險器ヲ除去ス可シ、但シ角膜創口ハ自ラ鎖閉スルモノナ  
 リ

上記ノ手術ニ依テ水晶體質、全ク排出セサルキハ、房水ノ再溜スルヲ待  
 チ上眼瞼ヲ以テ輕シ輪狀摩擦運動ヲ施シ、白内障質ヲ創口ニ押出スヘ  
 シ、然ルキハ殘留セル白内障遺物ハ、通常再溜セル房水ト共ニ排流スル  
 モノナリ

此手術ハ假令幾回施行スルモ、曾テ危險症ヲ招ク者ニ非ス、且ツ前房内  
 ニ匙子ヲ送入スルモ亦最良ナリトス、又眼球内ニ少許ノ軟化セル水晶  
 體質ヲ殘留スルモ別ニ手術ノ成績ヲ害スルナシトス、何トナレハ年  
 少ノ者ニ於テハ、其殘留物速ニ吸收スルノ力アルヲ以テナリ、然リト雖  
 亦瓣狀摘出法ニ記載セル理由ヨリシテ、可及的水晶體質ヲ除去スルチ  
 佳トス

手術終レハ冷水ニ浸セル海綿ヲ暫時眼瞼上ニ置シ、而后瓣狀摘出法ニ於ル如ク壓迫繃帶ヲ施シ、他眼ハ二三條ノ英吉利絆創膏ヲ以テ被覆スヘシ

施術後ノ措置ハ最モ單簡ナリ、即チ二日間壓迫繃帶ヲ保續シ、朝夕之ヲ交換シテ其際二三滴ノ亞篤魯比涅ヲ點眼シ、爾後此點滴法ヲ續行シ、壓迫繃帶ニ代フルニ黒絹ノ覆眼布ヲ以テシ、數日間患者ヲシテ暗室ニ安臥シ、漸々日光ニ慣習セシム可シ、續テ刺戟症狀全ク退止スルハ、青色ノ防護眼鏡ヲ與テ出院ヲ許ス、但シ其期日ハ通例手術後一週間ヲ經ルモノトス

〔術中及ヒ術後偶發スル障害〕

虹彩若シ創口ヨリ脫出

スルキハ、決シテ上眼瞼ヲ以テ角膜上ニ摩擦運動ヲ行テ脫出部ノ退却スルヲ試ミ、或ハ器械ニ依テ虹彩ヲ追却スル等ノ如キ一般ノ法則ニ從テ可ラス、蓋シ此等ノ方法ニ依テ大抵目的ヲ達シ得ルハ疑

ヲ容レサル所ニシテ、又脫出部ハ屢ニ水晶體摘出後自ラ退却スルモノアリト雖モ、此退却セル虹彩脫出部ハ、往々發炎ノ起首トナリ、以テ危險ナキ手術ヲシテ却テ危險ナラシムルコトアリ、特ニ手術ノ第一節後ニ虹彩脫出ヲ來スルハ、甚ク危險ナリ、何トナレハ此際虹彩ハ截囊針及ヒ排阻セル水晶體質ニ因テ損傷ヲ蒙ルノ恐アレハナリ、是故ニ通則ニ從テ脫出セル虹彩ヲ鑷子ニテ挾撮シ、缺ヲ以テ一回ニ切除スルヲ優トス、但シ之カ爲メ、瞳孔ノ廣大ヲ致スモ恐ル、ニ足ラス、何トナレハ角膜創ノ内口ハ角膜縁ヨリ離在セルカ故ニ、切除スル所ノ虹彩片極メテ狭小ナレハナリ、又水晶體摘出後ニ至ルモ虹彩舊位ニ復セサルハ、之カ切除ヲ爲サ、ル可ラス、若シ切除法ヲ行ハスシテ放置スルハ、脫出セル虹彩小片ハ創口ニ竝存シ、以テ此ニ適合シ、加之經久刺戟ヲ受テ終ニ重症ニ陥ルコトアリ、硝子體脫出ハ罕ニ發顯スル者ニシテ、或ハ薄弱ノ白內障ヲ通シテ截

囊針ノ直ニ硝子體中ニ侵入スルニ由リ、或ハ動眼筋ノ劇シク収縮  
 スルニ由リ、或ハ眼球ヲ強壓スルニ因テ起ル者ナリ、今若シ水晶體  
 排出ニ先テ脫出ヲ來スルハ直ニ匙子ヲ使用シテ以テ可及的速ニ  
 摘出ヲ終フヘシ、又角膜割開ニ硝子體ノ箱入スルキハ、壓迫繃帶ヲ  
 シテ堅固ニ裝用シ、且ツ久時保續スヘシ、然リト雖モ尙ホ往々輕易  
 ノ刺戟症狀ヲ發シ、殘留セル癰痕ハ常大ヨリ廣幅ナルヲアリ  
 若シ手術ノ半途ニ初メテ白內障硬軟監識ノ誤謬ナルヲ確知シ、  
 而シテ核ハ中等大ナルヲ認ムルキハ、鈍尖刀ヲ用テ角膜創口ヲ擴  
 開シ、虹彩小片ヲ切除シ、匙子ヲ以テ核ヲ排出セサル可ラス  
 水晶體摘出後瞳孔部ニ遺殘セル水晶體囊渾濁ハ、鑷子或ハ小鉤ヲ以  
 テ容易ニ牽出シ得ヘシ、又癒着ナキ乾殼樣白內障、乾性石灰ヲ摘出  
 センニハ、角膜截開後水晶體鑷子或ハ銳尖ノ虹彩小鉤ヲ前房ニ送  
 入シ、直ニ白內障ヲ挾撮シ、慎テ之ヲ排出スヘシ

又假令ヒ白內障ノ一小部虹彩瞳孔緣ト癒着セルモ癒着部ノ直上  
 ニ當テ角膜ヲ截開シ、虹彩小鉤ヲ對側ノ瞳孔緣ニ於テ白內障ニ送  
 リテ外方ニ牽出シ、角膜創口ノ直上ニ於テ此牽出セル部ヲ缺截ス  
 ヘシ  
 通常手術后經過中ニハ重症ヲ偶發スルヲ稀ナリトス、若シ虹彩炎  
 ヲ發スルキハ、瓣狀摘出後虹彩炎ニ記載セル方法ニ從テ治療ヲナ  
 スヘシ

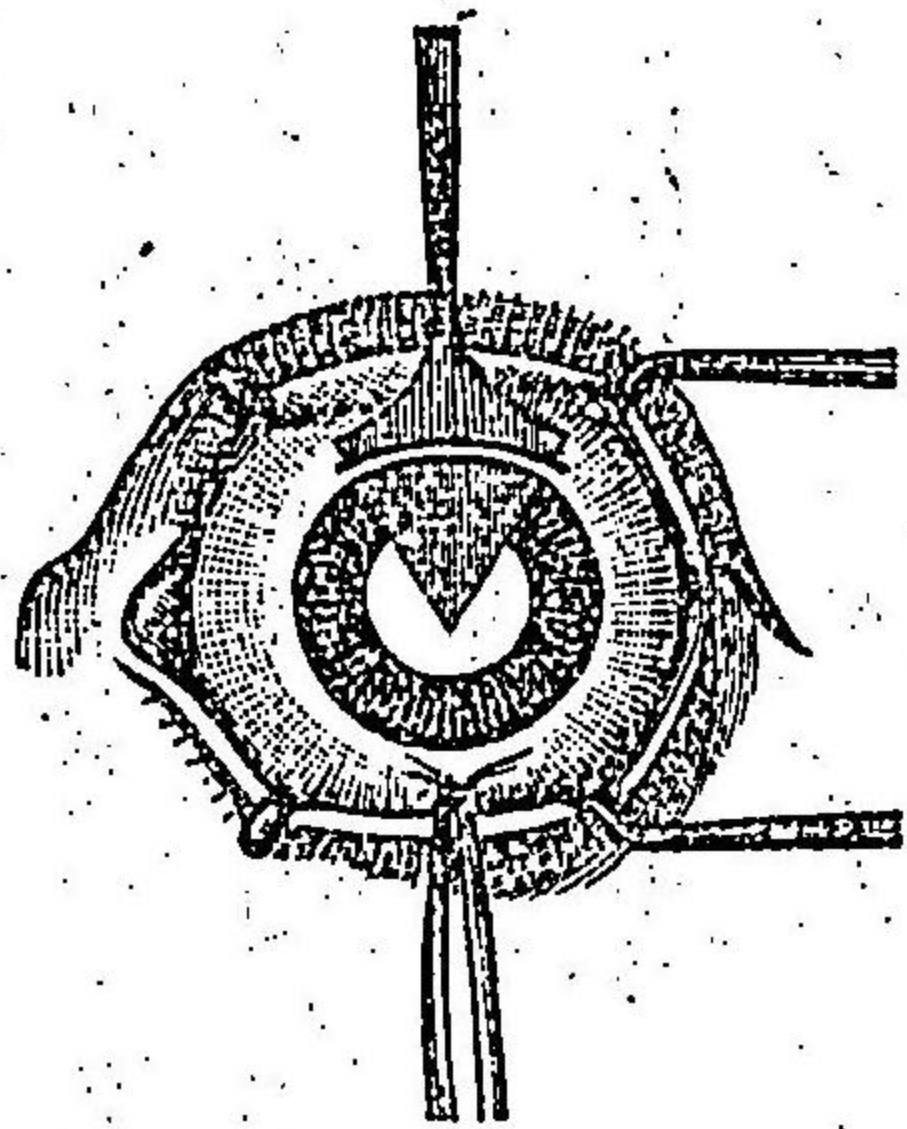
(ロ)線狀摘出虹彩切除併用法

總論

角膜線狀創口ノ治癒ハ、瓣狀摘出法ノ危險ナルニ比スレハ、輕易且ツ迅  
 速ナルヲ以テ、線狀摘出法ヲ瓣狀摘出法ニ適應セル白內障ニ施サント  
 スルハ、吾人ノ從來熱望セシ所ナリ、曾テ大核ヲ含有スル硬固ノ白內障  
 ニ初メテ線狀摘出法ヲ施行セシコ、固ヨリ微小ノ角膜創口ヨリシテ暴

ニ白内障ヲ摘出セシ由リ危篤ノ重症ヲ誘起シ以テ久シク希望スル所ノ目的ヲ達セザリキ抑白内障ノ大小硬軟ト狭小ナル角膜創口トノ關係ノ不當ナル由リ發生スル虹彩及ヒ角膜創口ノ甚シキ挫傷ハ治癒經過上ニ大ナル妨害ヲナス者ニシ之カ爲メ果斷ナル實驗家ハ總テノ白内障ニ線狀摘出法ヲ施スチ全ク絶念シ唯軟化セル白内障ノミ之ヲ行フニ至レリ然ルニ爾他ノ諸學士ハ益茲ニ勉勵困苦シテ百折撓マズ或ハ水晶體ヲ碎片シ或ハ摘出器械ヲ製造シテ之ヲ排出シ或ハ角膜創口ノ大小方向位置等ヲ變換シ或ハ虹彩切除ヲ兼用スルカ如ク各其術式ヲ千變萬化シ以テ線狀創ヨリシテ硬固ノ白内障ヲ摘出セシヲ欲セリ就中フクリチエ

圖 六 十 二 第



氏ハ第二十六圖ニ示ス如ク角膜上

線ニ一大截開ヲ爲シ虹彩切除法ヲ行ヒ特別ノ匙子ヲ用テ白内障ヲ摘出セリト雖モ未ダ一般ニ線狀摘出法ニ代用スル下能ハサリキ西曆一千八百六十三年フンダグレイフニ氏初メテ無比ノ一良法ヲ發見シ角膜線狀截開ニ由テ老人白内障ノ如キヲ摘出シ得ルノ新法ヲ世ニ公布セリ爾來同氏及ヒ數多ノ術者大ニ之ヲ試用シ遂ニ數年ヲラサルニ一般入ノ稱譽ヲ受ルニ至レリ

今此新法ノ他ニ線狀截開法ニ優レル要點ヲ左ニ揭示セン

(一)此新法ハ截開部ヲシテ周邊ニ於テ房水流出後殆ント水晶體縁ニ應ズル部位ニ施スカ故ニ白内障ハ虹彩切除後前方ニ廻轉スルヲ要セズシテ直ニ排出シ得ヘシ若シ創口ヲシテ角膜中ニ在ラシメハ水晶體ハ先ツ廻轉シテ而後ニ排出スルモノナリ其他創口周邊ニ存スルハ手術纔ニ其危險ナルヲ免ル何トナレハ吾人ノ經驗ニ因ルニ角膜鞏膜結合部近傍ノ切創ハ角膜切創ニ比スレハ容易ニ治癒スルヲ以テナリ





圖 八 十 二 第

刀 眼 隙 內 氏 フ ー レ グ シ フ ー



圖 九 十 二 第

子 鑷 彩 虹 曲



圖 十 三 第

子 鑷 彩 虹 直

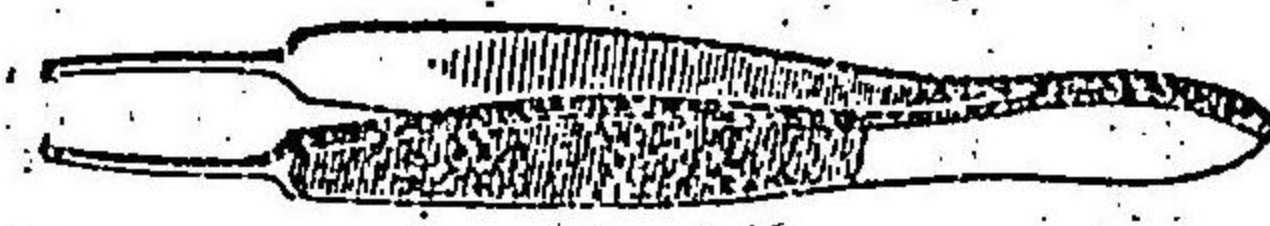


圖 一 十 三 第

鉗 狀 膝

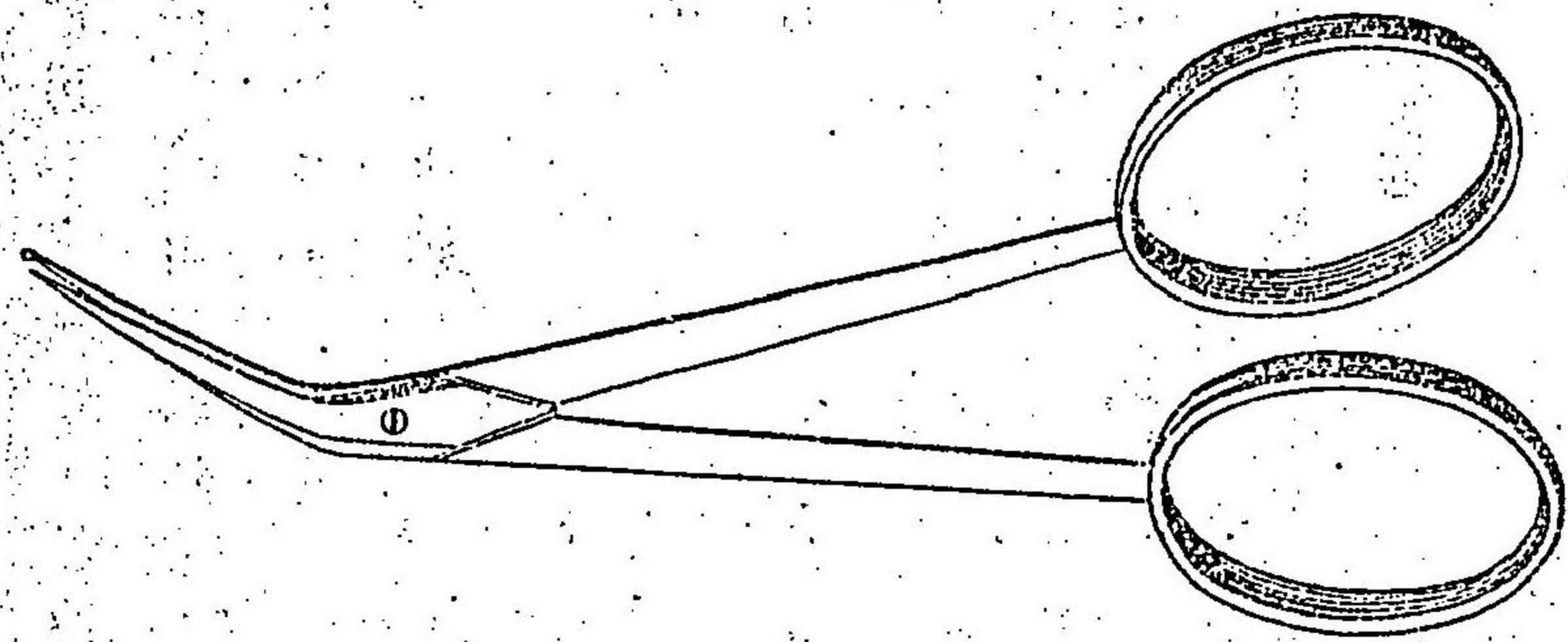


圖 二 十 三 第

針 囊 襪 ル 七 曲 屈 子 匙 氏 ル ー ヴ ダ

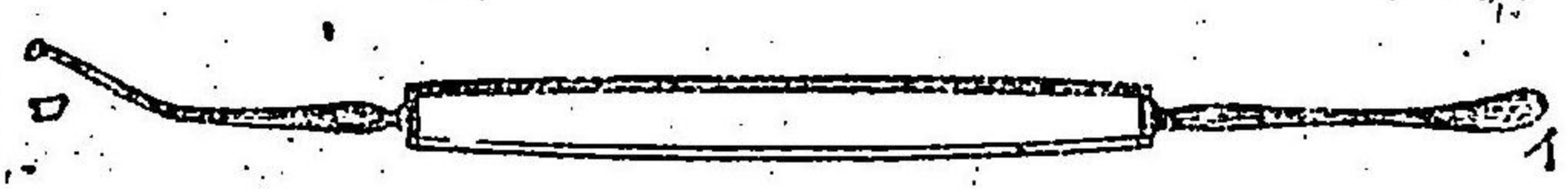
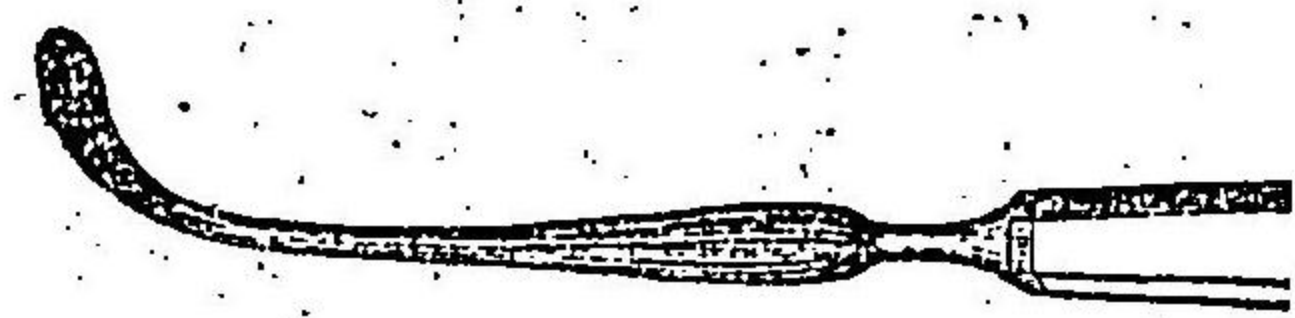


圖 三 十 三 第



「フオン、グ  
レーフエ」  
氏 匙 子

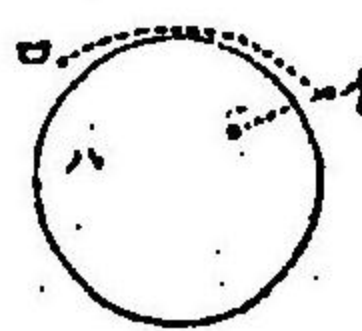
〔第一節〕角膜周邊截開

先ッ開險器ヲ上ニ記載

セル規則ニ從テ裝置シ、術者ハ角膜下縁ノ直下ニ當テ廣  
ク眼球結膜ヲ挾撮シ、以テ眼球ヲ固定シテ之ヲ靜ニ下方  
ニ牽引スヘシ、而シテ右手ニ内障眼刀ヲ取り、其刃ヲ上方ニ  
向ケテ之ヲ第三十四圖ノ「イ」點、即チ角膜縁ヲ距ル一大約  
半乃至二「ミリメートル」  
ニシテ角膜上縁ノ觸線  
ヨリ二「ミリメートル」下  
方ニ當テ鞏膜ニ刺入シ、  
刀ノ尖端前房ニ入ラハ  
之ヲ瞳孔中心ヨリ微ニ下方ノ「ハ」點ニ向ケテ傾ホセ、乃  
至八「ミリメートル」許穿入スヘシ、是ニ於テ刀柄ヲ傾ケ、鞏  
膜下ヲ通過シテ「ロ」點ニ貫出ス可シ、但シ此「ロ」點ハ穿入點

圖 四 十 三 第

「フオン、グ  
レーフエ」  
氏 線 狀 襪  
開 法

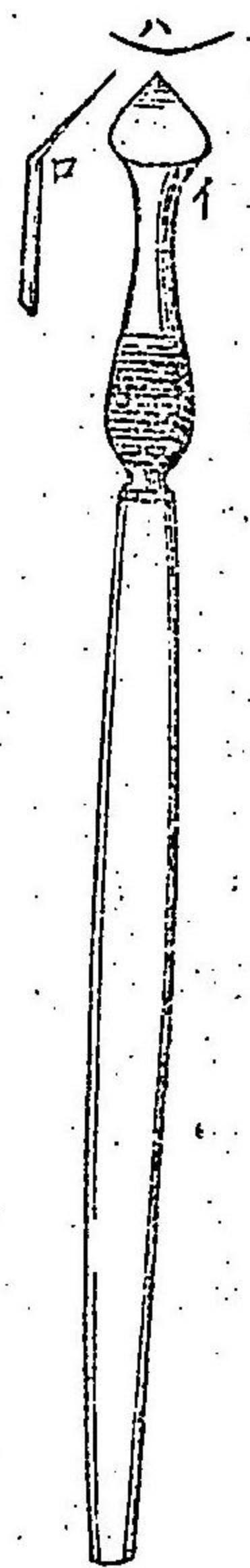


ト同等ノ部位ニシテ只其反對側ニ在ル者トス、而シテ刀ヲ貫出スルノ際刀  
 尖ノ抗抵忽チ消退スルキハ、則チ刀ノ貫出シ終ル者トシ、上方ニ嚮ヘル  
 刀乃チ前方ニ傾ケ、角膜縁ニ向テ鋸切スベシ、而シテ通例唯一回刀ヲ進退  
 スルキハ、既ニ鞏膜ヲ截開シ終ルヲ得可シ、然レモ其之ヲ未ダ能セサル  
 キハ、數回使鋸運動ヲ爲スモ敢テ害ナシトス、斯ノ如クシテ鞏膜全ク截  
 割シ終レバ、刀乃チ前方或ハ尙ホ少シク下方ニ轉シテ結膜ヲ截斷シ、以  
 テ結膜瓣ヲシテ、過大ナラシム可ラス、又一ノ術者ハ其結膜瓣ヲ作爲ス  
 ルヲ欲セザルヲ以テ、鞏膜中ニ截開セシメテ、通例鞏膜角膜結合部ニ截  
 開シ終レリ、特ニ眼球内壓ノ少ク充進セルキハ、此部ヨリ一ミリメートル  
 ル角膜中點ノ方向ニ施行セリ、但シ刀ノ穿入及ヒ貫出部ハ常ニ最高截  
 開點ニ畫スル觸線ヨリ二ミリメートル下方ニ撰擇スル者トス、蓋シ此  
 ノ法式ニ依レバ、險惡ナル出血及ヒ硝子體脫出ヲ避ルニ最モ佳ナリト  
 云フヘシ

「ウエーベル」氏ハ特  
 異ノ鉈形刀第十五  
 圖ヲ製造シ、以  
 テ上記ノ線狀截

第三十五圖

「ウエーベル」氏鉈形刀(イ)前面(ロ)縱斷面(ハ)屈曲ノ度  
 (ハ)横斷面ノ陷凹



開チ行ヘリ、即チ先ツ此刀ヲ角膜縁ニ刺シ、刀面ヲ角膜縁ト併行ニ爲シ、  
 以テ前房ヲ通過シ、對側ノ角膜縁ニ向テ送入セリ、同氏ハ、白内障ノ大小

ニ從テ大小二箇ノ刀ヲ造成セリ

〔第二節〕虹彩切除 固定鑷子ヲ

介者ニ與ヘ、若シ結膜瓣造爲セルキハ、

直形ノ虹彩鑷子ヲ以テ之ヲ角膜上ニ

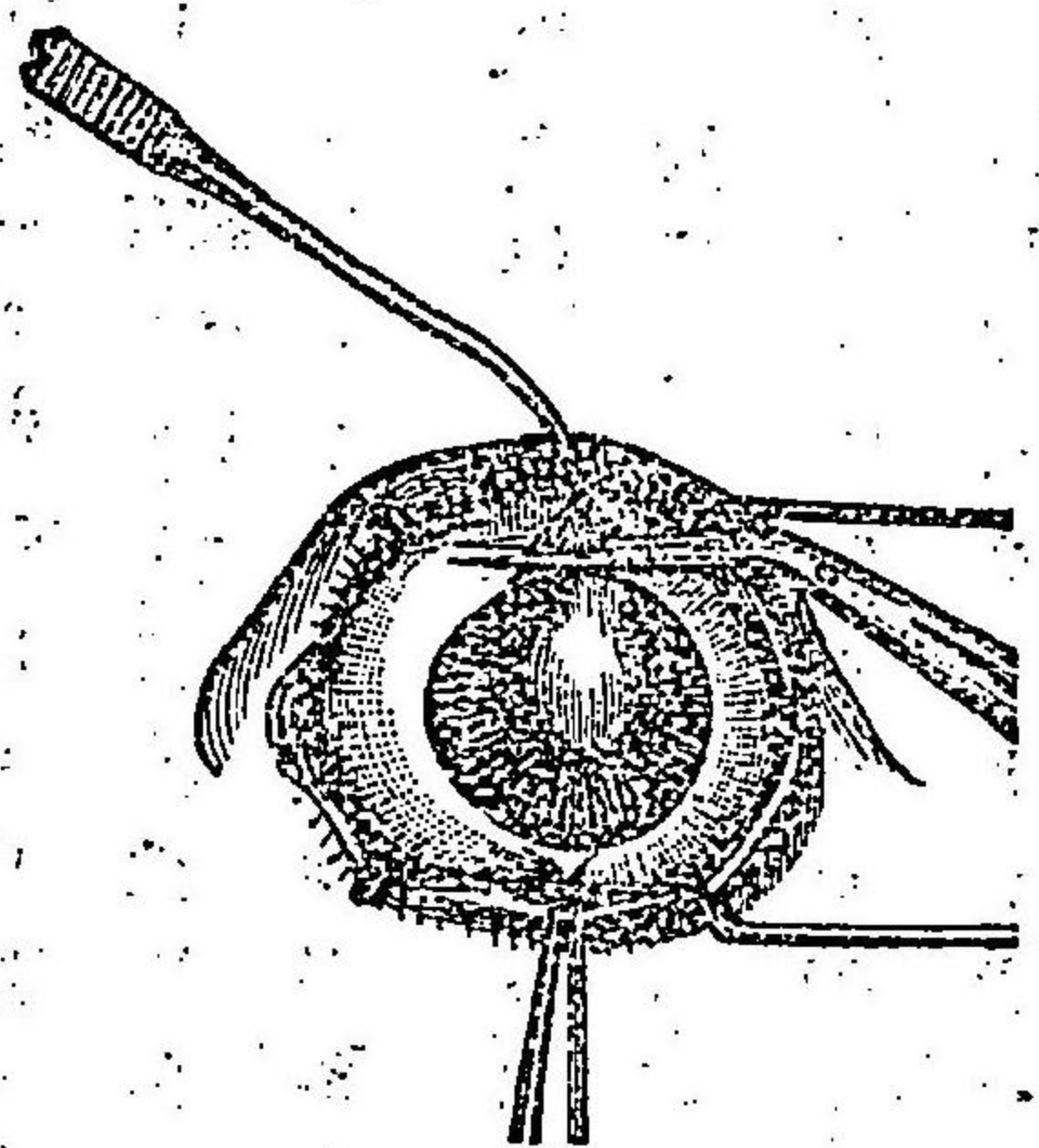
反折シ、而シテ其鑷子ヲ以テ創口ノ外

端ニ於テ虹彩ヲ挾撮シ、之ヲ靜ニ牽引

シテ放線狀ニ截開シ、次ニ中央ヲ切離

第三十六圖

虹彩切除



シ第三回ニ至テ創口ノ内端ニ放線狀ノ截開ヲ行ヒ、以テ全ク切除シ終ル者トス 第三十六圖ヲ見ヨ、但シ此際創端ニ於テ虹彩ヲ強テ牽引セス、以テ其創間ニ狭窄スルヲ防キ、且ツ注意シテ虹彩ヲ切除シ、其創間ニ癒合スルヲ避クヘシ、特ニ虹彩切除後ニ至リ括約筋隅角ノ全ク前房内ニ退却セシヤ否ニ注意スルヲ緊要トス、若シ退却セスノ尙ホ創間ニ存スルキハ、硬護膜製匙子ノ背側ヲ以テ創端ニ輕壓ヲ施シ、或ハ創間ニ遺存セル虹彩小片ヲ再ヒ切除セサル可ラサルコアリ、而メ此括約筋隅角ハ手術前亞篤魯比涅ヲ點眼セサルニ依テ容易ニ退却シ得ルモノナリ、フオン、ウエツケル氏ハ虹彩切除後硬護膜製ノ小籠ヲ用テ創間ニ遺存スル虹彩ヲ却送シ、而シテエゼリンヲ點眼セリ

〔第三節〕水晶囊截開

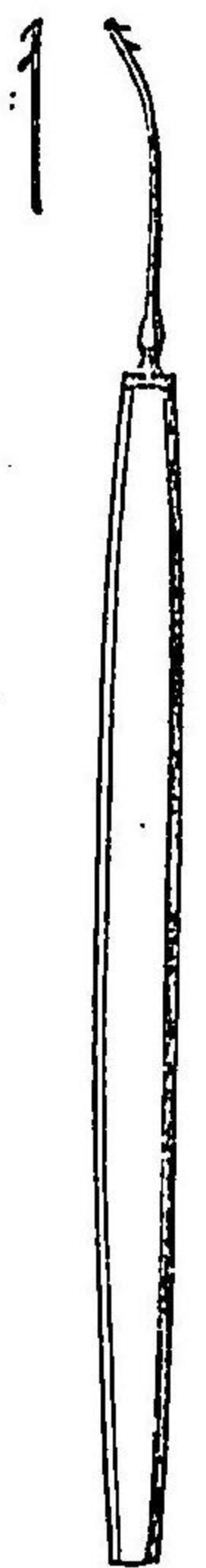
虹彩切除後ハ、熟達セル介者ヲシテ慎テ開險器ヲ眼球ヨリ微ニ擧上セシメ、以テ眼球ノ壓迫ヲ防シ可シ、而シテ術者ハ再ヒ自ラ固定鑷子ヲ取り、屈曲セル截囊針ヲ以テ水晶囊ニ二箇

ノ截線ヲ施ス、此二截線ハ共ニ瞳孔下縁ニ始リ、其一ハ瞳孔ノ内縁、其一ハ瞳孔ノ外縁ニ在リテ、孰モ水晶體ノ上縁ニ達スル者トス、而シテ通例此兩截線ノ上端ヲ角膜上縁ト併行セル第三截線ヲ以テ結合ス、截囊針ハ注意シテ角膜後面ニ沿テ平ニ前房内ニ送入シ、而シテ水晶囊ヲ截開シ終レハ、針尖ヲ水晶囊表面ト殆ント併行ナラシムルヲ適當トス、然ルキハ白内障中ニ針尖ノ深入スルヲ防キ、加之水晶體脫位ノ危險ヲ免カル者ナリ、アルト氏ノ說ニ水晶囊截開ヲ行フニハ、銳利ナル虹彩小鉤ヲ優レリトス、何トナレハ此鉤ハ常ニ水晶囊ニハ形創ヲ施シ得ルヲ以テナリ

又ウエーベル氏ハ完全ノ水晶囊截開ヲ施スニ前後二小齒ヲ有スル重鉤

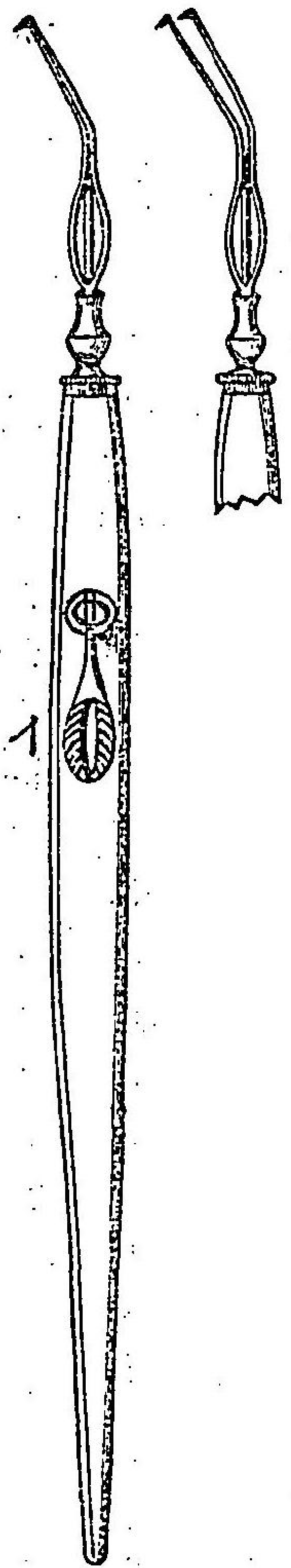
第三十七圖

「ウエーベル氏重鉤」



第三十七圖ヲ見ヨ、其用法ハ、先ツ瞳孔ノ一側ヨリ他側ニ向ケテ

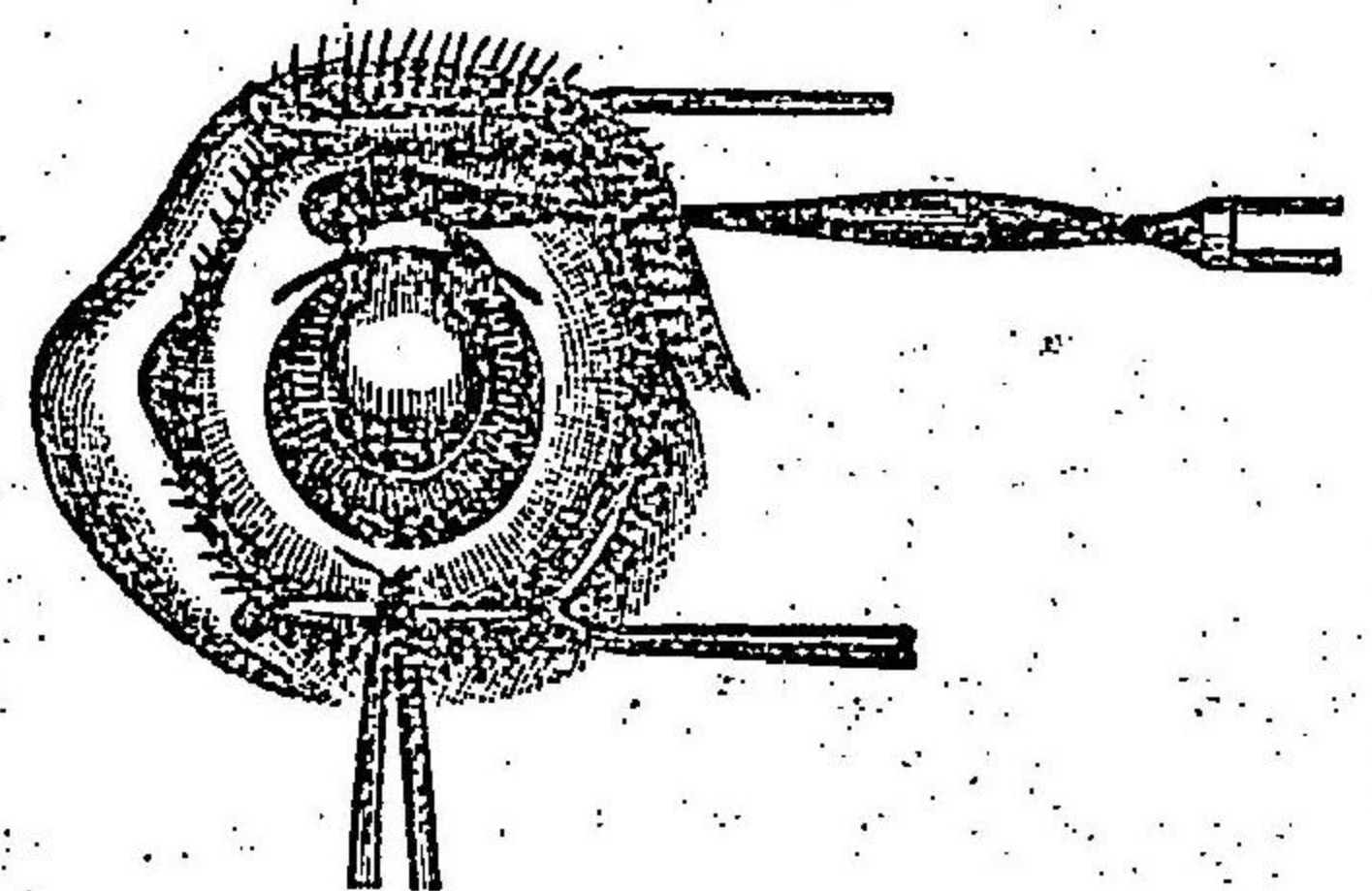
水晶嚢ヲ截開シ、次テ其截線ノ兩端ヨリ角膜創口ノ方向ニ鉤ヲ牽引シ、  
 而シテ鉤ニ懸レル嚢片ヲ斷截スルナリ、「マイエル氏」モ亦一ノ截嚢針ヲ  
 製作セリ 第三十八圖ヲ見ヨ 先ツ之ヲ常式ノ如ク、前房内ニ送入シ、其尖端嚢孔ノ  
 第三十八圖 「マイエル氏」ニ重截嚢針



下線ニ達スルヤ、直ニ針柄ニ存スル鼻鉗「イ」ヲ押壓シ、以テ相互ニ密接セ  
 此針尖ヲ彈發セシメ、次テ針ヲ退却スルノ際嚢上ニ大ナル截創ヲ造リ、  
 而后鼻鉗ノ押壓ヲ止メ、針尖ヲ鎖閉シ、以テ針ヲ去ルヘシ、然ルモ嚢ノ  
 截片ハ針尖ハ附シテ外出スルヲ以テ之ヲ創口ニ接シテ截除スヘシ、但  
 シ白内障内ニ針尖ノ深入スルヲ恐レ針ヲ甚ク傾歛スルモ、嚢片ハ  
 針尖ニ附シテ來ルコトナシ

「ガイエット」及ヒ「シナップ」氏ハ眼球ヲ輕壓シテ水晶嚢ヲ創口ニ來ラシメ、其上  
 縁ニ當リテ線狀刀ヲ用テ水晶嚢ヲ截開セリ  
 (第四節) 白内障摘出 水晶嚢ヲ排出セシメ、固定鑷子ニ依テ

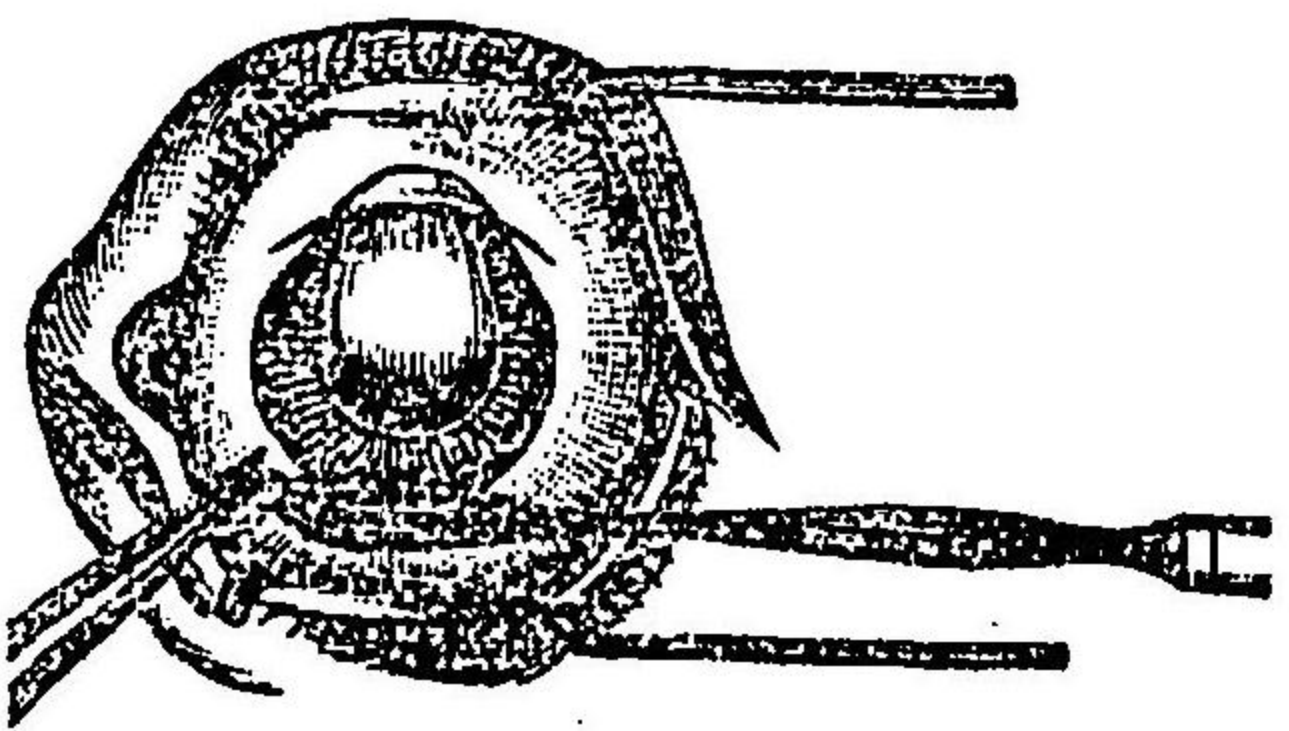
第三十九圖 水晶嚢ヲ取出スル圖



眼球ヲ下方ニ廻轉シ、兼テ硬膜鑷子ノ  
 凸側ヲ以テ輕ク創口上縁ノ中央ヲ壓シ、創  
 口ヲシテ哆開セシム 第三十九  
 此ノ如クスルモ、皮質漸前進シ、核ノ上縁  
 創口ニ現出ス、此排出ヲ促進スルカ爲メ、穩  
 カニ匙子ノ背面ヲ創口ノ一端ヨリ他端ニ  
 移動摩軋スヘシ、又創線ヲ壓スルニハ初メ  
 漸之ヲ強メ、核ノ最大直徑創口ニ現出セハ  
 其壓ヲ減少シ、兼テ匙子ヲ上方ニ移動シ、核ノ下縁創口ヲ脱セントスル  
 ニ至レハ、創口ノ溢リニ哆開スルヲ避ンガ爲メ、眼球ヲシテ少シク上方

ニ廻轉セシメ而シテ固定鑷子及ヒ開險器ヲ除去スヘシ  
又他ノ「フオン」グレース「氏」摘出法ハ硬護膜製匙子ノ背側ヲ角膜下縁ニ載  
置シ第四十圖 輕シ眼珠中心ノ方向ニ壓シ、水晶體ノ上縁ヲ創口ニ現出

第 四 角 膜 下  
線 二 硬  
護 膜 製  
匙 子  
ヲ  
壓 入  
シ  
テ  
水 晶  
體  
ヲ  
摘  
出  
ス  
ル



水晶體排出後ニハ、術者自ラ開險器ヲ取り慎テ之ヲ除去スヘシ、但シ此  
際眼珠ヲ壓迫スルコト勿レ

セシメ、猶ホ匙子ヲ上方ニ移動シ、以テ  
白内障ヲ創口ヨリ押出スル是ナリ、此  
法ヲ行フニハ、初ヨリ固定鑷子ヲ少シ  
ク鼻側ニ施置シ、以テ匙子ヲ用ルニ障  
碍ナカラシムヘシ、又水晶體排出ノ困  
難ナルハ、固定鑷子ヲ介者ニ與ヘ、創  
口ノ上ニ猶ホ第二ノ匙子ヲ當抵シ、以  
テ其排出ヲ試ルヲ優レリトス

〔第五節〕 ノ水晶體核排出ノ際、皮質ノ全部屢續出セサルコトアリ、然ル  
ニ今之ヲ悉ク除去スルハ、上論ノ如ク頗ル緊要ノ件ナリ、其排除法ハ患  
者ヲシテ房水ノ再溜スルニ至ルマテ眼瞼ヲ閉鎖セシメ、次テ上眼瞼ヲ  
以テ彼ノ輪狀輕摩運動ヲ施シ、以テ皮質殘塊ヲシテ可及的瞼孔部ニ集  
合セシメ、而后患者ヲシテ下方ヲ瞻視セシメテ、牽上セル上眼瞼ヲ輕壓  
シテ創口ヲ哆開シ、兼テ下眼瞼ヲ以テ上方ニ摩擦運動ヲ施シ、水晶體質  
ヲ創口ニ押出ス可シ、斯ノ如クシテ瞼孔全ク黒色トナルハ、小鑷子ヲ  
以テ小血塊ノ如キヲ創口ヨリ除去シ、尙ホ一回房水 屢少量ノ血ヲ排出  
セシメ、而シテ若シ結膜瓣ノ存スルハ、彎曲セル虹彩鑷子ノ凸側或ハ硬  
護膜製匙子ノ背側ヲ角膜ヨリ鞏膜ノ方向ニ移動シテ瓣ヲ創口ニ再置  
スヘシ、又此手術ニ依レハ往々創口ニ潛在セル皮質ノ殘塊及ヒ虹彩色  
素ノ如キヲ排出シ得ルモノナリ

〔綳帶及ヒ施術後措置〕 綳帶ハ瓣狀摘出法ニ於ルト同一ナリ

又施術後ノ所置ニ就テモ別ニ多言ヲ要セス。壓迫繃帶ハ施術後二十四時間於テハ善良ナル經過ニ保續セシメ、次テ之ヲ交換スルヲ毎日二回トスヘシ。病室ハ少シク暗黒ナルヲ要シ、患者ハ可及的安靜ナルヲ佳良トスレド、瓣狀摘出術ニ於ル如ク嚴密ナルヲ要セスシテ、時宜ニ依リ手術後僅一日ニシテ患者ノ臥床ヲ離ル、ヲ許スヲアリ、又食物ハ温暖ニシテ咀嚼ヲ要スル者ヲ與フ可ラス、又皮質少塊眼球内ニ遺殘セルトハ、二三滴ノ亞篤魯比涅ヲ點眼シ、瞳孔散大ヲ持長ス可シ、但シ尋常ノ經過ヲナストハ、亞篤魯比涅及ヒ「エゼリン」ヲ施用セサルヲ可トス、次テ手術後三日乃至四日ヲ經レハ壓定繃帶ヲ去テ覆眼布ヲ與ヘ、第二週ノ終ニ至レハ青色ノ眼鏡ヲ裝フテ退院スルヲ許ス可シ。

數多ノ眼科醫ハ、白内障手術ニ防腐繃帶及ヒ施術後ニ防腐所置ヲ施セリ、然レド眼科手術ニハ別ニ嚴密ノ防腐法ヲ要セスト雖モ、可及的妥ニ注意シ、手術用器械ハ先ツ稀薄ノ石炭酸或ハ水楊酸溶液ニ浸シ、施術後

ニハ同溶液ヲ以テ眼瞼及ヒ下結膜囊ヲ洗滌スルヲ長トス

〔術中及ヒ術後偶發スル障害〕

開瞼器或ハ固定鉗子ヲ

裝置スル際、患者甚ク不穩ナルトハ、「クロ、フォルム」ヲ用テ患者ヲ沈醉セシムヘシ、然レド創口線狀ナルヲ以テ、麻醉劑ノ爲ニ發起スル危害ハ、瓣狀摘出術ニ於ル如ク恐ル、ニ足サル者トス。マイエル氏ハ眼球ヲ觸診シテ強大ノ眼球内壓ヲ確認スル際、特ニ麻醉法ヲ稱用セリ。

創口ヲ造ルノ際、誤テ角膜縁ヨリ過大或ハ過小ノ距離ニ刀ヲ刺入シ、刀尖既ニ前房内ニ穿入セルノ後、初メテ此過失ヲ知ルトハ、己ムヲ得ス刀ヲ退却シ、暫ク手術ヲ休止スヘシ、次テ暫時ニシテ最モ微小ノ創口ハ、癒合シ、二三日後ニハ手術ヲ再施シ得ルニ至ル、又刀ノ刺入點ヲ角膜縁ヨリ正規ノ距離ニ施スモ、其位置高ニ過キ或ハ低ニ過ルトハ、適當ノ貫出點ヲ撰擇シ、以テ截開口ノ大サヲ變セ

フシテ其差異ヲ平均スヘシ然ルモ微ニ虹彩裂孔ノ位置ヲ變異  
スルノミニシテ他ニ障害ヲ來スコトナシ  
刀尖若シ正規ノ貫出點ニ至ラズ其尖端未タ鞏膜ヲ穿出セサル前  
ニ此過失ヲ認知スルキハ器械ヲ前房内ニ戻却シ以テ正キ貫出點  
ニ向ハシム可シ但シ斯ノ如クスルモ房水ハ決シテ排出スル者ニ  
非ス刀形ノ適當ナ刀尖鞏膜ヲ穿出スルニ當リ初テ流出スルモノ  
ナリ又罕ニハ此噴出セル房水結膜ヲ膨起シテ大ナル水胞形ヲ生  
スルコトアリ此水胞ハ通例結膜瓣ヲ截開スルニ依テ直ニ消亡スル  
モノナリ  
虹彩若シ其瞳孔線ノ癒着ニ由リ或ハ眼球緊張ノ非常ニ微弱ナル  
ニ由リ自ラ創口ニ脫出セサルモハ其原因ニ從ヒ種々ノ手術ヲ要  
ス即チ癒着症アル者ニハ虹彩切除通式ノ如ク彎曲セル鑷子ヲ用  
テ虹彩ヲ牽出ス又眼球内壓ノ微弱ナル者ニハ濕潤セル柔軟ノ海

綿ヲ以テ角膜ヲ鼻側ヨリ顛顛側ニ向テ摩軋スルニ由リ虹彩容易  
ニ脫出スル者ナリ「フアンブル」  
「フエ氏撰」  
前房内ノ出血ハ往々虹彩切除後ニ偶發スル者ニシテ水晶體ヲ精  
細ニ截開スルニ當リ妨害ヲ爲ス者ナリ故ニ微ク創口ヲ哆開シ以  
テ血液ノ排出ヲ試ルヲ長トス  
硝子體脫出ハ過分ニ創口ヲ周邊ニ造ルニ因リ或ハ患者隨意ニ諸  
筋ヲ収縮スルニ因リ或ハ器械ヲ以テ眼球ヲ強壓スルニ因テ發起  
スルモノニシテ蓋シ又「チン」氏小帶ノ萎縮或ハ其局部欲損ノ如キ  
素因アルニ基クモナリ若シ水晶體摘出ニ先チテ硝子體ノ脫出  
スルキハ甚ク不快ナルモノナリ今若シ手術ノ第一節後此危害ニ  
逢フハ速ニ固定鑷子及ヒ開險器ヲ除去シ「クロ」  
「フアルム」ヲ與ヘ  
テ患者ヲ深ク麻醉セシメ介者ヲシテ手指ヲ用テ慎ンテ眼險ヲ發  
開シ以テ手術ヲ終フヘシ且ツ此際續テ硝子體ノ脫出スルヲ防ク

爲メ他ノ手術ニ依ラス直ニ金屬線<sup>ハリガキ</sup>ノ係蹄ヲ用テ水晶體ヲ摘出スヘシ

之ニ反シテ虹彩切除後、或ハ水晶體截開後ニ硝子體脫出ヲ起スルハ、直ニ金屬線<sup>ハリガキ</sup>ノ係蹄ヲ送入シ、疾ニ水晶體ヲ排出ス可シ、而シテ總テ此ノ如キ際ニハ、創口ノ洗滌等ノ爲ニ時ヲ移サズ、可及的速ニ眼瞼ヲ鎖閉シ、直ニ壓迫繃帶ヲ施スヘシ、又角膜弛緩シテ皺襞ヲ生スルモ、其未タ甚シカラサルキハ、繃帶ヲ施スニ由リ治癒上ニ大ナル障害ヲ爲ス者ニ非ス

治癒經過中發顯スル所ノ變常ハ、瓣狀摘出後ノ變常ト畧ホ同一ノ所置ヲ要ス<sup>第六十七</sup>、此變常若シ虹彩炎ノ徵候ヲ以テ發起スルキハ、頻リニ亞篤魯比涅ヲ點滴シ、毛樣神經痛ニハ莫爾比涅ノ皮下注入ヲ施シ、加之水銀塗擦法ヲ行ヒ、數回甘汞ヲ内服セシムヘシ、又手術後二三日間、疼痛ノ劇甚ナルキハ、顳額部ニ數條ノ水蛭ヲ貼シ、後

ニハ、莖著浸ノ溫卷法ヲ最良トス

又一層危險ナルハ、創口ノ化膿ニシテ、其初期ニハ強壓繃帶ヲ施シ、稀薄ノ水楊酸或ハ石炭酸溶液ヲ以テ眼瞼及ヒ創部ヲ綿密ニ洗滌シ、加之五十倍ノピロカルゼン溶液ヲ點眼スヘシ、但シ虹彩炎性刺激ノ初徵ヲ現スヤ、直ニ亞篤魯比涅ヲ以テ之ニ更換セサル可ラス、患者若シ強壓繃帶ニ堪ヘサルキハ、上記ノ防腐溶液ヲ以テ溫卷法トナスヘシ、フオン、ウエッケル氏ハ、鹽酸規尼涅<sup>百五十</sup>ノ溶液ヲ以テ毎時創口ヲ清淨スルノ法ヲ行ヘリ、アルフレット、グレイ、フニ氏ハ、滲潤ノ初期ニ於テ再ビ創部ヲ放開シ、以テ房水ヲ排流セシム可シト云ヘリ、總テ施術后二三日間尋常ノ經過ヲ取ルルハ、殆ント危險症偶發ノ恐アルコトナシ

又施術ノ翌朝、若クハ第二日ノ朝或ハ後日ニ至テ前房内ニ血液ノ蓄積セルヲ經驗スルコト往々之アリ、此出血ハ二三日間繼續シ、又全



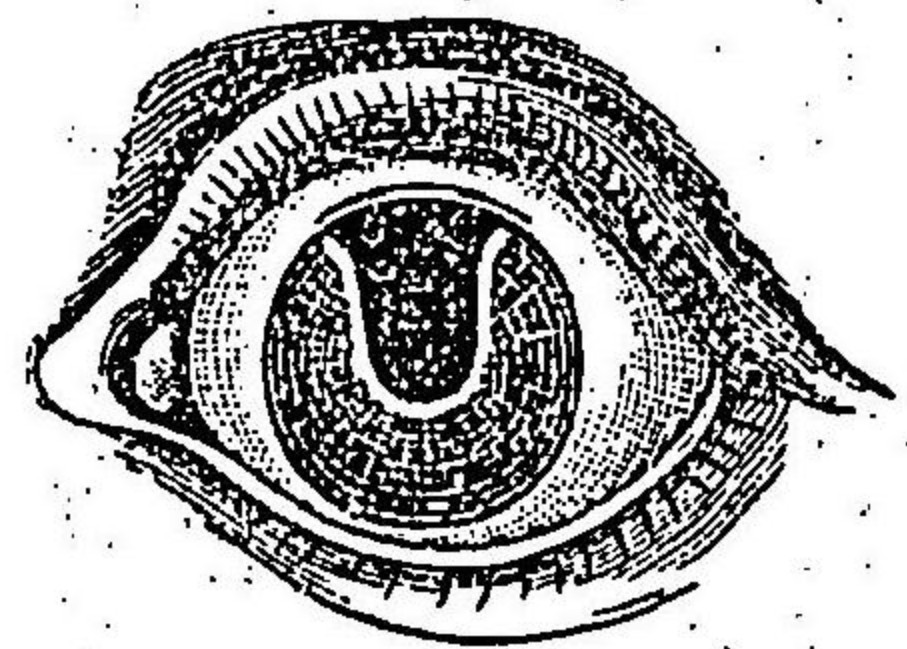
ク吸収スルノ後更ニ再發スルコトアリ、漏出セル血液ニシレンム氏管或ハ虹彩截斷面ヨリ來ル者ニシテ、其量常ニ多カラズ、壓迫繃帶ヲ施スモ、ハ、每常必ス消退スルモノナリ

手術後第二、三或ハ第四日ニ至テ屢、輕易ノ漿液性眼球結膜浮腫ヲ發スルコトアリ、此症ハ眼瞼浮腫、分泌過多、創部ノ滲潤等、總テ刺戟性若シハ炎性症狀ヲ發現スルコトナクシテ、患者唯眼中ニ輕易ノ壓重ヲ訴フノミ、而シテ彎曲セル剪刀ヲ以テ截開スルモ、ハ、浮腫速ニ消散スヘシ

術者ノ不注意ニリシテ、若シ創口ニ於テ虹彩ヲ切除セサルモ、ハ、虹彩ノ一小部癥痕中ニ癒合シ、之カ爲メ久時ヲ經テ多シハ囊腫様癥痕ヲ結ビ、眼球ハ久ク刺戟感受性ヲ有ス、其他亞篤魯比涅ヲ點スルモ、瞳孔ハ善ク散大セス、且ツ創口ニ小ナル膨突ヲ生ジ、癥痕約筋ノ癒合ノ収縮ニ依テ瞳孔遊離縁ハ漸々上方ニ牽引セラレ、爲メニ瞳孔

第十四圖

虹彩切除後、房角括約筋退却ノ圖



孔ハ視望ニ甚ク不適當ノ形狀ヲ得ル者ナリ、而シテ此過失ハ新ニ手術ヲ施スニ非サレハ改良スルコト能ハス、是故ニ吾人ハ初ニ虹彩脫出ヲ綿密ニ切除シ、術中及ヒ術後ニ虹彩括約筋隅角ノ位置ヲ確知スルハ、最も緊要ナルノ件ナリ、若シ未ク創間ニ虹彩ノ箝入シ存スルモ、ハ、直ニ之ヲ挾撮シテ切除シ、括約筋隅角全ク前房中ニ退却

第四十一圖ニ示セク、如スルヲ認ムルニ非サレハ、決シテ此手術ヲ以テ満足ナリトス可ラス

「(一)「キヒレル」リイブライセ」及ヒ「レイブルン」氏手術式

「(二)「キヒレル」氏ハ角膜橫徑ヲ方向ニ直斷シテ摘出法ヲ行ヘリ、但シ刀ノ

圖二十四第

「キニ」ルレヒ 氏法



穿入及ヒ貫出點ハ角膜及ヒ鞏膜ノ疆界線ニ在リ  
トス 第四十二

「三」リーブライヒ氏ノ方式ニ從ヘハ角膜ノ下半部  
ニ於テ微ニ彎曲セル截創ヲ造ル而シテ刀ノ刺入及  
ヒ貫出點ハ鞏膜ニ在ル者トス 第四

十三圖  
ヲ見ヨ

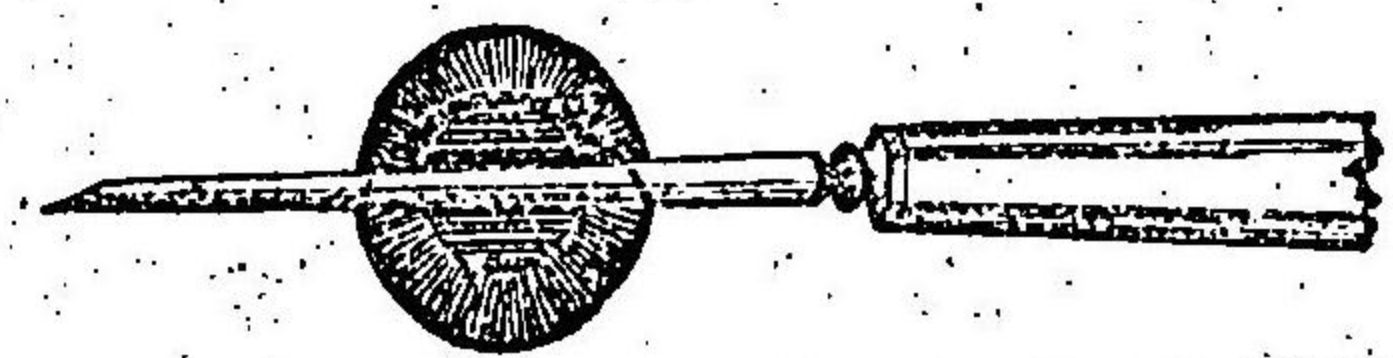
「三」リーブルン氏ノ法ハ角膜横徑 第

ノ兩端下一乃至三ミリメートル 四

ノ部位ニ刀ヲ穿入貫出シ角膜ノ  
上半部ニ三乃至四ミリメートル 四

有長ノ瓣ヲ造ルナリ 第四十四  
圖ヲ見ヨ

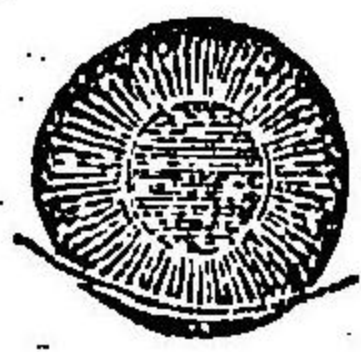
以上ノ三法ニハ虹彩切除法ヲ行  
ハス



「ル」ル 氏法

圖三十四第

「リ」ラフイヒ 氏法



〔四〕白内障ヲ水晶嚢ト共ニ摘出スル法

白内障摘出ヲ一般ノ法トシテ施用セシ以來屢全水晶體系統即チ白内  
障ヲ水晶嚢ト共ニ摘出セントテ企テ蓋シ眼球内ニ遺殘セル水晶嚢  
ハ往々視力ノ障害ヲ爲スト雖モ若シ之ヲ除ン爲メ水晶嚢ヲ其嚢ト共  
ニ摘出スルキハ又大危險ノ將來スルヲ知ラサル可ラス而シテ其危險ヲ  
ルヤ多クハ硝子體ノ甚シキ脱出ト其危重ノ續發症 網膜剝離、眼球内出  
是ナリ然レモ此手術ハ往々善長ナル結果ヲ見ルニ因テ多クノ術者ハ  
其法ヲシテ益改良ヲ加ヘントスルノ念ヲ發セリ特ニ「バトゲンステッセル」  
氏ノ如キハ現今專ラ愛ニ着目セリ  
凡テ此法ヲ施行セントスル手術家ハ患者諸筋ノ収縮ニ因テ硝子體ノ  
脱出スルヲ恐レ最深ノ麻醉ヲ施スヲ多シ  
白内障ヲ其嚢ト共ニ摘出スルニ通常ハ角膜下半部ニ於テ大ナル截開  
ヲ施ス

「バトダ」ンステッヘル氏ハ角膜縁ヨリ大約一「ミ」リメートルヲ隔テ、鞏膜ヲ截斷シ、完全ノ瓣ヲ造成セスシテ、狭小ノ結膜橋狀片ヲ遺存シ、續テ虹彩切除後ニ橋片ヲ切離シ、大ナル匙子ヲ水晶體ノ后方ニ送入シ、以テ全水晶體系統ヲ摘出セリ

又西球牙國「マドリッド」府ノ學士「デルゴウ」氏ハ、左法ヲ試行セリ、即チ第四十五圖ニ示セル小刀ヲ角膜ヲ穿貫シテ前房ニ送入シ、次テ刀尖ヲ退却

第四十五圖 「デルゴウ」氏角膜穿孔器



第四十六圖

同器械ニシテ刀尖ヲ退却セル圖



「レ」フ「エ」氏變式線狀摘出法ヲ上方ニ行ヒ、以テ白內障ヲ水晶體囊ト共ニ摘

出セシメ、以テ白內障ノ周邊ニ輕壓ヲ行ヒ水晶體系統ヲ遊離可動ナラシメ而シテ後器械ヲ去リテ暫時房水ノ再溜スルヲ待チ、次テ「フ」オン「ジ

出セリ

〔五〕通常ノ老人白內障ニハ如何ナル法術ヲ撰

擇セサル可ラサル歟

總テ老人白內障手術中、瓣狀摘出法ハ必ス其効驗アルニ於テハ、最モ完全ノ方術タルヤ言フ俟サル所ナリ、此瓣狀摘出法ハ開縮ヲ營爲スル圓形ノ瞳孔ヲ存シ、眼球ハ尋常ノ外觀ヲ損スルコトナク、虹彩モ亦其機能ヲ失ハス、實ニ適當ノ良法ト謂フヘシ、然リト雖モ最モ精妙ナル手術家ノ說ニ、瓣狀摘出法ニ於テハ、手術ノ効驗ナキ者多シ、又手術後尋常ノ經過ヲ取ル者ト雖モ、或ハ不良ノ障害ヲ偶發スルコトアリト云ヘリ、而シテ輓近ニ至リ「フ」オン「グ」レ「フ」エ「レ」氏法ヲ專用スル手術家ノ言ニ、同氏ノ法術ニ於テハ十全ノ奏効アル者居多ニシテ、總テ手術ノ結果ハ、其施行ノ順整ナルニ關スル者ナリト云ヘリ、又瓣狀摘出法ニ於テハ手術後十四日或ハ其後ニ至ルモ眼球治癒上ニ危險ヲ來スコトアリト雖モ、線狀

摘出法ニ於テハ、手術後僅ニ二三日ヲ送レハ、凶惡ノ症ヲ起スコトナシ、其  
他患者ノ全身狀態ノ如ニ於テモ、蓋シ線狀創ノ結痕ヲ妨害スルコト辦  
狀創ニ於ルモ、少ナル者ナリ

「フォン・グレイフェ」氏法ニ於テ手術ノ失敗些少ニシテ、治癒ノ峻速ナルハ、人  
ノ一般ニ確知スル所ニシテ、爾來遂ニ瓣狀摘出法ヲ行フ者ナキニ至レ  
リ、然ルニ「フォン・ウエッゲル」氏ハ瓣狀摘出法ヲシテ再ヒ發輝セシメ、  
企タリト雖モ、遂ニ「フォン・グレイフェ」氏手術ヲ白內障手術ノ通法トシテ施  
行スルニ至レリ

或人ノ説ニ摘出法ニ虹彩切除法ヲ併用スルモ、一ハ眼球ノ重傷ヲ來  
シ、二ハ瞳孔ノ變形ヲ致スニ因テ太々不可ナリト云ヘリ、然レモ、日常ノ  
實驗ニ由テ之ヲ觀ルニ、虹彩切除ハ決シテ白內障摘出術ノ危險ヲ加ヘ、  
或ハ治癒ヲ緩慢ナラシムルモノニ非スシテ、却テ全水晶體摘出ヲ輕易  
ナラシメ、或ハ眼球内部ノ血行及ヒ壓力ヲ恰好ニ變化スル者ナリ、而シ

テ周邊ニ截開ヲ行ハント欲セハ、常ニ必ス虹彩ヲ切除セサル可ラス、何  
トナレハ若シ虹彩脫出スルモ、之ヲ危險ナク退却セシムル能ハサレハ  
ナリ、虹彩切除法ハ摘出法施行ヨリ二三週前ニ於テ施スチ最良トス、特  
ニ施術セントスル眼球ノ視力稍ク之ヲ再得スルノ望アルモ、又ハ特別  
ノ事故アリテ殊ニ注意ヲ要スルモ、然リトス、總テ摘出法及ヒ虹彩切  
除法ヲ各別ニ施行スルハ、確カニシテ最モ佳良ナリト雖モ、他ノ事情ニ  
由テ屢、此良法ヲ行フ能ハサルコトアリ、極メテ遺憾ナリトス

虹彩切除ニ因テ生スル瞳孔ノ變形ハ、輕微ノ眩矇、網膜上暈圈ノ如キ視  
覺上ノ障害ヲ發起スルカ故ニ、之ヲ施スヲ以テ誤謬ナリトスルハ、大ニ  
不正ナリ、若シ精密ニ正規ノ方法ヲ守リ、以テ角膜上縁ニ施術シ、創間ニ  
虹彩ヲ狭窄スルヲ防クモ、假瞳孔ハ上眼瞼ニ因テ掩ハレ、以テ上記ノ  
障害ヲ防禦スルモノナリ

〔六〕白內障截開法

[Discussion]

〔適應症〕

此法ハ小兒及ヒ二十乃至二十五歳以下ノ者ニ發スル皮質白内障及ヒ水晶體ノ周邊ニ蔓延シテ假瞳孔ヲ造ルモ更ニ視力善良トナラサル所ノ間層白内障ニ適應スル者ナリ又甚ク微弱ノ后發白内障モ亦此法ヲ施用スルコアリ

三十歳或ハ三十五歳後ニ至レハ一回截開法ヲ行フモ白内障ハ徐々ニ吸收セラレ從テ數回ノ截開ヲ要シ加之虹彩ハ水晶體創口ヨリ脱出スル水晶體片若クハ膨脹セル水晶體ノ壓迫ニ堪ユルコ能ハサル者ナリ故ニ老年ニ發生スル白内障ヲ截開スルハ危重ノ虹彩炎ト其恐ル可キ續發症ヲ將來ス

此截開法ハ前水晶體ヲ截割シ水晶體實質ヲシテ直ニ房水ニ觸浸シ以テ之ヲ軟化シ吸收セシムルノ目的ヲ達スルノ法ナリ蓋シ水晶體ノ吸收セラレヤ患者ノ年齢ト白内障硬軟ノ度ニ從テ數週乃至數月ニ亘ル者ナリ且ツ房水水晶體中ニ浸入スル愈饒多ナレハ水晶體ノ吸收セ

ラルモ亦愈迅速ナリトス但シ此房水浸入ノ多少ハ水晶體創口ノ大小ニ關スルモノナリ而シテ房水直ニ白内障ニ觸ルヤ其硬軟ト變創ノ大小ニ準シテ水晶體容積ノ増大ヲ致ス者ナリ

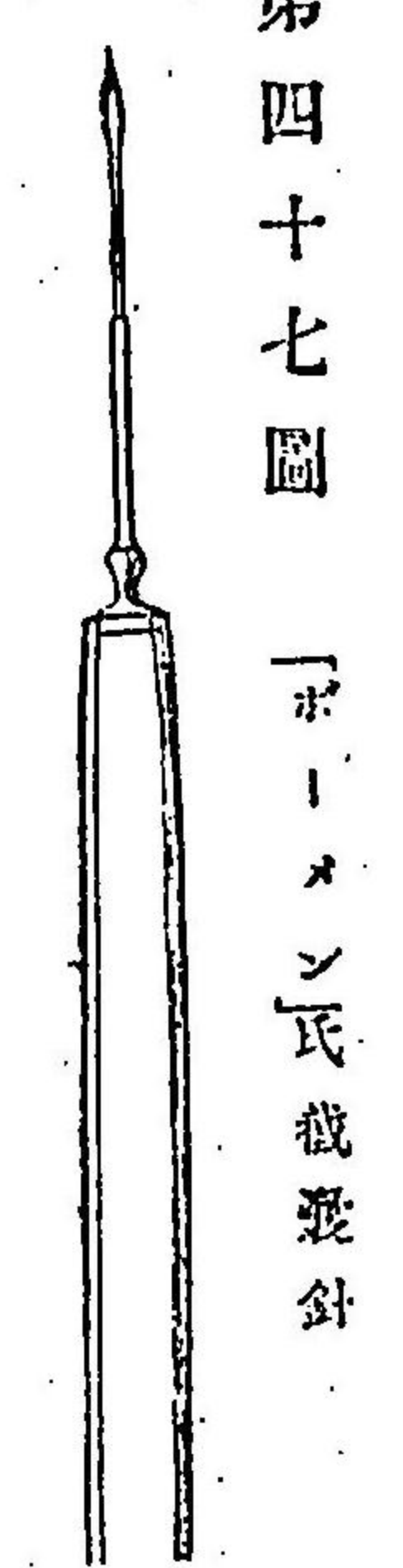
此ノ如ク虹彩ハ卒然壓迫ヲ受ルカ爲ニ危險症ヲ發スルニ由テ施術前預メ白内障ノ性質及ヒ虹彩ノ刺戟ニ堪ユ可キヤ否ヲ精細ニ檢セサル可ラス而シテ白内障ノ硬軟ニ從テ其特異ノ徵候ハ既ニ上條ニ細記セルヲ以テ爰ニ之ヲ畧ス

第四十丁 又虹彩ノ刺戟ニ感シ易キヤ否ハ亞篤魯比涅ノ瞳孔ニ作用スルニ依リ確定シ得可キ者ニシテ若シ瞳孔速ニ散大シ且ツ其經久持續スルヤハ虹彩ハ善ク截開法ニ堪ユ可キヲ判決シ得ベシ

フアン、グレ 氏說 是故ニ柔軟ノ白内障及ヒ虹彩抵抗力ノ強ナル者ニ即チ初生兒ニ於テハ大ニ水晶體ヲ截開スルヲ得可シ若シ之ニ反セル者ハ臨時ニ蓋截開ノ大小ヲ定ム可キ者トス然レモ茲ニ一級ノ規律ト爲ス可キ者アリ即チ水晶體ニ過大ノ截開ヲ施サンコト寧ロ過小ニ

截割ス可キ是ナリ  
 又少シク佳良ナラサル症ニハ、水晶嚢ヲ點刺スルノミニシテ止メ、吸取  
 ノ歇止スルニ至テ、手術ヲ再行スルヲ佳トス  
 間層白内障ニハ必ス唯、微小ノ嚢截開ヲ行フヲ良トス、何トナレハ尙ホ  
 透明ノ皮質ハ、房水ノ速ニ浸潤スルカ爲ニ甚シキ水晶體ノ膨脹ヲ將來  
 スルヲ以テナリ

〔手術ノ準備〕 水晶嚢截開ヲ行フニハ、充全ノ瞳孔散大ヲ要スル  
 カ故ニ、先ツ亞篤魯比涅ノ濃溶液ヲ點眼ス可シ、小兒ハ布襪ニ包ミテ、以  
 テ四肢ヲ動搖スルヲ防クト雖、亦往々麻酔劑ヲ要スルヲアリ  
 手術ニ要スル器械ハ、眼球固定鑷子及ヒ截嚢針ナリ、此針ハ其尖端全ク



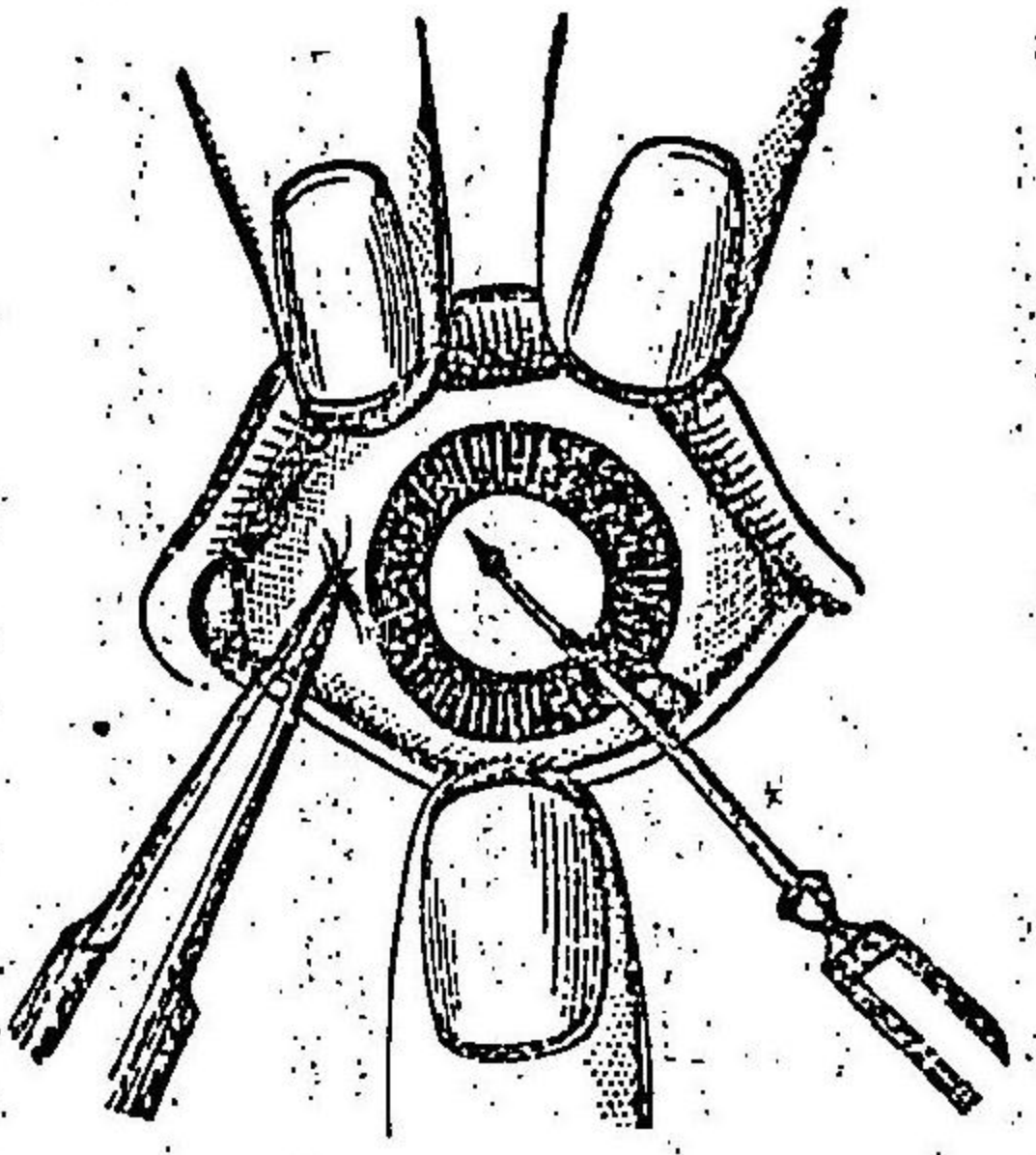
第四十七圖 「ボーマン氏」截嚢針  
 創口ヲ充盈シ得ルノ形狀ヲ  
 有シ、以テ早ク房水ノ流出ス  
 ルヲ預防セサル可ラス、而シ

テ、玆ニ適當セルハ、ボーマン氏針ナリ、此針ハ尖端ヨリ一定ノ所ニ鑿ノ  
 如キ止點アリテ、以テ針ノ眼中ニ深入スルヲ防クノ用ヲナス

〔施術式〕 先ツ患者ヲ扶ケテ、手術臺ニ仰臥セシメ、其頭部ヲ固定シ、  
 介者ニ眼瞼ヲ發開セシムヘシ、若シ介者ナキハ、開瞼器ヲ用ルモ亦佳  
 ナリ、而シテ術者ハ左眼ニ手術スルニハ、患者ニ對坐シ、右眼ニハ患者ノ頭  
 部ニ立ツヘシ

是ニ於テ術者ハ右手ニ針ヲ取り、左手ニ固定鑷子ヲ以テ、角膜内縁ノ少  
 シ上方ニ於テ、眼球結膜ヲ挾撮シ、角膜中央ヨリ下方ニ當テ、針尖ヲ角  
 膜表面ニ向ケ、散大セル瞳孔縁ニ對シテ、殆ント鉛直ニ刺入スヘシ、但シ  
 此際總テ虹彩ノ損傷ヲ避クヘシ、次ニ針尖前房内ニ至ラハ、術者ハ直ニ  
 針柄ヲ下方ニ傾ケ、針尖ヲ瞳孔上縁ニ向ケテ進入シ、之ヲ離ル、二ミリ  
 メートルノ所ニ至ラシメ、第四十八圖ヲ見ユ以テ水晶嚢ヲ鉛直ニ截開ス、此際針  
 尖微ニ退却シテ、其水晶體中ニ深入スルヲ避ク可シ、今上記ノ規則ニ從

第四十八圖  
白內障截開法



孔内縁ニ向ケテ水晶嚢ニ横截開ヲ施スヘシ、但シ其截開ハ内外瞳孔縁ヨリ各一ミリメートルヲ距リ、亦上記ノ理由ヨリテ截割ノ際針尖ヲ微ニ退却セムヘシ

術者ハ針頸ヲ以テ角膜創口ニ強壓ヲ行フ可ラス、而シテ手術中角膜創口ヲ針ノ運動中點支點トナス可シ

施術後ハ壓迫繃帶ヲ施シ、患者ヲ二十四時間暗室ニ安臥セシメ、繃帶ヲ

ヒ、唯單一ツ截開ヲ要スルハ、玆ニ於テ直ニ針ヲ拔出シ、固定鑷子ヲ除去シ、介者ニ眼瞼ヲ緩メ、以テ手術ヲ終ル者トス、若シ之ニ反シテ大ナル截開ヲ要スルハ、鉛直截開ヲ終ルノ後針尖ヲ轉シテ、以テ其両刃ヲ眼ノ兩眥ニ對向セシメ、針尖ヲ瞳

交換スル毎ニ、亞篤魯比涅ヲ點滴シ、且ツ水晶體全ク吸收消失スルニ至ルマテ、之ヲ持長スヘシ、若シ亞篤魯比涅ノ點眼ヲ情リ、瞳孔ノ散大ヲ持長セシメサルハ、虹彩ハ其収縮ニ因テ全水晶體ノ膨脹スル間、常ニ危險ノ壓迫ヲ蒙ルモノナリ

順整ナル治癒經過ニ於テハ、二三日ヲ經テ覆眼布ヲ以テ壓迫繃帶ニ換用シ、后ニハ青色ノ眼鏡ヲ與フヘシ

施術后二三時ヲ經テ、水晶嚢創間ニ硝子樣質ヲ發生シ、創口ヲ閉塞シ、以テ吸收ノ休止スルハ、眼球刺戟症及ヒ充血、角膜周ノ消散スルヲ待テ、此手術ヲ反復スヘシ、而シテ白內障ノ容積其吸收ニ因リ愈々減少スルハ、斷乎トシテ再開ヲ行フヲ得ヘシ、又吸收既ニ進マスレテ、膨脹セル水晶體質ノ遺存セサルヲ確識スルニハ、集光療法ニ據リ、屢之カ檢査ヲ行フヘシ

白內障ヲ截割シテ其全ク吸收セラレ、ヤ、患者ノ年齢及ヒ白內障ノ硬

軟ニ從テ、其時日ヲ異ニス、即チ嬰兒ニ在テハ、水晶體ハ六乃至十週間ニ  
吸収セラレ、而シテ唯一回ノ施術ヲ以テ足レリトス、且ツ此年齡ニ於テ  
ハ、虹彩甚々刺戟ニ感シ難キヲ以テ、廣潤ノ水晶體截開ヲ施スモ危害少  
シトス、老人ニ於テハ、注意シテ囊截開ヲ行ヒ、且ツ數回反復セサルヲ得  
ス、而シテ水晶體ノ全ク吸収スルニ至ルマテ、數月乃至一年以上ニ亘ル  
コアリ

〔施術後偶發障害〕

施術后最モ屢發顯スル合併症ハ、虹彩  
炎ニシテ、大抵脫出セル水晶體質ト抵觸スルニ因リ、或ハ膨脹セル  
水晶體、虹彩後面ニ非常ノ壓迫ヲ爲スニ因テ發スルモノナリ、若シ  
虹彩炎ニ罹ルルハ、患者ハ眼中、眼圍及ヒ頭蓋全半部ニ疼痛ヲ訴ヘ、  
角膜周擁充血、房水渾濁、虹彩變色及ヒ瞳孔収縮ヲ併發ス、虹彩炎若  
シ膨脹セル白内障ノ壓迫ニ因テ發生シ、亞篤魯比涅ヲ點眼スルモ  
瞳孔速ニ散大セス、從テ虹彩危險ナル壓迫ヲ免ル、コ能ハスシテ、

虹彩炎モ消散セサルハ、顳額部ノ瀉血、灰白水銀軟膏塗擦等ノ如  
キ虹彩炎ノ治法、一トシテ其効ヲ奏スルモノニ非ス、故ニ可及的速  
ニ線狀摘出虹彩切除併用法ヲ施シテ、以テ眼球ヲシテ危重ノ症ニ  
陥ラレムルコ勿レ

此手術ハ虹彩切除法ヲ兼併スルヲ以テ、虹彩炎ノ爲ニ甚々危險ナ  
ルカ如シト雖モ、水晶體ヲ容易ニ摘出セント欲セハ、必ス之ヲ行ハ  
サル可ラス、何トナレハ、瞳孔ハ通例甚シク收縮シ、且ツ屢、虹彩后癒  
着症ノ存スルカ爲メ、甚々微弱ノ散大ヲ營ムヲ以テナリ、其他既ニ  
虹彩切除法ノ條ニ説明セル如ク、此手術ハ虹彩炎ヲ催劇セスシテ、  
反テ之ヲ抑壓スルモノナリ

廣潤ナル水晶體截開ノ爲ニ饒多ノ水晶體質若クハ核ノ前房内ニ  
沈着スルモ、亦虹彩炎ヲ發スト雖モ、其現症ハ甚々劇烈ナラス、此症  
ニハ先ツ亞篤魯比涅ノミヲ施用シ、或ハ試ニ水捲法ヲ兼用ス可シ



「アハト」然レハ虹彩炎猶ホ持長シ、或ハ却テ増劇スルキハ、前房ヨリ  
 水晶體ヲ除去セサルヲ得ス、而シテ今斯ノ如ク前房内ヲ掃除スルキ  
 ハ、虹彩炎自ラ消散セシメ、或ハ其治療ニ依テ治癒スル者ナリ  
 白内障軟性若クハ液様ニシテ、手術後必ス饒多ノ水晶體質、直ニ前  
 房内ニ脱落スルヲ預知シ、加之患者年少ニシテ線狀滴出法ノ適應  
 セル者ニ「フォン、グレイフェ」氏ハ廣幅ノ針ヲ取り、角膜ヲ透刺シテ、以テ  
 水晶囊截開ヲ施セリ、其法針刃ヲ眼背ニ對シテ角膜上ニ曠置シ、角  
 膜ヲ斜メニ透刺シテ前房内ニ送入シ、房水ノ流出スルニ前テ水晶  
 囊ヲ截開シ終リ、而シテ針ヲ退却スル際、角膜創口ノ下縁ニ輕壓ヲ  
 行ヒ、以テ房水及ヒ液様白内障ノ一部分ヲ排流セシムルニ在リ、然  
 レモ猶ホ夥多ノ水晶體質眼中ニ遺殘スルハ、房水ノ再溜スルヲ  
 待チ「アチール」氏彎曲小鏡ヲ以テ創口下縁ニ輕壓ヲ行ヒ、之ヲ再ヒ  
 哆開セシム、而シテ白内障ノ最モ液様ノ部ノミ排出セシメ微ニ膠

様ノ渾濁片ハ、別ニ刺戟性作用ヲ爲サ、ルヲ以テ、眼中ニ遺殘セシ  
 メテ其吸收ヲ待ツモ害ナシトス「フォン、グレイフェ」氏說  
 又穿針部ニ於テ角膜ノ刺戟症ト滲潤ヲ偶發スルコトアリ、此合併症  
 ハ極メテ罕ニシ、誤テ角膜ヲ牽張スルニ起因シ、或ハ患者特異ノ刺  
 戟性ナルニ關スル者ナラン、此偶發症ニハ通常堅固ノ壓迫繃帶ヲ  
 持長シ、間溫濕法ヲ行フヘシ

〔七〕白内障截開虹彩切除併用法

此併用法ハ幼年ニ發生セル白内障ニシテ、亞篤魯比涅ヲ用ルモ毫モ瞳  
 孔ノ散大セサルモノニ稱用ス、而シテ亞篤魯比涅ノ此作用ヲ營マサル  
 ハ、間置虹彩炎性ノ癒着症アルニ起因シ、或ハ特リ瞳孔硬固ニシテ感應  
 セサルニ因ルモノナリ、又十五歳以上ノ者ニ於テ、預メ其白内障ノ吸收  
 セラル、コト緩慢ナル者、例之開層白内障ノ如キテ、認知シ得ルキハ、截開  
 法ヲ施スノ前、虹彩切除法ヲ行フ可シ、然レモ開層白内障ニ於テ十五歳

以下ノ者ニ單一ノ截開法ヲ行ヒ、十五歳以上ノ者ニハ虹彩切除法ヲ併用スルト云ノ謂ニ非ス、此白内障ニ於テモ亦虹彩ノ刺戟ニ感シ易キト否ラサルトニ因テ手術ヲ異ニセサル可ラス、而シテ實驗ニ據ルニ間層白内障ハ截開後特ニ其容積増大スルカ故ニ、最モ注意セサル可ラス、故ニ先ツ虹彩切除法ヲ施シ、只微ニ水晶囊ヲ截開シ、需要ニ應シテ、以テ屢手術ヲ反復スルヲ長トス、又虹彩切除ヲ施スルハ、水晶囊ヲ大ニ截開シ、從テ吸収スルノ時日ヲ短縮シ得ルノ益アリ、又虹彩切除法ヲ施シテ効驗アルハ、虹彩ニ膨脹セル白内障及ヒ脱出セル水晶體質ノ壓迫ヲ受ルモ、容易ニ之ニ順從スルト、括約筋截斷ノ爲ニ虹彩ノ感應活潑ナラサルトニ因ルモノニシテ、縱令ヒ虹彩炎ヲ發生スルコトアルモ、其經過ハ甚タ緩和ナリ

輒近ニ至リ、此截開法ニ適應セル白内障ニ「フォン、グレイフ」氏線狀摘出法ヲ換用セリ、蓋シ此線狀摘出法ハ一時ニ白内障ヲ除去スルノ便益アリ

ト雖モ、白内障截開虹彩切除併用法ニ在テハ、少クモ二回ノ手術ヲ行ヒ、未タ是ヲ以テ足リトセサルモ、三回或ハ四回ノ手術ヲ要シ、白内障ノ全ク吸収スルニ至ルマテ、幾多ノ日月ヲ費サ、ルヲ得サルナリ、故ニ患者若シ久シク施療ヲ受ルノ時日ニ障碍アルカ、若クハ眼球特ニ刺戟ニ感シ易キ者ハ「フォン、グレイフ」氏線狀摘出法ヲ施スニ如カス

白内障截開虹彩切除併用法ヲ施行スルニ就テ、論載スヘキハ、虹彩切除ヲ常ニ上方ニ行ヒ、以テ虹彩裂孔ヲシテ可及的上眼瞼ヨリ蓋ハシムル是ナリ、且ツ創口ニ虹彩ノ籍牽スルト、後ニ瞳孔牽引セラレテ轉位スルトチ免レン爲メ、總テ上記ノ法則ニ遵フヘシ、又虹彩切除法ノ術式ハ第二卷二十八丁ニ詳論セルヲ以テ、爰ニ之ヲ畧ス

今虹彩切除法ヲ施シ、續テ白内障截開ヲ行フニハ、多少時日ヲ費サ、ル可ラス、或ハ罕ニ十二乃至十四日ヲ以テ足レリトスルアリ、或ハ數週間ニシテ刺戟症狀ノ全ク消失スルニ至ルヲ待テ、此截開法ヲ行フヘキ

アリ而シテ施術後ノ措置及ヒ偶發障害ノ治法ハ單純截開法ニ於ルト  
同一ナリ

(八)白内障截開法ヲ摘出ノ預備法トシテ施用

スルノ論

白内障ハ極メテ徐々ニ成熟期ニ進ミ患者其之ヲ待ツニ堪ヘス頻リニ  
施術ヲ希望スルモ未タ之ヲ施ス能ハサルト屢之アリ此ノ如キ白内障  
ハ其經過中患者最近接ノ所ニ於テ稍シ指數ヲ算シ得ルノ時機ニ達シ  
而シテ醫士ハ此白内障特異ノ外觀ト往時ノ經過トヲ實驗シテ其成熟ニ  
至ルハ猶ホ未タ遠キニ有ルヲ判決スレド又一考スレハ未タ成熟ニ至  
ラサル白内障ヲ摘出スルハ如何ナルヤノ疑アリ  
蓋シ眼球内ニ遺殘セル透明ノ皮質ハ後チ甚シク膨脹シテ手術ノ治癒  
期ニ當リ恐ル可キ合併症ヲ發スルコトアリ故ニ術者ハ此危險ヲ冒シテ  
手術ヲ施ス可キヤ或ハ患者ヲシテ久ク白内障ノ成熟ニ至ルヲ俟タシ

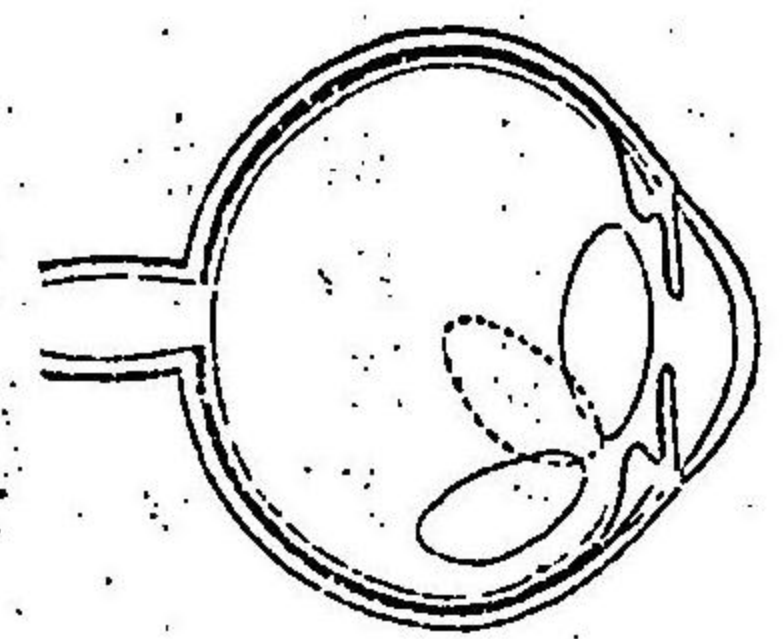
ムルヤノ兩路ノ何レカヲ選擇セサル可ラス此困難ナル際ニ當リフォン、  
グレイフ<sup>エ</sup>氏ハ水晶體截開ヲ施シテ猶ホ透明ナル水晶體質ヲ渾濁セシ  
メントスルノ考案ヲ出シ同時ニマンハルト<sup>ト</sup>氏ト共ニ水晶體ヲ點刺シ  
針尖ヲ透明ノ皮質中ニ送入スルノ法ヲ行ヘリ此手術ハ水晶體截開ノ  
僅ニ過大ナルモ白内障非常ニ膨脹シ眼球ヲシテ危重ノ症ニ陥ラシム  
ルヲ以テ細心注意セサル可ラス續テ二三日ヲ經テ線狀摘出法ヲ行ヒ  
以テ膨大セル白内障ヲ全ク除去スルナリ

然レモ吾人ハフォン、グレイフ<sup>エ</sup>氏變式線狀摘出法ニ依テ透明ナル水晶體  
部モ亦容易ニ全除シ得ルヲ認知セシ以來人工ヲ以テ不熟白内障ヲ成  
熟セシムルノ奇巧ナル考案モ多ク其體積ヲ落セリ蓋シ此摘出法ヲ不  
熟白内障ニ施用スルモ其結果ハ別ニ佳良ナラサルコトナシトス

(九)白内障撥下法 レクリナチオン  
[Reclination]

此法ハ白内障手術ノ最モ古型ニシテ現今學術上ノ位置ヨリ之ヲ

觀レハ、唯手術ノ沿革ヲ思想スルニ過サルノミ、抑此法タル水晶體  
ヲ瞳孔ノ位置ヨリ他ニ轉倒スルノ手術ニシテ、患者ハ手術后暫ク視  
カノ善長ナルヲ喜ブモ、此轉倒セル水晶體ハ、多クハ眼内異物ノ如  
ク作用シテ、危篤ノ諸症ヲ誘發スルヲ以テ、當今此法ヲ行フ者ナキ  
ニ至レリ

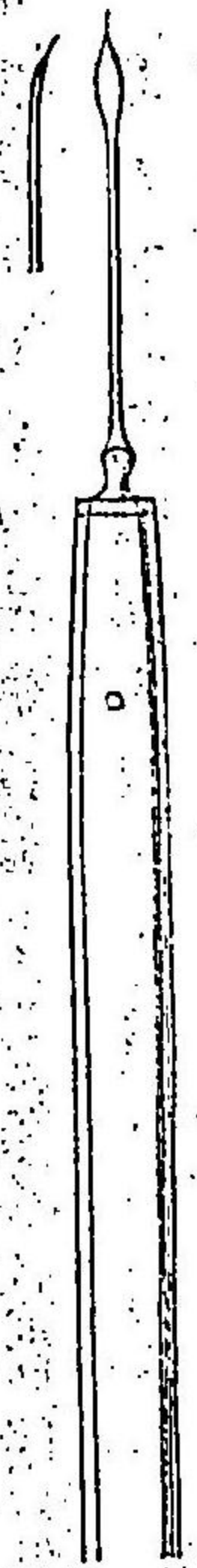


第十四圖 白內障ノ撥下法

白內障ヲ沈降スルニ、從來各種ノ法術アリ  
ト雖、就中其最モ稱用サレタルハ、撥下法  
ニシテ、水晶體ヲ沈降スルト同時ニ其上緣  
ヲ後方、前面ヲ上方及ヒ後面ヲ下方ニ向テ

硝子體中ニ轉倒スルノ術ナリ 第四十九圖 此手術ニ要スル器械ハ、少

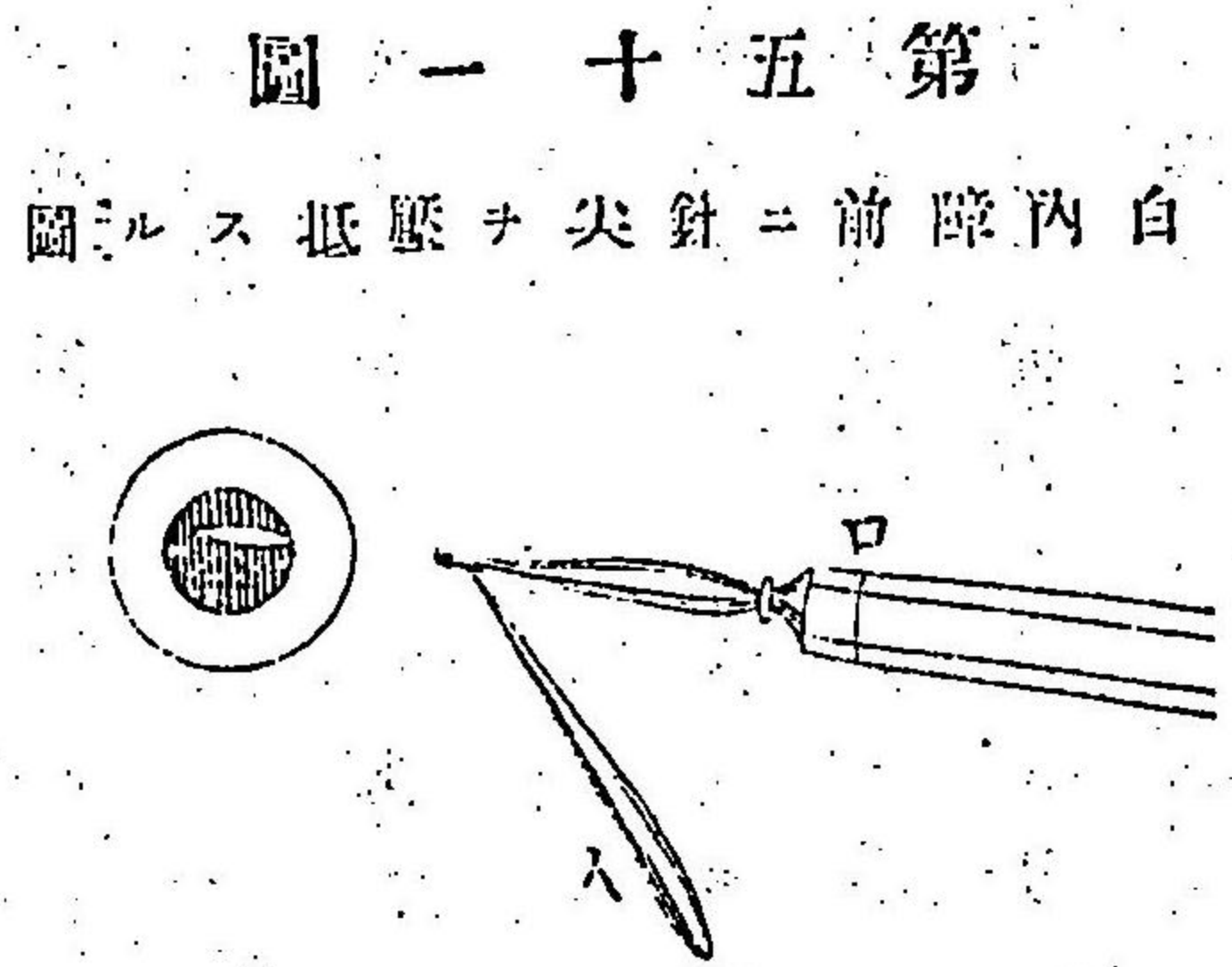
第五十圖 白內障針



乃ノ白內障針ナ  
リ 第五十圖  
ヲ見ヨ

〔施術式〕

先ツ亞篤魯比涅ヲ用テ瞳孔ヲ散大シ、介者ヲシテ眼  
驗ヲ發開セシメ、或ハ開驗器ヲ挿置ス、術者ハ左手ニ眼球固定鉗子  
ヲ把リ、角膜內緣ノ近傍ニ於テ眼球結膜ヲ挾撮シ、右手ヲ以テ角膜  
顯顯線ヨリ三ミリメートル外方ニ當テ、橫徑線ヨリ少シク下方ノ  
鞏膜ニ穿針ス、而シテ今若シ前圖ノ如キ彎曲針ヲ用ルルハ、其凸側ヲ



第十五圖 白內障前ニ針尖ヲ抵スル

上方及ヒ其凹側ヲ下方ニ向テ、針尖ヲ鉛  
直ニ刺入セン爲メ、針柄ヲ少ク下降シ、  
第十一圖ノ針尖既ニ眼内ニ穿入スルヤ、直  
ニ針柄ヲ水平<sup>〔ロ〕</sup>ニ轉シ、眼球中心ニ向  
テ可及的速ニ送入スヘシ、是ニ於テ術者  
ハ、針ヲ少シク捻轉シ、其凸側ヲ前方ニ向  
ケ、且ツ同時ニ針柄ヲ患者ノ顯顯部ニ向  
ケテ後方ニ傾欹シ、針尖ヲ水晶體線ニ向

テ進メ、以テ對側ノ瞳孔縁ノ後方ニ送入スヘシ、然ルキハ第五十一圖ニ示ス如ク、針ノ一面ハ前方ニ對シ、一面ハ水晶體上ニ載置スルヲ見ルヘシ、次テ針ヲ前水晶體ニ向ケ、針ヲ少ク退却シテ、之ヲ水平ニ截開ス可シ、而シテ術者ハ針ノ凹側ヲ水晶體ノ上部ニ當壓シ、針柄ヲ靜ニ前方ニ傾ケテ、以テ水晶體ノ上部ヲ後方ニ轉セシム、水晶體此押壓ニ從テ轉倒スルトハ、益針柄ヲ上方及ヒ同時ニ前方ニ方ニ運動シ、以テ白內障ヲシテ下後及ヒ外方ニ轉セシムヘシ、而シテ預メ白內障ノ再ヒ上浮スルヲ防カン爲メ、暫時針柄ヲ此位置ニ留止セシメ、次テ徐ニ之ヲ瞳孔部ニ退却シ、白內障ノ上浮スルヤ否ヲ見テ、針ヲ拔去スヘシ

(十) 后發白內障手術

后發白內障

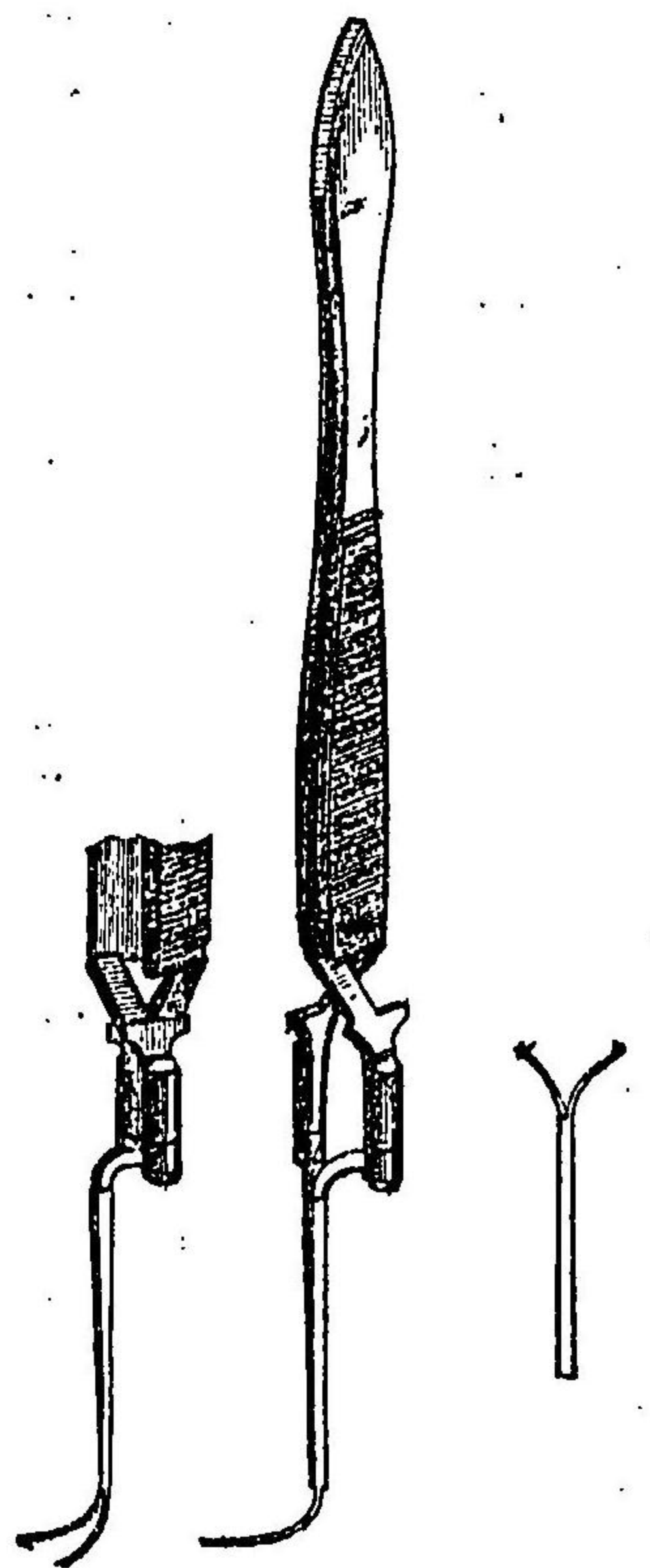
[Cataracta senilis]トハ、白內障手術後、瞳孔部ニ發顯シテ、視力ノ回復ヲ妨クル所ノ諸般 渾濁ヲ總稱スル者ナリ

今白內障ノ手術後ニ眼球ノ屈折變常ヲ補正シ、或ハ患者ノ年齢ヲ以テ考フルモ、視力吾人ノ希望セシ所ニ適セスンガ、集光照法ヲ用テ、眼球ヲ密カニ檢査スヘシ、然ルトハ屢此弱視ノ原因、即チ瞳孔ノ後方ニ非常ニ細纖ナル蛛網渾濁ノ展張セルヲ發見スヘシ、是レ后發白內障ノ最モ輕易ナルモノニシテ、前水晶體上皮細胞ノ贅脹ニ因リ、新生セル組織ヨリ形成スル者ナリ、又往々水晶體創口ノ閉塞スルト同時ニ、囊自ラ肥厚シ、以テ濃稠ノ渾濁ヲ生シ、既ニ肉眼ヲ以テ之ヲ確知シ得ルコアリ、又虹彩モ亦炎症病機ヲ起シ、水晶體渾濁ニ虹彩炎症滲出ヲ合併シ、數多ノ單純ナル后癒着、症若クハ成形質沈澱ヲナス

此後發白內障ハ其種類ニ從テ諸般ノ手術ヲ要ス、然レモ一般ノ法則トシテ此手術ヲ急速ニ施ス可ラス、若シ白內障摘出後、炎症反應愈、長ク且ツ劇烈ナルモ、愈緩ニ時機ヲ待テ、刺戟症狀、眼瞼浮腫、羞明、全ク消散ス

ルニ至リ、初テ第二ノ手術ヲ施ス可シ、若シ過テ此注意ヲ怠ルキハ、炎勢  
 ナシテ再ヒ旺盛ナラシメ、手術ニ因テ収得セル其結果ヲ失スルノミナ  
 ラス更ニ渾濁ヲシテ新タニ増加セシムルノ危険ヲ來ス、然レキハ再ヒ  
 緩慢ニ時ヲ待チ、而後ニ手術ヲ施行ス可シ、  
 若シ虹彩炎性滲出ヲ兼ル者ニハ、特ニ注意ヲ要ス、蓋シ此際ニハ虹彩甚  
 タ饒多ナル新生血管ヲ有シ、手術器械ヲ以テ之ヲ牽引スルニ由リ、再ヒ  
 發炎ノ首起部ト成リ易キ者ナリ、故ニ此ノ如キ症ニ於テハ、往々一年若  
 シハ其以上ヲ經テ、眼球ノ刺戟症狀全ク遏止シ、虹彩ノ血管減却シ、眼球  
 全ク安靜トナルヲ待テ、手術ヲ行フ可シ、然リト雖モ、每常必ス此久時ヲ  
 費ヤスヲ要セス、渾濁微少ナル者ハ、水晶體摘出後二三月ヲ經テ、后發白  
 内障ニ手術ヲ施シ得ルト間、之アリ  
 后發白内障ノ第一種類ノ蛛網狀ニ於テハ、常ニ單純ノ截開法ヲ瞳孔部ノ  
 中心ニ於テ薄キ渾濁ニ施スヲ以テ足レリトス、蓋シ此渾濁ハ尋常ノ光

線ヲ以テ容易ニ認知シ能ハサル者ニ、却テ暗室ニ於テ集光照射法ヲ用  
 ヒ、以テ手術ヲ施スヲ適當ナリトナルヲアリ  
 后發白内障ノ第二種ニ在テハ、單一ノ截開法ヲ施スモ、肥厚セル水晶體  
 渾濁ノ硬固ニシテ容易ニ針及ヨリ他ニ逸スルヲ以テ、屢、大困難ヲ致ス  
 ニアリ、又水晶體鑷子第二卷二十「ライプライヒ」氏鑷子第五十或ハ「セル  
 第五十二圖  
 「ライプライヒ」氏鑷子  
 水晶體鑷子



テルス第五十及ヒ  
 第五十等ノ諸  
 器械ヲ用テ、此  
 渾濁ヲ摘出ス  
 ルノ法ハ、第一  
 角膜ニ截創ヲ  
 施スヲ要シ、第  
 二、危險ヲ來

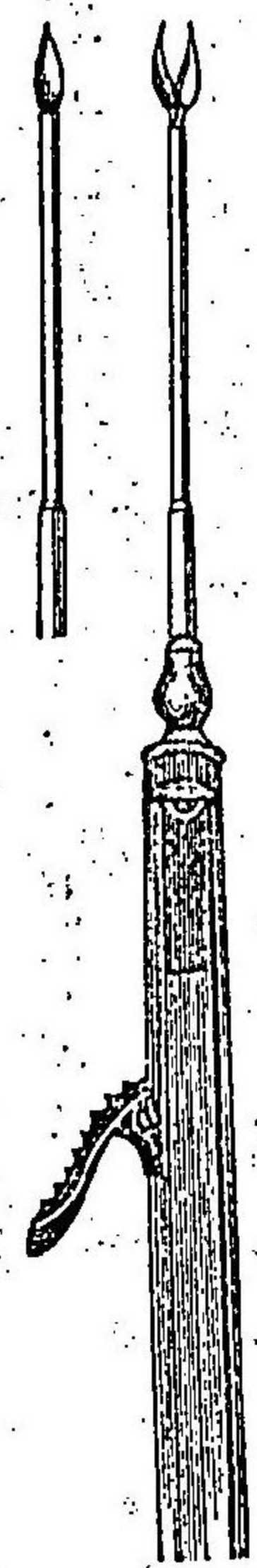
第五十三圖

「セルテルス」



第五十四圖

同

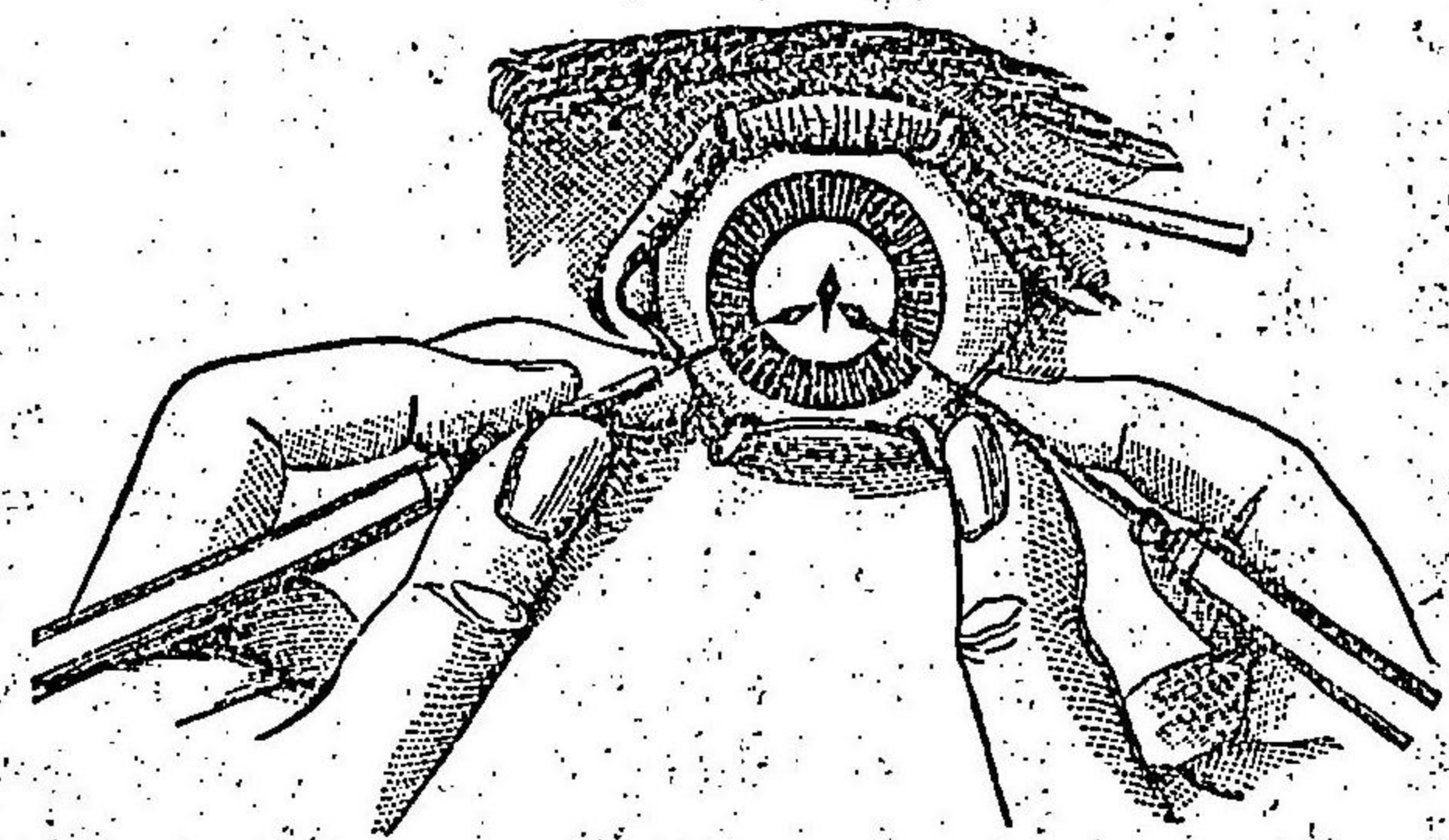


百三十一

シ、加之后發白内障下虹彩トノ癒着アル者ニハ全ク之ヲ行フ能ハス、然リト雖作強ヒテ此渾濁ヲ摘出セント欲セハ先ツ其癒着ヲ切

離シ或ハ前以テ其部ニ虹彩切除法ヲ旋スヘシ此ノ如キ后發白内障ニ最モ適當セル方法ハ「ボウメン」氏ニ針截開法ナリ第五十五圖ヲ見ヨ先ツ左手ニ「ボウメン」氏截囊針ヲ見ルヘシ之ヲ角膜内半部ニ穿貫シテ渾濁中ニ刺入ス、而シテ斯ク眼球ヲ固定スルノ後、右手ニ第三ノ

第五十五圖  
針截開法



截囊針ヲ取リテ角膜顯顯半部ニ刺穿シ第一截囊針ノ現存セル渾濁中ニ之ヲ送、入シ、而シテ後チ兩針尖ヲ以テ渾濁ヲ分割スヘシ、此法ハ其技常ニ輕易ナラスト、難厄、充分瞻視ニ適當ノ孔口ヲ渾濁中ニ形成スルモノナリ、新約克府ノ「アチウ」氏ハ「ラオン」グレット「フ」氏内障眼刀ヲ角膜横經ニ穿刺シ、以テ角膜鼻側及ヒ顯顯側ニ各ニ「リ」メートル「大」ノ創口ヲ造リ、刀ヲ退去スルニ際シ、其刀尖ヲ后發白内障ニ刺シ、次テ鼻側及ヒ顯顯側ノ創口

百三十三

ヨリ各一箇ノ小ナル鈍鉤ヲ前房内ニ送り之ヲ前キニ刀尖ヲ以テ造爲セル渾濁ノ裂孔中ニ深入セシメ而シテ兩鉤ヲ齧シテ牽引シ以テ虹彩或ハ毛樣體ヲ牽張スルヲナク白内障ノ孔口ヲ擴開セリ

爾他ノ后發白内障種ニハ虹彩截開法或ハ虹彩切除法或ハ兩術併用法ヲ用ユ今若シ虹彩切除法ヲ施シ續テ虹彩炎ヲ發生セルカ爲メ前キニ造成セル虹彩裂孔再ヒ閉塞セントスルハ其手術ヲ反復スヘシ而シテ僥倖ニシテ虹彩裂孔ヲ得ルハ試ニ強固ノ鉤ヲ以テ新生膜ヲ抓碎スヘシ蓋シ此等ノ症ニ於テハ裂孔往々再ヒ閉塞シ數回手術ヲ反復スト雖モ遂ニ微少ノ假瞳孔ダモ求メ得サルヲ屢之アリ

此困難ナル際ニ於テフオングレー氏ハ左ノ術式ヲ施行セリ

白内障摘出後水晶體飲亡シ且ツ虹彩ノ後方ニ夥多ノ滲出物ヲ生シ虹彩組織ノ變質角膜平莖等其他險惡ナル虹彩毛樣體炎ノ續症ヲ發スルハ單純ノ虹彩截開法ヲ用ユ即チ銳尖ナル鉸形兩刃刀ヲ角膜及

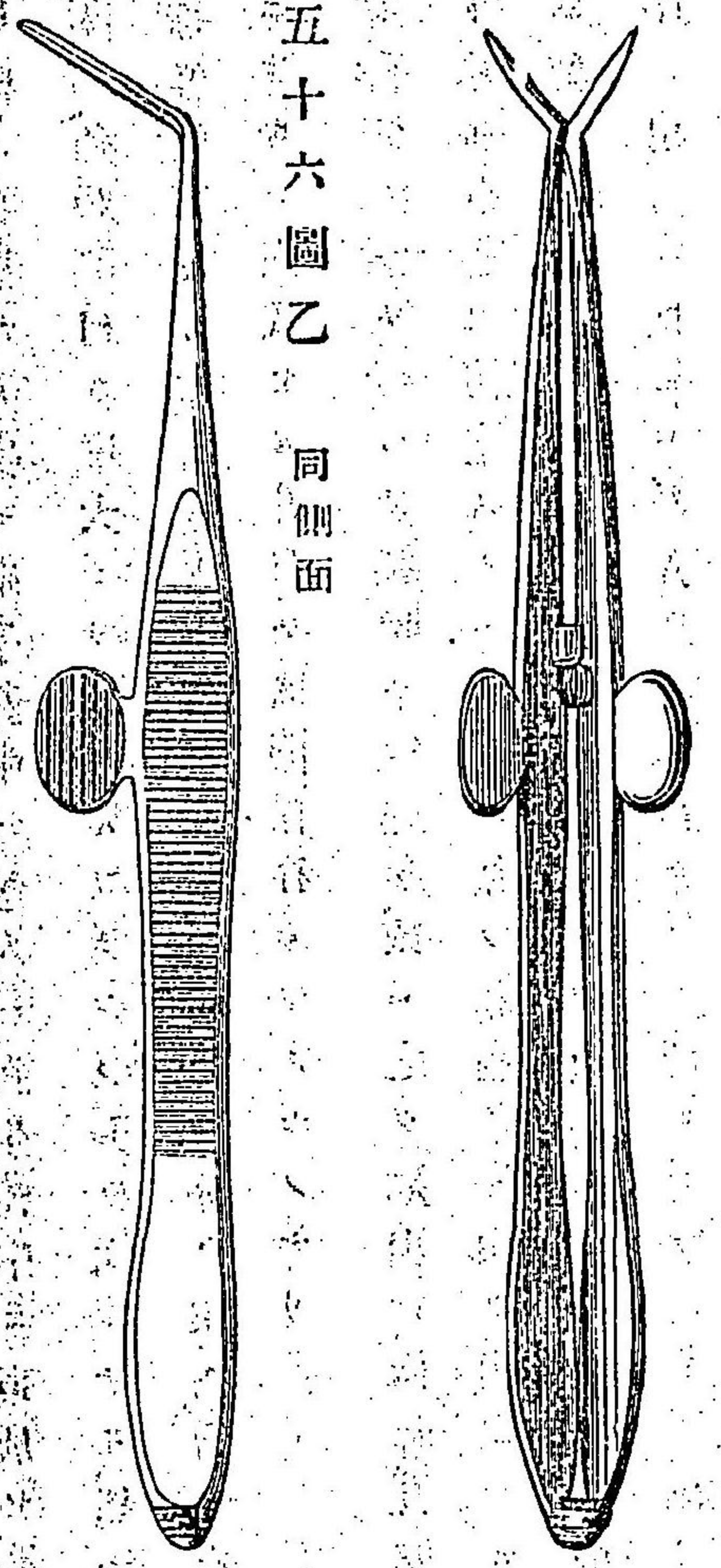
ヒ新生組織ニ穿貫シ刀尖ヲ硝子體中ニ送入シ新生膜中ニ造成セル創口ヲ擴開シ角膜創口ヲ増大ナラシムルヲナクシ刀ヲ去ルナリ然ルレハ此萎縮性虹彩及ヒ水晶體ト癒着セル新生膜ハ充分ノ收縮力ヲ有スルカ故ニ先キニ造成セル孔口ヲ擴開保存シ得ルモノナリ

通例ノ虹彩切除法ヲ行ヒテ義膜ヲ抓碎シ或ハ之ヲ摘出シ假瞳孔ヲ造成スルト雖モ其再ヒ閉塞スルハ蓋シ手術ノ粗劇ナル由リ損傷セル組織ノ直ニ餐脹スルニ基因スル者ナリ又房水排出後眼球内壓ノ減少シテ前房中ニ出血ヲ見ルハ吾人ノ日常目撃スル所ニシテ是レ手術ノ好結果ヲ妨クルノ件ナリ特ニ鑷子ヲ用テ虹彩ノ周緣ヲ牽引シ之カ爲メ徒ニ刺戟ヲ與フルハ通例手術ノ功ヲ奏セサル原因トナルモノナリ單純ノ虹彩截開法ハ之ニ反シテ斯クノ如キ障害ヲ發セス角膜下ノ手術ニシテ皮下手術ト均シク危害ナキ者トス

フオングレー氏ハ又鎌狀刀ヲ成形性滲出物ノ後方ニ送入シテ之ヲ後



方ヨリ前方ニ截開シ、以テ角膜創口ノ微小ナランコトヲ企望セリ 第二卷  
 丁ヲ參考  
 「ウ」氏ハ虹彩截開法ヲ施スニ特別ノ鑷子狀剪刀 第五十六ヲ使用  
 セリ其法先ツ鉾形刀ヲ角膜周邊部「フ」氏線狀摘出法ニ當テ  
 第五十六圖甲 「ウ」氏ハ虹彩截開鏡前面



第五十六圖乙 同側面

角膜及ヒ虹彩ニ穿貫シ、四ミリメートル大ノ創口ヲ造リ、次テ鑷子狀剪  
 刀ノ一枝ヲ虹彩ノ後方ニ、他ノ一枝ヲ其前方ニ送入シ、以テ斜ニ下方ニ  
 向テ五乃至六ミリメートル大ノ截開ヲ施スニ在リ、然レモ創口若シ充  
 分ニ哆開セズンハ、尙ホ剪刀ヲ用テ第一截創ヨリシテ第二截開ヲ爲ス  
 フ法トス、然ルモハ、玆ニ一ノ膜瓣ヲ生シ、此瓣ハ自ラ萎縮シ退去スルモ  
 ノナリ、第二卷六十九丁  
 又此手術ノ施行ヲ單簡ニシ、剪刀枝ニ因リ、組織ノ挫傷スルヲ避ケ、硝子  
 體ノ脱出ヲ免レンカ爲メ「シ」氏ハ「フ」氏ノ初法ニ從ヒ、特  
 異ノ鎌狀針ヲ用テ虹彩截開法ヲ施行セリ、即チ先ツ此針ヲ以テ、前房ニ  
 リンテ虹彩縁及ヒ瞳孔義膜ニ單一ノ截開、或ハ瞳孔ニ向ヒ輻輳スル所  
 ノ二截開ヲ施セリ  
 又「グ」氏ノ手術セル方式ハ甚タ佳適ナリ、殊ニ角膜創間ニ虹彩括  
 約筋隅角ノ適合ヲ、以テ連綿刺衝機ノ原因トナル症ニハ、最モ相當セリ、

其法先ツ鉸形刀ヲ以テ角膜外縁ヨリ大約二ミリメートルノ所ニ於テ、  
 角膜及ヒ虹彩ニ穿刺シ、次テ此創孔ヨリウエッケル氏虹彩截開鉸ノ一枝  
 ナ虹彩ノ後方ニ他ノ一枝ヲ前房中ニ送入シテ、對側ノ瞳孔縁ヨリ三ミ  
 リメートル許深ク進入シ、一回ニ兩瞳孔縁ト其間ニ存スル義膜ヲ截斷  
 スヘシ  
 虹彩組織ノ萎縮ニ由リテ其収縮力微弱トナリ、之カ爲メ虹彩截開口ノ  
 充分膨開セサルハ例之ハ虹彩組織ノ變質及ヒ前房ノ狭小ト虹彩截  
 開法ヲ施スモ其功ヲ奏セサルモノナリ「アドルフ、ウエッケル」及ヒ「フオン、グ  
 レーフェ」兩氏ハ此疑ハキ症ニ左ノ術式ヲ行ヘリ、其法先ツ微ニ彎曲セ  
 ル「銳」尖兩刃ノ鉸狀刀ヲ角膜外縁ニ當テ角膜及ヒ虹彩ニ貫刺シ、虹彩後  
 面ニ沿ヒテ之ト併行ニ刀ヲ進メ、對側ノ角膜縁ニ達シテ全ク刀ヲ貫出  
 シ、以テ創口ヲ作り、次テ細小ノ一鉸ヲ取り、其一枝ヲ角膜ト虹彩ノ間ニ  
 他ノ一枝ヲ虹彩及ヒ義膜ノ后方ニ送入シ、以テ斯ノ如クシテ創口ノ兩

端ニ於テ切斷法ヲ行ヒ、其切離セル膜片ヲ鉸子ニ箝撮シテ牽出スルニ  
 在リ第二卷八十九丁「ボウノン」氏ハ此稠厚ノ后發白內障ニ角膜ノ内外  
 縁ニ於テ各鉸形刀ヲ同時ニ角膜、虹彩及ヒ義膜ニ穿刺シ、次テ鉸ヲ用テ  
 上記ノ如ク切斷法ヲ行ヘリ、「フオン、ウエッケル」氏ハ鉸形刀ヲ角膜上縁ニ於  
 テ角膜、虹彩及ヒ義膜ニ全ク貫刺シ、而シテ後チ兩創端ニ於テ各鉸ヲ以  
 テ虹彩及ヒ后發白內障ヲ角膜下縁ニ向テ斜メニ截開シ、此兩截線互ニ  
 下方ニ集合シ、三角形ヲナシ、以テ此ノ三角截片ヲ虹彩鉸子ニテ除去セ  
 リ、又「クリウケル」氏ハ鉸狀ナル特異ノ器械ヲ創製シ、以テ鎖閉膜ノ一片  
 ナ除去セリ

### 第二章

#### 水晶體脫位症 [Luxatio lentis]

水晶體脫位ニ數種アリ、其中心ノ位置ヲ變セズノ轉位スル者ヲ不全

脱位症ト云ヒ、水晶體全ク其位置ヲ變スル者ヲ完全脱位症ト云フ、就中完全脱位症ニ於テハ、水晶體ハ虹彩及ヒ硝子體ノ間隙ニ存在シテ上方、下方、鼻側或ハ顛顛側ニ變位スルコトアリ、或ハ前房若クハ硝子體內ニ脱落スルコトアリ、或ハ鞏膜ヲ破裂シテ結膜下ニ竊入スルコトアリ、或ハ甚シキハ全ク眼球内ヨリ脱出スルコトアリ、總テ水晶體脱位ハ最モ奇異ノ症候ヲ呈スル者ナリ

(一)水晶體不全脱位症

ルキサチオ Luxatio      ラニチス Lentis      インコンプレタ incompleta

水晶體若シ其常位ヲ變換スルキハ、其前面ニ安載スル虹彩ハ、其支礎ヲ失テ彼所ニ波狀運動ヲ現ハシ、眼球運動ニ從テ其震顛スルヲ見ル、而シテ其對側ニ於テハ、水晶體ノ邊緣角膜ニ近接セルヲ以テ、虹彩ハ前房ニ押出セラレ、爲メニ前房著ク淺狹トナル、但シ虹彩ノ水晶體上ニ載置セサル所ニ於テハ前房深廣トナル  
水晶體ノ甚シキ脱位ニ於テ亞篤魯比涅ヲ以テ瞳孔ヲ散大シ、檢眼鏡ヲ

用テ之ヲ照スキハ、後方ニ傾欹セル水晶體縁ヲ容易ニ確知スヘシ、卽チ其縁ハ弓形ノ黒線トナリテ赤色ノ眼底前ニ現ハレ、瞳孔部ヲ二半部ニ分ツ、而シテ熟練セル檢者ハ、檢眼鏡ヲ以テ瞳孔ノ一半部若クハ他半部ヲ透照スルニ從ヒ、眼底ノ影像ハ病眼ヨリ各種ノ距離ニ映スルヲ認知シ得ル者ナリ

視力障害ハ脱位症ノ強弱ニ從テ異ナリ、水晶體若シ微ニ脱位セルキハ、視力障害モ亦微少ナリト雖モ、調節機ハ多少欹亡ス、水晶體若シ甚ク轉位シテ瞳孔散大ノ際、水晶體縁瞳孔部ニ存スルキハ、視力ハ非常ニ損害ヲ被リ、大抵一眼ノ復視ヲ起ス、又患者物體ヲ視望スルニ水晶體ノ存在セル瞳孔半部ヲ用フルキハ、多クハ高度ノ近視及ヒ不正亂視<sub>后章</sub>ヲ患ル者ナリ

水晶體囊ニ白内障ニ罹リ、續テ其脱位ヲ來シ、瞳孔ノ一部ニ白内障性水晶體ノ存セサルキハ、眼球再ヒ其視力ヲ營爲スルニ至ルコトアリ

〔原因〕水晶體ノ不全脱位症ハ眼球ノ損傷例之ハ眼部ノ打撲ニ因テ生  
ス殊ニ硝子體融解症ナシ氏小帶ノ弛緩若クハ斷裂等ノ如キ素因アル  
キハ水晶體ノ脱位スルヲ從テ容易ナリ又此素因アル者ニハ偶然脱位  
症ノ特發スルヲアリ

水晶體不全脱位症ハ間又介達ニ發生スルヲアリ即チ虹彩ノ一部角膜  
周邊葡萄腫ノ造成ニ與シ而シテ虹彩ノ該部ニ水晶體トノ癒着症ヲ發  
生スルキハ水晶體ハ葡萄腫ノ方向ニ牽引セラレ以テ其變位ヲ致スモ  
ノナリ

水晶體脱位ハ先天ニ稟ルヲアリ而シテ間兩眼ニ發顯シ往一族中是レ  
ニ罹ルヲアリ故ニ遺傳性アルカ如シ且ツ多クハ數年ヲ經ルニ從ヒ其  
脱位増加ス

〔治法〕水晶體ノ脱位僅少ニシテ視力ニ障害ヲ來サ、ルキハ適當ノ眼  
鏡ヲ與フルノミニシテ他ニ治法ヲ要セス又瞳孔散大シテ水晶體縁該

部ニ現出スルノ症ニ於テ水晶體ノ透明ナラサルキハ間層白內障ニ於  
ル如ク假瞳孔ヲ造爲シ以テ視力ヲ補助スヘシ但シ其假瞳孔部ニハ固  
ヨリ水晶體ノ欲知スルヲ以テ白內障摘出后ニ於ル如ク所置セサル可  
ラサル者トス 水晶體欲亡症ノ條ヲ參考スヘシ

〔二〕水晶體完全脱位症 (Luxatio lentis completa)

水晶體脱位ニ因テ虹彩其支礎ヲ失フル愈大ナレハ虹彩震盪及ヒ前房  
深淺ノ差モ亦愈著明ナリ而シテ水晶體縁直ニ瞳孔部ニ存スルキハ瞳  
孔ニ一曲線ヲ見ル是ニ集光照法ヲ施シテ檢スルキハ此曲線ハ灰白色  
ヲ呈シ檢眼鏡ヲ用テ透照スルトハ其黑色ナルヲ見ル

水晶體ノ存在セサル瞳孔部ハ暗色ヲナシ水晶體ヨリノ反射像欲亡ス、  
之ニ反シテ水晶體ノ存在セル瞳孔部ヲ集光照法ヲ以テ檢スルトハ其  
反射像ヲ著明ニ認視スヘシ

檢眼鏡檢査ハ瞳孔兩半部ノ光線屈折ノ差異アルヲ示ス間水晶體縁ノ

三稜鏡狀作用ニ因テ二箇ノ眼底像影ヲ現ハス下アリ  
 視器官能ヲ検査スルニ、每常調節機能ノ欲損ヲ呈ス、其他視覺ノ狀況、  
 水晶體欲亡セル瞳孔部ノ大小ニ關スル者ニシテ、水晶體緣若シ瞳孔小  
 ルニ來ルキハ、光線ヲ不正ニ屈折スルヲ以テ、大ニ視覺障害ヲ來シ、患者  
 ハ往々一眼複視ヲ訴フ、水晶體若シ甚ク瞳孔部ヨリ離居スルキハ、狭  
 孔眼鏡若クハ「エゼリン」ヲ用ルニ由リ水晶體欲亡セル瞳孔部ヨリシテ、  
 光線ヲ眼内ニ射入シ得ル者ナリ、而シテ斯ノ如キ症ニハ極メテ強度ノ  
 凸面眼鏡所謂白內障ヲ以テ大ニ視力ヲ回復シ得ルモノナリ  
 若シ水晶體其脫位前ニ於テ既ニ不透明ナルキハ、其監視容易ナリトス、  
 即チ瞳孔ノ一部ハ其渾濁ヲ失シ、眼球ハ白內障ノ爲メニ失明セル視力  
 ヲ卒然回復ス  
 先天ノ脫位症ニ於テハ、水晶體ハ透明ニ存スルヲ通常トスレモ、其大サ  
 尋常ノ者ニ比スレハ細少ニシテ、患者頭部ヲ前屈スル際、水晶體ハ瞳孔

ヨリ前房内ニ脱落スルノ間、之アリ、其他弱視及ヒ眼球震動症ヲ伴フモ  
 ノナリ

透明ナル水晶體ノ卒然脫位スルハ、大抵眼球損傷ノ結果ニシテ、水晶體  
 固定鞏帶ノ弛緩、若クハ其斷裂ニ因ル者ナリ、脫位セル水晶體ハ時トシ  
 テ久ク透明ヲ以テ存スルコトアレモ、多クハ脫位後暫時若クハ久時ヲ經  
 テ渾濁スルモノトス

〔イ〕水晶體前房ニ脫位スルキハ、其透明ニ存スルト、既ニ其白內障ニ  
 變スルトチ間ハスシテ、容易ニ之ヲ確知シ得ル者ナリ、但シ水晶體白內  
 障様ナルキハ、通例必ス縮小セル者トス、石灰變質ニ罹リテ又透明ニシテ其囊ヲ  
 被ル水晶體ハ、前房中ニ於テ恰モ大ナル眞珠様ノ看ヲ做シ、經久其透明  
 性ヲ失ハス、罕ニハ刺戟症狀ヲ發セス、存スル者ナリ、特ニ水晶體ノ一  
 部分瞳孔ニ竝存スルキハ、最モ恐懼ス可キ者トス、又往々脫位セル水晶  
 體ト角膜若クハ虹彩ト癒着シ、以テ危重ノ炎症、虹彩炎、虹彩毛様體ヲ將  
 炎、線內障ノ如キ

來スルコトアリ  
 水晶體脱位ノ際、其囊ノ斷裂スルキハ、水晶體ノ實質房水ニ觸浸シテ膨脹シ、以テ虹彩ヲ壓迫刺戟ス、而シテ其膨脹愈峻速ナレバ、刺戟モ亦愈劇甚ナリ  
 脱位セル水晶體若シ透明ニ存スルキハ、患者猶ホ眼ニ近接セル物體ヲ視得ルモ、水晶體ト網膜トノ距離増大ナルヲ以テ、強度ノ近視眼トナル者ナリ

〔治法〕水晶體前房ニ脱位シテ、未タ炎性症狀ヲ發セサルキハ、左法ニ依リ水晶體復位ヲ試ムヘシ、其法先ツ亞篤魯比涅ヲ點眼シテ瞳孔ヲ充分ニ散大セシメ、次テ患者ノ頭顛ヲ後方ニ傾轉シ、兩手ヲ以テ之ヲ輕ク前後ニ振動スヘシ、若シ此技ニ依テ水晶體虹彩ノ後方ニ滑落セルキハ、患者ヲシテ久時仰臥セシメ、エセリンヲ點滴シ、以テ再ヒ瞳孔ヲ収縮セシメ、且ツ注意シテ其収縮ヲ持長セシムヘシ

若シ既ニ炎症ヲ發生シ或ハ水晶囊ノ斷裂セルキニ於テ水晶體ノ復位ヲ試ムルハ、其當ヲ得サルモノトス、寧ロ亞篤魯比涅ノ溶液ヲ點滴シ、脱位セル水晶體ヲシテ虹彩上ニ其作用ヲカラシメ、且ツ水灌法ヲ施シテ水晶體ノ膨脹スルヲ緩慢ナラシムルニ如ガス、アルト而シテ今此法ヲ行フモ猶ホ未タ刺戟機ノ退去セサルキハ、線狀或ハ弓狀角膜創口ヲ造リテ水晶體ヲ摘出スルヲ適當ナリトス、就中其弓狀ナルハ一層佳良ナリトス

〔ロ〕水晶體若シ硝子體中ニ沈没スルキハ、全虹彩ハ眼球迴轉ノ際、震動ヲ呈シ、水晶囊反射像ハ全ク缺亡ス、又集光照法若シハ、檢眼鏡ヲ以テ檢スルニ、水晶體ハ硝子體中ニ於テ其特異ノ形狀、其縁ノ殊異ナル反射像及ヒ未タ斷裂セサル固定鞅帶ニ由テ門扉ノ蝶番ニ於ルガ如キ運動ヲ爲スヲ以テ、之ヲ確知シ得ヘシ  
 其ノ脱位ニ合併全ク水  
 斯ノ如キ眼球ハ唯視覺上ヨリシテ觀察スルニ、其ノ脱位ニ合併全ク水外傷ヲ除ク

品體ノ缺亡セル眼球ト同一ノ症候ヲ呈ス。水晶體缺亡症ノ條ヲ見ヨ。此水晶體囊中ニ存在セル實質ハ、久ク其透明性ヲ失ハサルコトアリ、又或ハ其硝子體中ニ現存スルモ、炎症性症狀ヲ發セサルコトアリ、或ハ危重ノ炎症若クハ單純線内障ヲ起スコトアリ。

〔治法〕此脱位症ニハ、臨時ニ各別ノ治法ヲ採擇セサル可ラス、但シ脱位セル水晶體別ニ障害ヲ爲サ、ルキハ、敢テ治療ヲ要セス、然レモ若シ刺戟症ヲ發スルキハ、先ツ周邊創口ヲ造リ、虹彩ヲ切除シテ后チ、匙子ヲ用テ摘出法ヲ試施スヘシ。

〔ハ〕鞏膜破裂シテ結膜下ニ水晶體ノ脱位スルハ、常ニ劇甚ナル損傷ノ結果ニシテ、特ニ鞏膜其弾力性ヲ消失セル高齢ノ者ニ之ヲ實驗セリ、但シ鞏膜ノ破裂スルハ、通例角膜上縁及ヒ内縁ニ於テ直筋附着部ノ前方ニ於テス。此脱位ヲ將來スル損傷ハ、通例劇甚ノ炎症性症狀ヲ誘發スル者ニ、即チ

眼瞼浮腫、結膜下及ヒ眼球内出血ヲ起ス、而シテ若シ眼球ヲ精密ニ検査シ得ルキハ、虹彩ノ損傷、其一部分鞏膜、其殘片ノ震盪、瞳孔ノ變形及ヒ水晶體反射像ノ缺亡ニ水晶體其囊ト共ニ發見スヘシ、又水晶體ノ斷裂アル者ハ、其殘片ヲ瞳孔部ニ發見ス、其他結膜下ニ於テ特異ナル水晶體形ノ小隆突ヲ目撃ス。

夫レ外傷ハ斯ノ如ク危険ナリト雖モ、亦屢治癒ニ赴クコトアリ、而シテ通常壓迫綑帶ヲ施スニ由リ出血滲漏等速ニ吸収スル者ナリ、又水晶體ヲ除去スルニハ、細小ノ截開ヲ以テ足レリトス。

〔二〕水晶體全ク眼球内ヨリ脱出スルハ、廣濶ナル鞏膜及ヒ角膜創傷ヲ兼ル劇甚ノ眼球挫傷ニ由リテ起ル者ニシテ、外傷斯ノ如ク重大ナリト雖モ、其治癒ニ赴クヲ實驗セシコトアリ、而シテ水晶體ノ缺亡ハ、上記ノ徵候、虹彩震盪、水晶體反射像ノニ據テ容易ニ確知スルヲ得可キ者ナリ、此外傷ニ罹ルノ後ハ、直ニ創口ヲ洗淨シ、脱出セル虹彩片ヲ切除シ、壓

追縋帶ヲ施スヘシ、若シ劇甚ナル炎症性症狀ヲ發スルキハ、顳顬部ニ水蛭ヲ貼シ、患者ヲ暗室ニ靜臥セシムヘシ、凡ソ預后ノ如何ヲ定ルニ當テ注意スヘキハ、卽チ重傷ヲ負フタル眼球ハ一時治癒スト雖、后屢萎縮スルコトアル是ナリ、蓋シ此萎縮ハ創口ニ虹彩、水晶囊殘片若シハ硝子體ノ癒合スルニ依テ發スル慢性炎或ハ網膜剝離ノ結果ナリ、又此ノ如キ外傷ハ屢交感性眼球炎ノ原因トナルコトアリ

### 第三章

#### 水晶體缺亡症 [Aphakia]

此症ハ光線水晶體ヲ通過スルコトナク、直ニ角膜ヲ經テ網膜ニ達スル眼球ノ狀況ヲ云フ者ニシテ、水晶體ノ缺亡スルハ手術ニ由リ、或ハ脫位症ニ因ル者ナリ

虹彩ハ水晶體上ニ靜置スルヲ得スシテ動搖シ、水晶囊反射像ハ缺如シ、且ツ眼球ノ光線屈折力ハ非常ニ減衰シテ、外方ヨリ射入スル光線ハ網膜ヨリ遙ニ后方ニ當リテ集合シ、強度ノ遠視症ヲ起シ、或ハ之ニ亂視症ヲ合併スルコト時ニ之アリ、而シテ之ヲ補正スルニハ強度ノ凸面眼鏡、或亂視症ニハ必要ニ其撰用法ハ、次圓柱眼鏡ニハ必要ニ詳ナリ、又水晶體ハ調節機ノ要具ナルヲ以テ、若シ其缺亡スルハ、遠近ヲ明視スルノ機能ヲ缺ク、且ツ縱令ヒ一ノ眼鏡ヲ與フルモ、一定ノ距離ニ於テノミ明視ヲ得ル者ニシテ、距離ノ遠近ニ從テ各種ノ眼鏡ヲ要ス、后章ニ詳ナリ



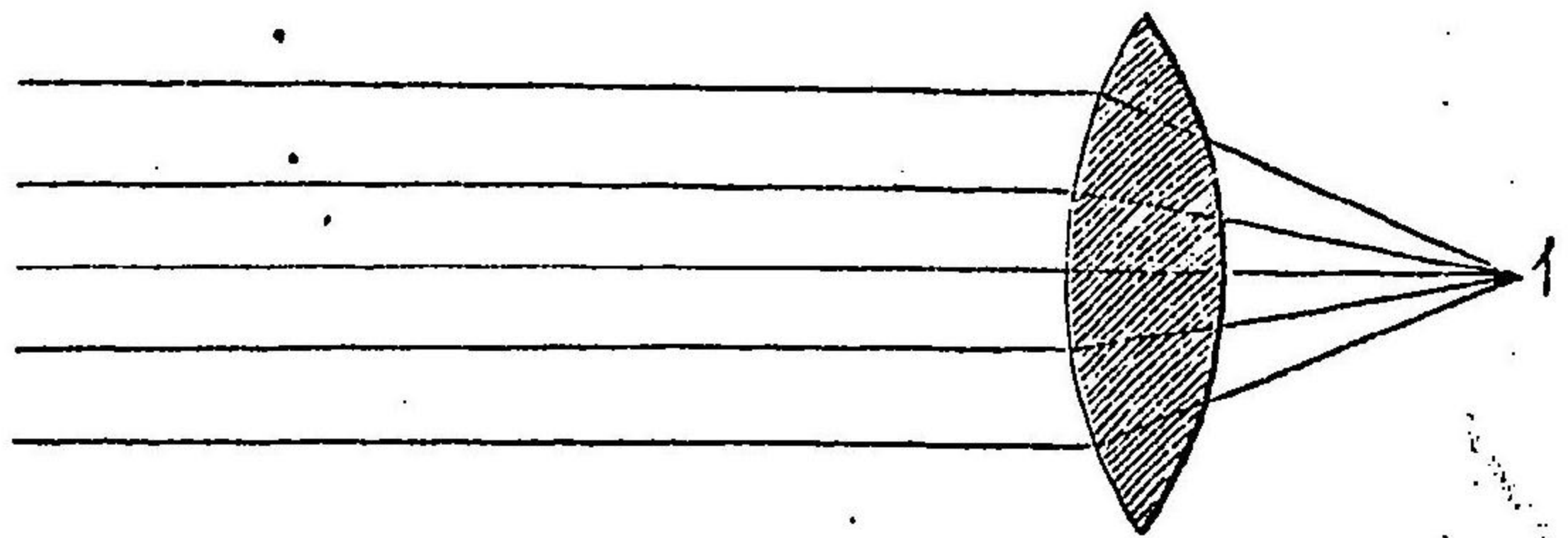
# 第十編

## 眼球光線屈折及ヒ調節機

凡ソ外方ヨリ眼球内ニ射入スル光線ハ諸般ノ光線屈折力ヲ有スル體即チ角膜、房水、水晶體及ヒ硝子體ヲ通過スル者ナリ、而シテ此諸體ハ其質空氣ニ比スレハ孰レモ濃密ナルカ故ニ光線ハ直行セスノ必ス其通路ヲ變スル者ナリ、今精細ナル經驗ニ據レハ此光線通路ノ變化ハ單一ナル凸面照子ノ作用ニ由リテ生セシムルヲ得ル者ナリ、故ニ其照子ニ由リテ生スル映像ノ法則ヲ愛ニ反復論述スレハ、即チ眼球ニ於テ光線屈折ノ法則ヲ得ヘシ

**抑光線ノ屈折** [Refraction] トハ一體ヨリ他體ニ光線ノ移行スル際、受ケル所ノ光線方向ノ變換ヲ云フ者ニシテ光線若シ稀薄ノ體ヨリ濃密ノ體ニ射入スルキハ其光線必ス射入點ヲ通シテ畫シ

第五十七圖



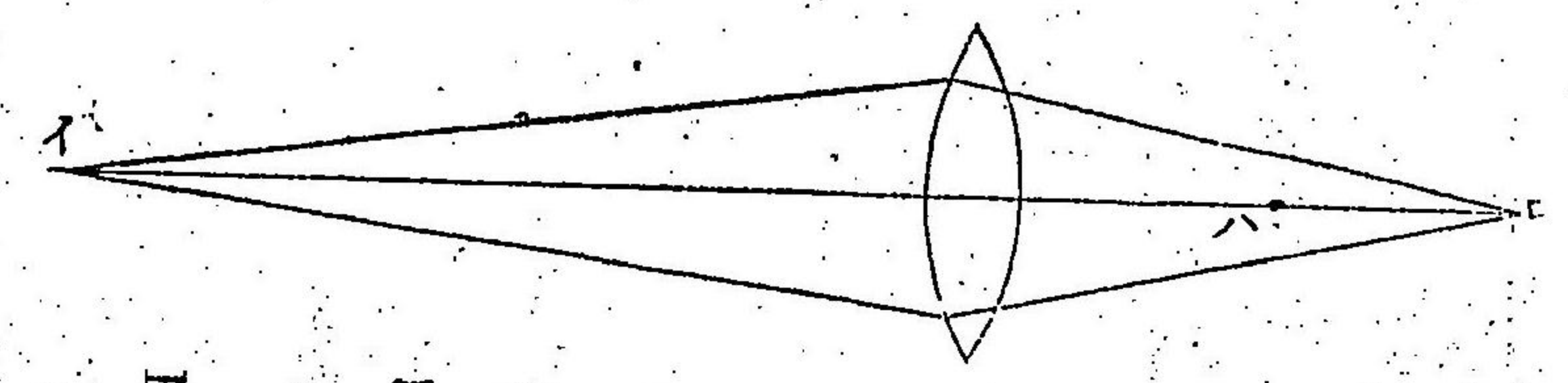
タル鉛直線ノ方ニ偏倚シテ屈折スル者ナリ、又濃體ヨリ稀體ニ光線ノ射來スルキハ之ニ反ス理學ニ

今互ニ相併行スル光線、凸面照子ヲ通過スルキハ、則チ先ツ屈折シテ后、一點第五十七圖ノ「イ」點ニ集合ス、此點ヲ名テ照子ノ主燒點 (Hauptbrennpunkt) ト云フ、此點ハ照子ノ彎曲中心點ト同所ニ在ル者ニシテ、例之ハ二十五センチメートルノ半徑ヲ以テ畫シタル球面ヲ有スル照子ニ在リテハ、其燒點ハ二十五センチメートルノ距離ニ在リトス、而シテ實際ニハ八乃至十二メートル以上ノ距離ヨリ射來スル光線ヲ以テ略併行ニシテ恰モ無限ノ遠隔ヨリ來ル者ト

假定フ  
 凡ソ發光點ノ照子ヲ離ル、コ愈近ケレハ、結像點ハ從テ照子ヲ遠  
 サカル者ナリ、而シテ此發光點彎曲中心點ニ來ルルハ、是ヨリ發スル  
 光線ハ、照子ヲ通過スルノ后互ニ相併行シテ集合セス、又是ヨリ尙  
 ホ進ンテ燒點ト照子トノ間ニ發光點ノ來ルルハ、光線ハ屈折ノ后  
 互ニ開散シ決シテ集合スルコトナシ、然レモ今試ニ此屈折セル光線  
 ヲ后方ニ延長スルルキハ、乃チ一點ニ集合ス、之ヲ名テ假像點(Virtuelle Bildpunkt)ト云フ

以上論スル如ク無限ノ遠隔ト照子ノ彎曲中心點ノ間ニアル發光  
 點ト、其結像點トハ每常互ニ一定ノ關係ヲ有シ、轉位スル者ニシテ、此  
 兩點ヲ總稱シテ對應一致點(Conjugierte Vereinigungspunkt)ト云フ、此  
 名稱ハ特リ發光點若クハ結像點ノミニ用ユ可キ者ニ非ラス、必  
 ス一點ノ對稱ヲ呼ブルノミニ用フ、例之ハ第五十八圖ニ於ル如ク、

第五十八圖

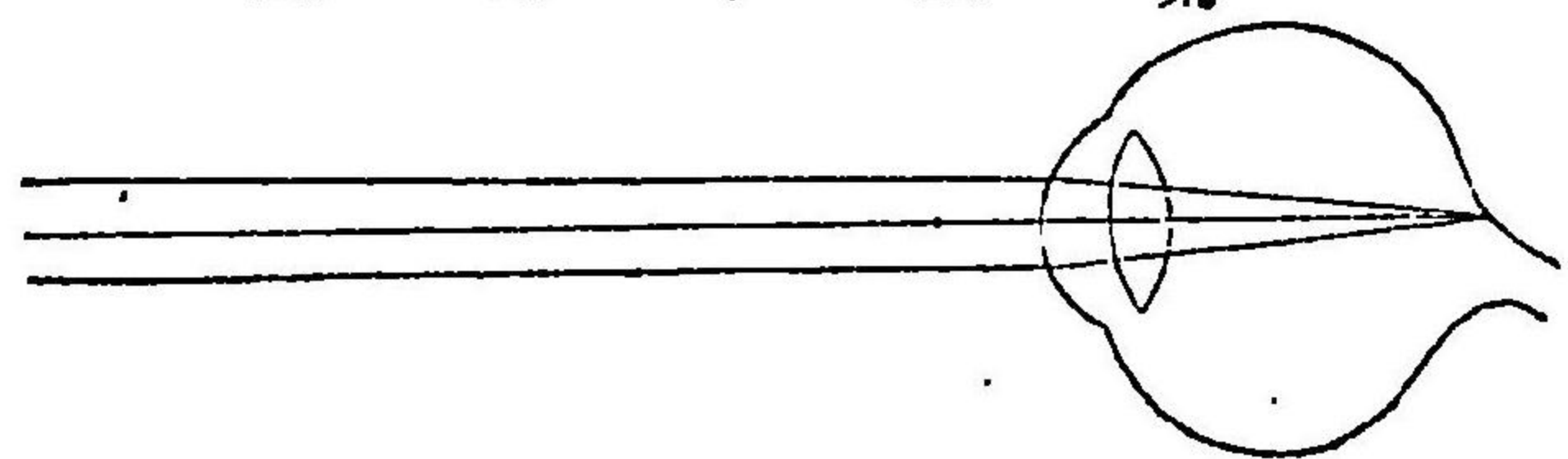


(イ)點ヲ發光點トシ、其ヨリ發射スル光線(ロ)點ニ於  
 テ結像スルルルハ、(イ)點ハ(ロ)點ノ對應點ナリト云ヒ  
 或ハ此結像點ノ對應點ハ即チ彼ノ發光點ナリト  
 云フカ如ク、而シテ照子ヨリ對應點ノ距離即チ對應  
 距ト、照子ヨリ其燒點ノ距離即チ燒距トニ對シテ  
 一定ノ法則アリ、今之ヲ數式トナシ左ニ示サン

$$\frac{1}{p} + \frac{1}{q} = \frac{1}{f}$$

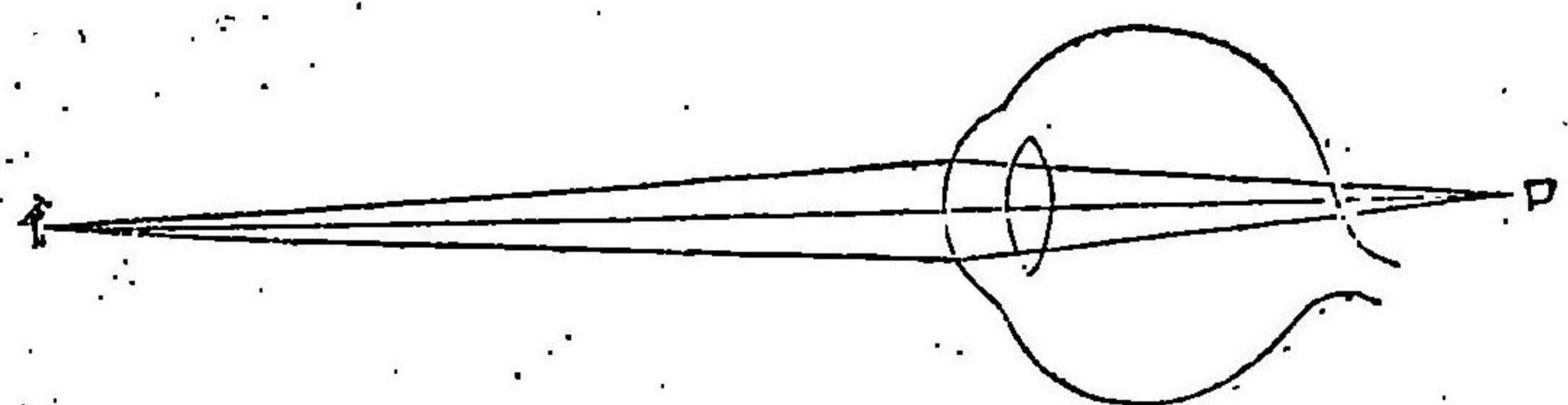
上式中(p)及(q)ハ對應距ヲ示シ、(f)ハ燒距ヲ指ス  
 者ナリ、今(p)點ヲ發光點トシ無限ノ遠隔ニ在リト  
 假定スルルルハ、(1/p)ハ無限ノ數ヲ以テ一ヲ除スル  
 カ故ニ零トナリ、以上ノ數式ハ變ジテ  $\frac{1}{q} = \frac{1}{f}$  即チ  
 q=fトナル、之ヲ詳論スレハ互ニ相併行セル光線  
 ニ在テハ其結像點、照子ヲ離ル、コ其照子ノ燒距

第五十九圖

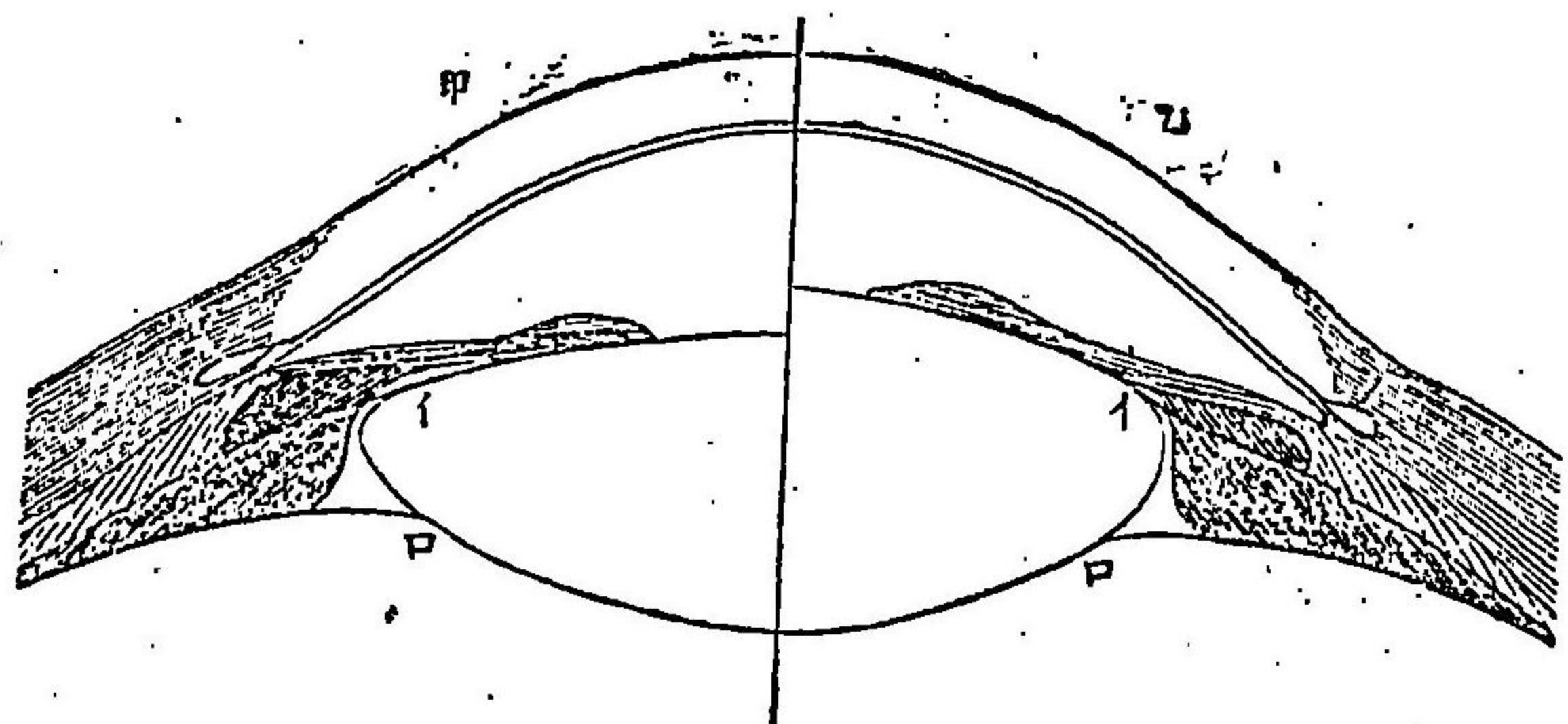


ニ等シ  
〔眼球内光線屈折〕健眼ハ無限ノ遠隔ヨリ射來スル光線即チ併行ノ光線ヲ網膜柱狀層上ニ集合セシムルノ光線屈折力チ有五十九圖之ヲ約言スレハ網膜ハ曲光の裝置ノ燒距ニ在リト云フ、凡テ外物ヲ明視セントスレハ、必ス結像點ヲ網膜ノ柱狀層ニ生セシムルヲ緊要トス  
外物若シ眼球ニ接近スルハ、之ヨリ發射スル光線ハ、對應距ノ法則ニ從テ、網膜ノ后方ニ於テ初テ

第六十圖



第六十一圖



集合セサルヲ得ス、第六十圖ニ之ヲ觀レハ、吾人ハ眼球ニ近接セル外物ヲ明視スル能ハサルカ如ク、然レモ吾人ハ通常遠近ノ物體ヲ能ク明視スルヲ以テ考フレハ、必ス眼球内ニ變狀ヲ起シ、以テ其光線屈折力ト眼球軸ノ長サヲ變セサルヲ得ス、是レ則チ眼球ニ調節機ヲ營ム所ナリ  
〔眼球調節機能〕〔Accommodation〕  
ルス、氏從來ノ實驗ニ據リ論シテ曰ク、ルソ吾人ノ遠隔點ヲ眺視スルニ當テヤ、眼球ハ全ク休憩スルノ狀態ヲ取リ、近部ヲ定視スルニ至リ初テ眼球内ニ變狀ヲ起

ス者ナリト、即チ水晶體ノ前面（イ）第六十八ハ強ク彎曲シテ角膜ノ方ニ進ミ、其后面（ロ）ハ只微ニ彎曲スルノミニシテ著シキ變位ヲ呈セス。凡ソ外物ヲ適視スル際、眼珠ノ器械的作用ニ就テハ諸般ノ理論アレド、就中最モ信用スヘキ說ニ據レハ、毛様筋収縮シテ虹彩ノ周邊部ト、脈絡膜トヲ互ニ相接近セシム。此際脈絡膜ハ前方ニ進ムカ故ニ、之ニ密着セル「ナン」氏小帶ハ弛緩シテ水晶體ヲ扁平ニ維持スルノ作用ヲ失フ、爰ヲ以テ水晶體ハ其弾力性ニ從ヒ、球形ヲ取ルヲチ是レ務ムト然レド此說ハ唯毛様筋ノ放線狀纖維ニ就テ論スルノミニシ、輪狀纖維ノ作用ハ未タ明亮ナラストス、又此纖維収縮スルキハ、水晶體ノ周邊ヲ壓迫スト云ノ說アリト雖モ、實驗ニ據ツテ水晶體ト毛様體トハ常ニ間隙ヲ存スルヲ以テ、之ヲ觀ルルキハ蓋シ其說信スルニ足サルカ如シ。

〔調節機能ノ度量〕既ニ論スル如ク遠隔ノ外物ヲ眺視スルニハ

眼珠内ニ變狀ヲ起サスノ、至ク解剖的構造ニ準スル光線屈折力ヲ用井、近部ヲ定視スルニ當テ初テ調節機能ヲ營ナム者ナリ、而シテ明視シ得ル最モ遠隔ノ點、即チ遠點（Punctum remotum）ト、最近接セル點、即チ近點（Punctum Proximum）トノ間ヲ調節領（Accommodationsgebiet）ト云ヒ、此間ニ營爲スルカヲ調節力（Accommodationsbreite）ト云フ。調節力ノ強弱ヲ定ルニハ一定ノ凸面照子ヲ用井、以テ調節機ヲシテ照子ノ作用ニ交換セシムヘシ、而シテ此照子ハ水晶體ヲシテ調節機休憩ノ状態ヲ取ラシムルモ、猶ホ近點ヲ明視セシムルノ作用ヲ營ナム者ナリ、例之ハ爰ニ正視眼アリテ其遠點ハ無限ノ遠隔及ヒ其近點ハ眼ヨリ十センチメートルノ距離ニ在リト假定スルキハ、其調節力ハ即チ十センチメートルノ燒距ヲ有スル凸面照子ノ作用ニ等シキ者トス、蓋シ此照子ハ十センチメートルノ點ヨリ發射スル光線ヲ屈折シテ、併行光線トナス者ニシ、若シ此照子ヲ裝ヒ眼

ニ併行光線ヲ受ルキハ、眼球ハ休憩ノ状態ヲ取ルモ、猶ホ能ク「 $\frac{1}{2}$ 」  
ンチメートルノ點ヲ明視スルヲ得ヘシ

總テ調節力ノ強弱ヲ示スニ左ノ數式ヲ以テス

$$\frac{1}{A} = \frac{1}{D} - \frac{1}{L}$$

此數式中、Aハ調節力、Dハ眼球ヨリ近點ノ距離、Lハ眼球ヨリ遠點  
ノ距離ヲ示ス、今正視眼ニ在リテ、眼ヨリ「 $\frac{1}{2}$ 」センチメートルノ所  
ニ近點アルキハ、調節力、即チ「A」ハ五曲光力、一「 $\frac{1}{2}$ 」メートルノ所  
ニ屈折力ニ「 $\frac{1}{2}$ 」五曲光力ハ「 $\frac{1}{2}$ 」メートルノ五分一、即チ  
「 $\frac{1}{2}$ 」センチメートルトル、 $\frac{1}{2}$ ノ燒點ヲ有スル者トストナル、何トナレハ  
上式ノ「 $\frac{1}{D}$ 」ニ數字ヲ置クキハ「 $\frac{1}{0.20}$ 」トナリ、而シテ「 $\frac{1}{0.20}$ 」  
無限ノ大ハ、即チ零トナルヲ以テ「 $\frac{1}{0.20}$ 」ヨリ零ヲ減スレハ「 $\frac{1}{0.20}$ 」  
得此數ハ、即チ五トナルヲ以テナリ、又近視眼ニ在リテ、遠點ヲ「 $\frac{1}{2}$ 」  
「センチメートル」及ヒ近點ヲ「 $\frac{1}{2}$ 」センチメートルニ在リトセハ、調  
節力「A」ハ「 $\frac{1}{0.20} - \frac{1}{0.50}$ 」即チ三曲光力トナル、遠視眼ニ於ルモ亦同式

ヲ裝用スト、雖モ其遠點ハ無限ノ遠隔ヲ越テ却テ眼球ノ后方ニ在  
ルヲ以テ、其調節力ハ「 $\frac{1}{1} - \frac{1}{1}$ 」ト「 $\frac{1}{1}$ 」トノ和ニ同シ

今實地ニ臨ンテ、明視ノ遠點ト近點トノ位置ヲ索搜セント欲セハ、  
一定大ノ試視力文字ヲ用テ、充全ノ成績ヲ得ル者トス、第一卷ノ三  
スヘ

一眼ヲ以テ營爲スル所ノ調節機能ヲ名テ眞ノ調節機能「Absolute  
Accommodation」ト云フ、是レ兩眼ノ調節機能「Binocular Accommo-  
dation」トハ、少シシ異ナル者ナリ、即チ兩眼明視ノ遠點ハ、通常一眼ノ

遠點ト其位置ヲ同スト、雖モ近點ハ則チ然ラス、特リ一眼ノミヲ使  
用スルキハ、此點眼球ヲ離ル、ト兩眼ヲ以テスルヨリ近シ、故ニ一  
眼即チ眞ノ調節力ハ、兩眼ノ調節力ヨリ強大ナリ、是レ兩眼瞻視ニ  
ハ、視軸ヲ輻輳セシムルノ作用アルニ由リテナリ、抑モ視軸ノ輻輳  
スルヤ必ス一定ノ制限アリ、而シテ調節機能ハ、通常視軸ノ輻輳ト共

ニ作用スルヲ以テ甲ハ乙ノ爲メニ制限セラル、之ニ反シテ一眼ノミヲ用ルルハ、視軸ヲ輻輳セシムルノ作用ハ全ク缺如スルカ故ニ、調節機能ヲ營ナムヲ從テ強シ、然リト雖モ眼球視軸ノ輻輳運動ト調節機能トハ常ニ相關係スル者ニ非ス、今爰ニ一ニ例ヲ舉テ之ヲ證セン、即チ兩眼ヲ以テ三メートルノ距離ニ在ル物體ヲ固視シ弱度ノ三稜眼鏡ヲ取リ其基底ヲ外方ニ向テ一眼前ニ裝ヒ、物體ノ映像ヲ網膜黃斑ノ正中窩ヨリ外方ニ映セシムルキハ、則チ初メニ物體ヲ複視スヘシ、續テ此複視ヲ避ケンカ爲メ、眼鏡ヲ裝用セル眼球ハ視軸ヲ輻輳シテ其后極部黃斑ヲ外方ニ轉スヘシ、而シテ斯ノ如ク輻輳運動ヲ起スト雖モ猶ホ兩眼ヲ以テ物體ヲ明視シ得ル者ナリ故ニ若シ輻輳運動ト調節機能トハ每常必ス相關涉スル者ナリトセハ、上例ノ顯象ヲ起ストナキ者トス、又兩眼ヲ以テ近接ノ物體ヲ固視スル際、一眼ニ弱度ノ凸面眼鏡ヲ裝フルハ、此眼ノ視軸ハ其

方向ヲ變セサレモ其調節機能ハ全ク休止スル者ナリ、夫レ斯ノ如ク調節機能ト視軸ノ輻輳運動トハ不定ノ關係ヲ爲スト雖モ、今一定ノ視軸輻輳ニ於テ其調節力ヲ確定シ、以テイワユル關係調節力Relative Accommodationナル者ヲ計算シ得ヘシ、關係調節力ヲ積極性及ヒ消極性ノ二部ニ區別スルハ實地上頗ル緊要ナリトス、甲ハ一定ノ視軸輻輳ニ於テ猶ホ調節シ得ル能力ヲ云ヒ、乙ハ既ニ使役セル調節力ヲ云フ、今消極性調節力ヲ實地ニ測定センニハ患者ニ兩眼ヲ以テ一點ヲ固視セシメ、一眼ニ各種ノ凸面眼鏡ヲ更換シ、裝ヒ、以テ其點ヲ明視スル最強ノ凸面眼鏡ヲ擇ヒ、其屈折力ヲ以テ消極部ヲ示スヘシ、又積極部ヲ檢スルニハ強度ノ凹面眼鏡ヲ以テスヘシ

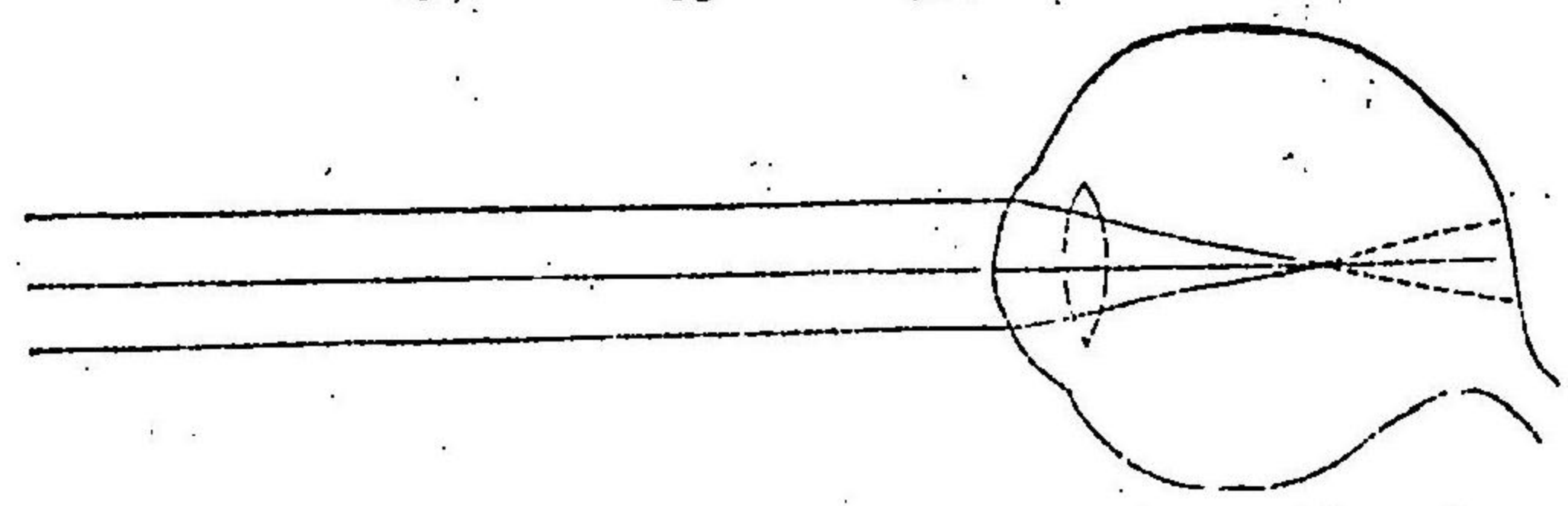
# ○光線屈折力及調節機能變常

## 第一章

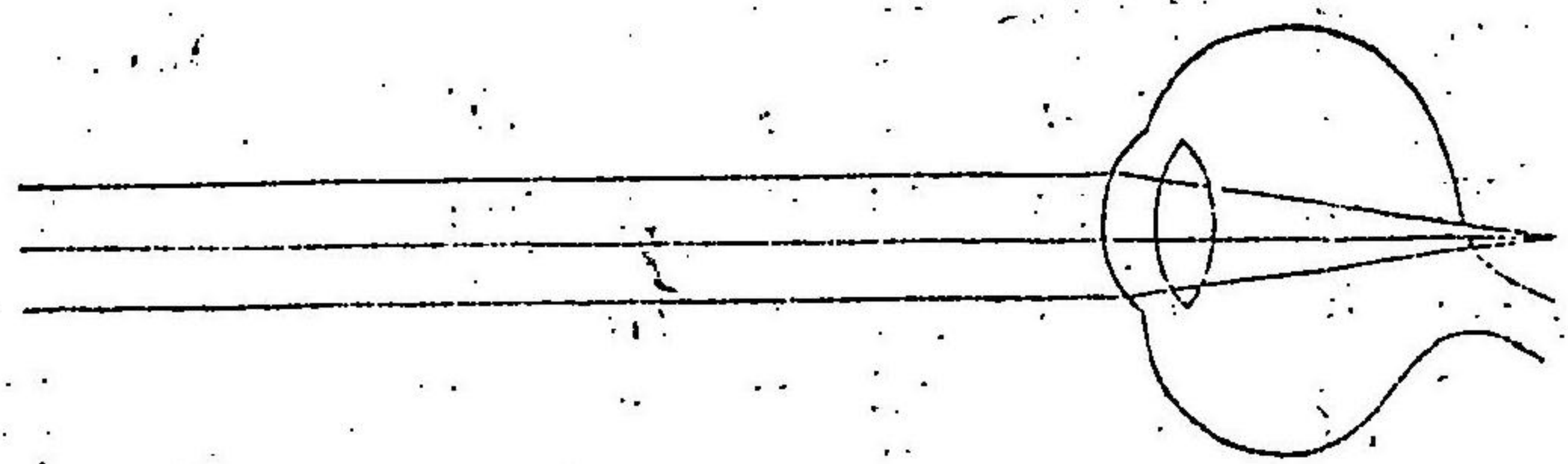
### 總論

既ニ論スル如ク、眼球ノ光線屈折力トハ其解剖的構造ニ準スル屈折力  
 シ云ヒ、調節機能トハ毛様筋ノ收縮ニ由テ、眼球ヲシテ視學的ニ應ヤシ  
 ムルノ機能ヲ云フ  
 夫レ健全ノ眼球ハ毛様筋ヲ全ク休止セシメ、唯眼球ノ光線屈折力ニ由  
 テ併行ノ光線即チ無限ノ遠隔ヨリ射來スル光線ヲ網膜上ニ集合セシ  
 ムル者ニトシ、トシテ「正視眼」(Emmetropia)【又  
 健視眼或ハ平視眼ナル名稱ヲ附セリ  
 眼球ノ光線屈折變狀ニ二種アリ、即チ(一)併行ノ光線ヲ網膜ヨリ遙ニ前  
 方ニ於テ集合セシムル者(二)併行ノ光線ヲ網膜ノ后方ニ集束セシムル

第六十二圖 近視眼

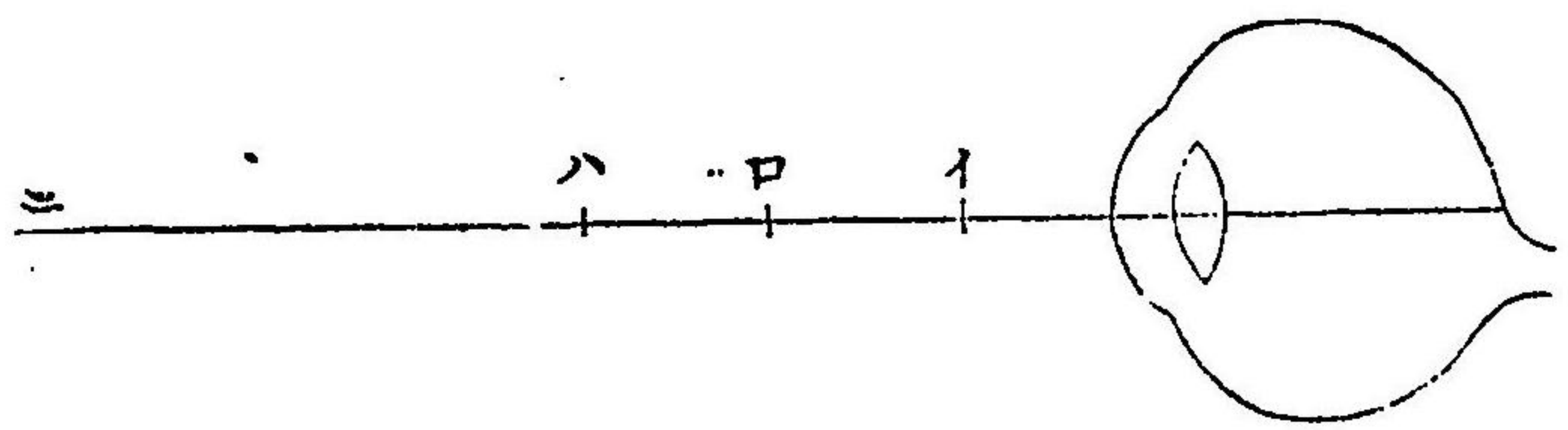


第六十三圖 遠視眼



者ニナリ、即チハ屈折力ノ強ナル  
 ルカ、或ハ眼軸ノ長大ナルニ  
 因ル者ニシテ、コレヲ「近視眼」  
 (Myopia) 第六十二圖ヲ見ヨト稱シ、乙ハ  
 屈折力ノ弱ナルカ、或ハ眼軸  
 ノ短小ナルニ由ル者ニシテ、之  
 ヲ名テ「遠視眼」(Hypermetropia) 第六十三  
 圖ヲ見ヨト云フ  
 調節機能ハ既ニ論スル如ク、  
 毛様筋ノ作用ニ由ル者ナリ、  
 而シテ老年ニ至ルニ從テ筋力  
 ハ漸減衰シ兼テ水晶體ハ硬  
 固トナリ、容易ニ其穹窿ヲ變

圖 四 十 六 第



セサルカ故ニ明視ノ近點イハ漸ニ眼珠ヨリ隔離シテ  
 十四圖以テ老視眼 [Presbyopia] トナル是レ老衰ノ  
 常態ニシテ敢テ調節機ノ變常ニ算入ス可キモノニア  
 ラス  
 眞正ノ調節機變常ハ此機能ヲ營ナム所ノ水晶  
 體若クハ毛様筋ニ其居ヲ占ル者ナリ即チ水晶體ハ  
 榮養不長ノ爲メニ其彈力ヲ失スルカ或ハ白內障手  
 術后ニ於ル如ク水晶體ノ全ク缺亡スルニ由テ調節  
 機ノ變常ヲ來ス  
 又調節筋毛様筋ハ一經久持長セル疾患若クハ調節  
 機ヲ使用セサルニ由リテ衰弱シ(二)神經中樞部ノ疾  
 病若クハ亞篤魯比涅ヲ用ルニ由リテ麻痺シ(三)癱瘓  
 狀ニ收縮ス是レ近視眼及ヒ遠視眼ニ於テ罕ニ目擊

スル所ノ者ナリ 其詳論ハ后章ニ讓ル

屈折力及ヒ調節機ノ變常ヲ診定スルニ二法アリ即チ(一)凸面及ヒ凹面  
 眼鏡ヲ用テ檢スルノ法(二)檢眼鏡用檢査法是ナリ

今患者六メートルノ距離ニ於テ「メチルレン」氏試視力表ノ第六号ヲ視  
 別シ能ハサルキハ是レ必ス光線屈折力ノ變常若クハ視力ノ減退ニ因  
 ル者ニシテ此兩症ヲ鑑別スルニ凹面或ハ凸面眼鏡ヲ用フヘシ若ク凸面  
 眼鏡ヲ裝フテ視力善良トナルキハ之ヲ遠視眼トシ其凹面眼鏡ヲ要ス  
 ル者ハ近視眼トス

屈折變常ヲ診定スルニ數箇ノ凸面及ヒ凸面眼鏡ヲ要ス其番号ハ  
 曲光力(Dioptrie)ナル名稱ヲ以テ眼鏡ノ光線屈折力ヲ示シ且ツ(十)  
 標ハ凸面眼鏡ニシテ(一)標ハ凹面眼鏡ヲ示ス者ナリ抑セ一曲光力  
 トハ二メートルノ燒距ノ眼鏡ト其燒點トチ有スル眼鏡ノ光線屈折  
 力ヲ示ス者ニシテ之ヲ屈折力ノ一位ト定メ以テ眼鏡ノ屈折力ヲ



計算ス例之ハ二曲光力トハ二倍ノ屈折力ニシテ即チ五十センチメートルノ燒距ヲ有スル眼鏡ヲ示シ、三曲光力ハ三倍ノ屈折力ニシテ三十三センチメートルノ燒距ノ眼鏡ヲ指シ、二十曲光力ハ二十位ノ眼鏡ニシテ五センチメートルノ燒距ヲ有シ、〇二五曲光力ハ一位ヲ四分セル屈折力ニシテ四メートルノ燒距ヲ有スル眼鏡ヲ示スカコトシ

從來眼鏡ノ番号ヲ示スニツオル尺度二ツオルハ我八分許ヲ使用シ、即チ一

ツオルノ燒距ヲ有スル眼鏡チ一番トシニツオル燒距ノ眼鏡チ二番トシ、十ツオル燒距ノ眼鏡チ十番トスルカ如ク計算セリト雖モ、其ツオル尺タル各國ニ於テ各其長短チ異ニシ、英國ニ於テ十番ト稱スル眼鏡ハ獨乙國ノ十番ニ符合セザルカ如キノ差ヲ生スルノミナラス、又ツオル系統チ用ルルキハ實地ニ臨ンテ適當ノ眼鏡ヲ算擇スルニ當リ、其計算法極メテ繁雜ナル者ナリ、今前條所論ノ曲光

力ヲ以テ眼鏡ノ番号ヲ示スハ斯ノ如キ困難チ來スヲナシ故ニ輒今專ラ之ヲ稱用スルニ至レリ、卷末ニ新式曲光力ノ番号ト舊式「ツオル」ノ番号トノ比較表ヲ舉ク宜ク參考スベシ

光線屈折變常ノ強弱度ヲ定ムルニモ亦眼鏡ヲ用フヘシ、其用法ハ先ツ弱度ノ眼鏡ヨリ始メ、漸強度ノ者ニ移リ、視力ヲ最良ナラシムル眼鏡即チ「スチルレシ」氏表第六号ヲ六「メートル」ノ距離ニ明視セシムルヲ以テ屈折變常ノ度ヲ示ス者トス、之ヲ詳言スレハ併行ノ光線ヲ網膜上ニ集合セシムル爲メニ用ル眼鏡ノ屈折力ヲ以テ眼球屈折變狀ノ度ヲ示ス者ナリ、例之ハ屈折變常ヲ補正スルニ十二曲光力ノ凸面眼鏡ヲ要スルキハ、之ヲ十二曲光力ノ遠視眼トシ、二十曲光力ノ凹面眼鏡ヲ要スルキハ、二十曲光力ノ近視眼トスルカコトシ

第二ノ診斷法ハ檢眼鏡ヲ以テ患者眼底ノ眞像ヲ檢査スルノ法是ナリ、此法ハ最良ノ診斷法ニシテ、特ニ小兒及ヒ作病者ニハ缺ク可カラサル

方法ナレ用、亦之ヲ實行スルニハ充分習熟サセル可ラス、而シテ其法式ハ  
第一卷丁十八ニ譲リ爰ニ畧ス、又實用ニ供スルニ屈折檢眼鏡ナル器  
械アリ、是レ普通ノ檢眼鏡ニシテ屈折變常ヲ確診スル爲メ數箇ノ凸面  
及ヒ凹面照子ヲ副用セシ者ナリ

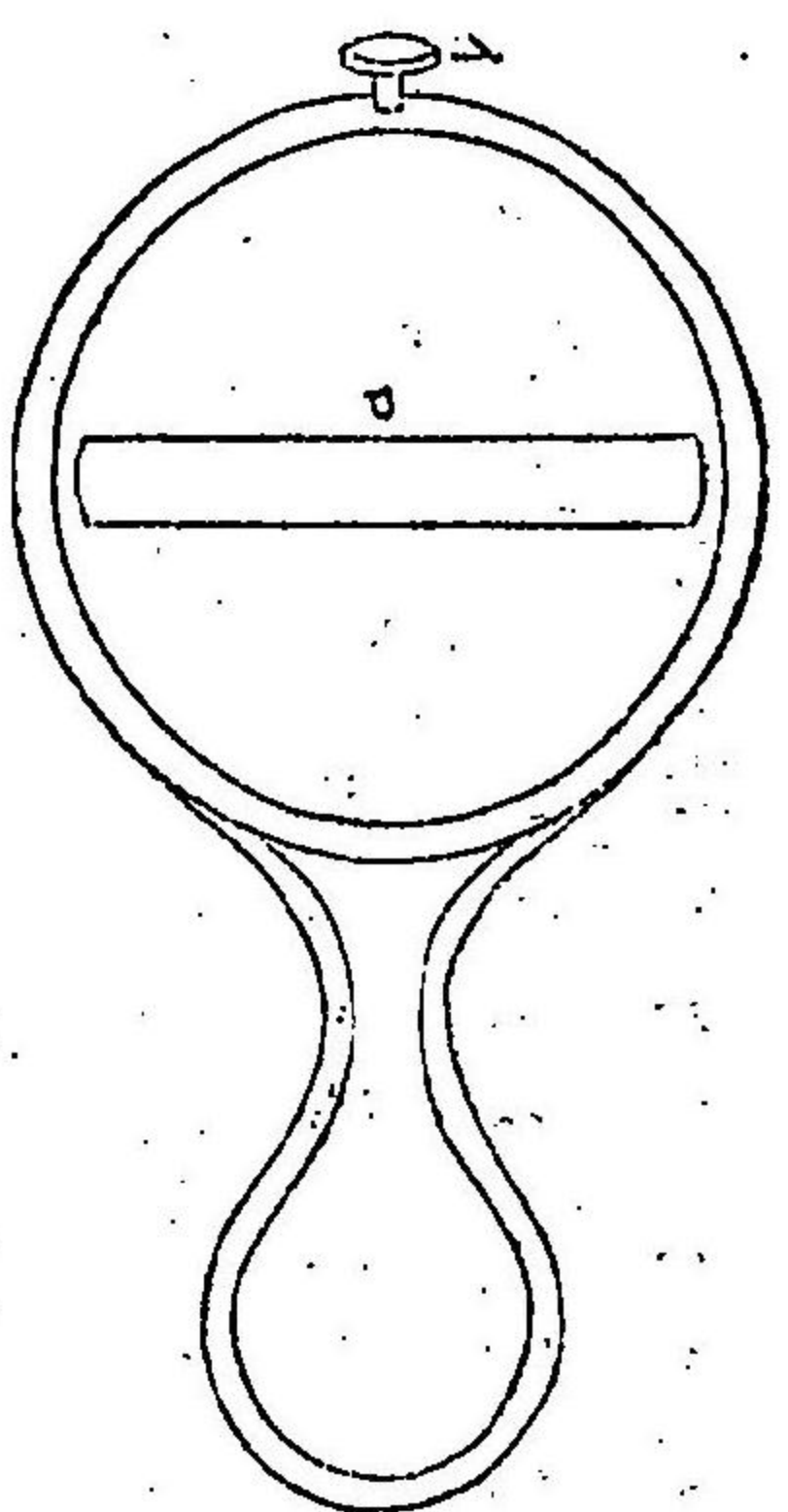
### 第二章

#### 眼鏡ノ種類

眼鏡ヲ分類シテ左ノ數種トス

〔一〕眼中ニ異物竄入若クハ強劇ナル光線ノ射入ヲ防グ爲メ製造セル眼  
鏡ヲ防護眼鏡〔Schutzbrille〕ト云フ、此眼鏡ハ併行ノ兩面ヲ有スル硝子  
ヲ以テ造成スルガ故ニ、光線ヲ屈折スルコトナク只單ニ透過セシムルノ  
作用アルノミ、通常青色若クハ暗色ノ硝子ヲ用ヒ、以テ鮮明劇烈ノ光線  
ヲシテ陰暗ナラシム、又硝子ノ周圍ヨリ射來スル光線ヲ防禦スル爲メ、

圖五十六第

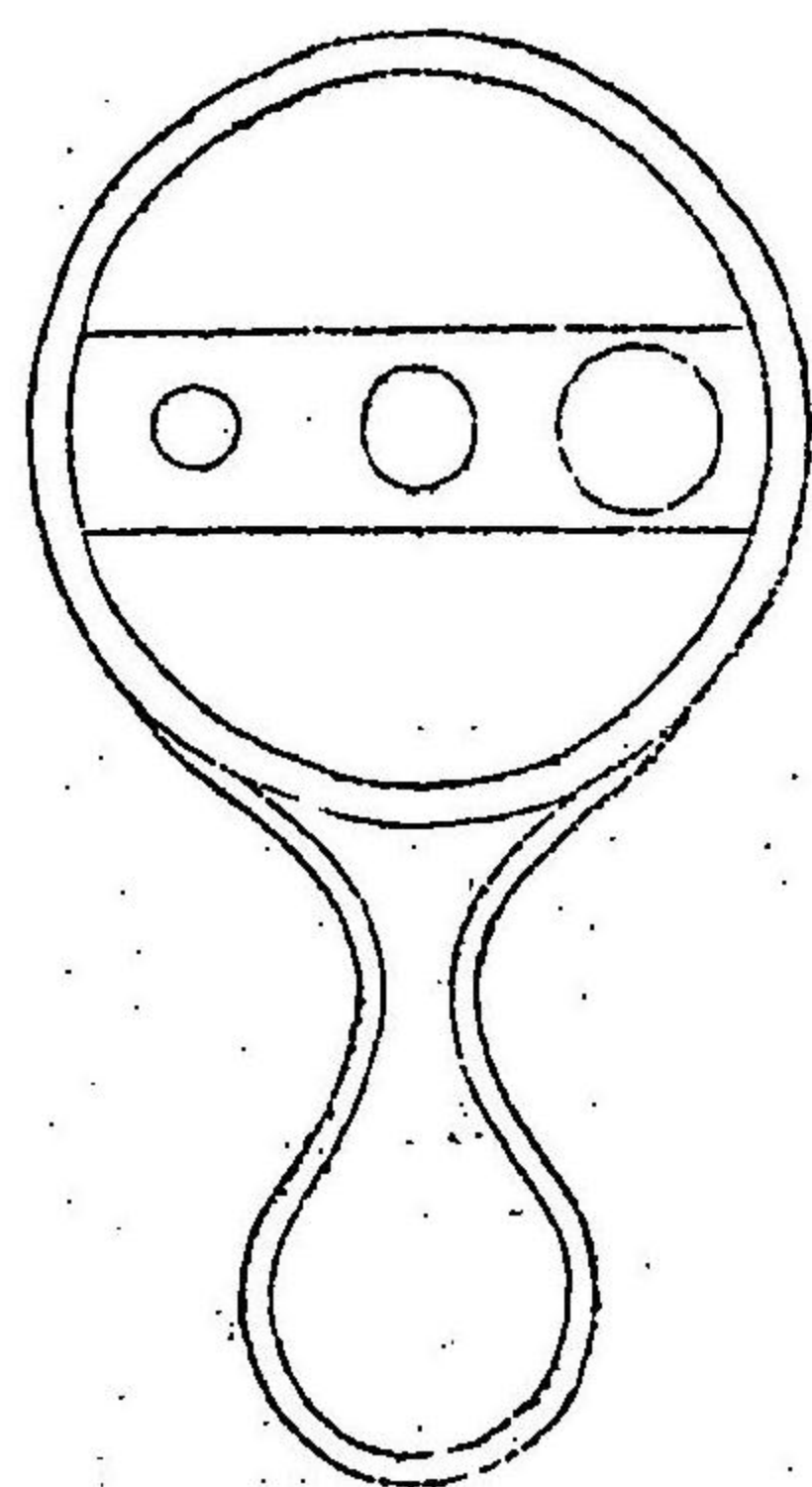


之ヲ貝殼形トシ或ハ硝子ノ周  
圍ニ覆眼布ヲ附ス、此眼鏡ハ唯  
白晝若シハ強劇ノ燈前ニ於テ  
ノミ使用スヘシ

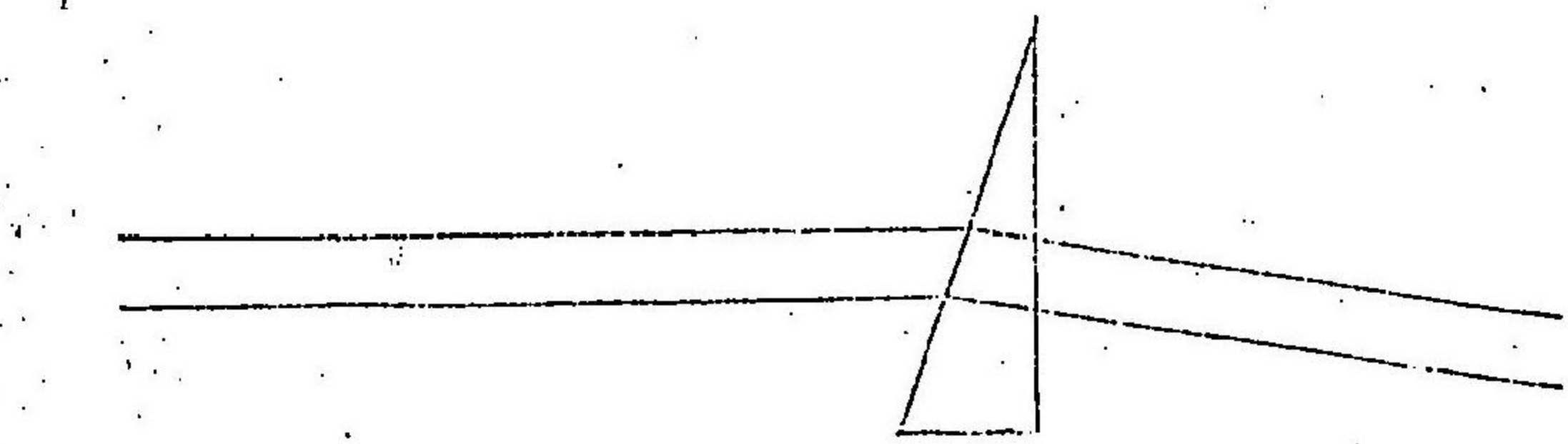
〔二〕狹孔眼鏡〔Stenopäische Brille〕

一名裂孔眼鏡ハ各種ノ形狀ヲ具ス、而  
シテ通常亂視症ヲ診定シ、或ハ停  
止性角膜白斑ニ於テ視力ヲ善  
良ナラシムルニ使用スル眼鏡  
第一卷二百六丁ハ金屬製ノ圓  
板ニシテ一ノ把柄ヲ有ス、此圓  
板ハ或ハ第六十五圖ニ示ス如  
ク一ノ裂孔ヲ具ヘシ得ヘキ

圖六十六第

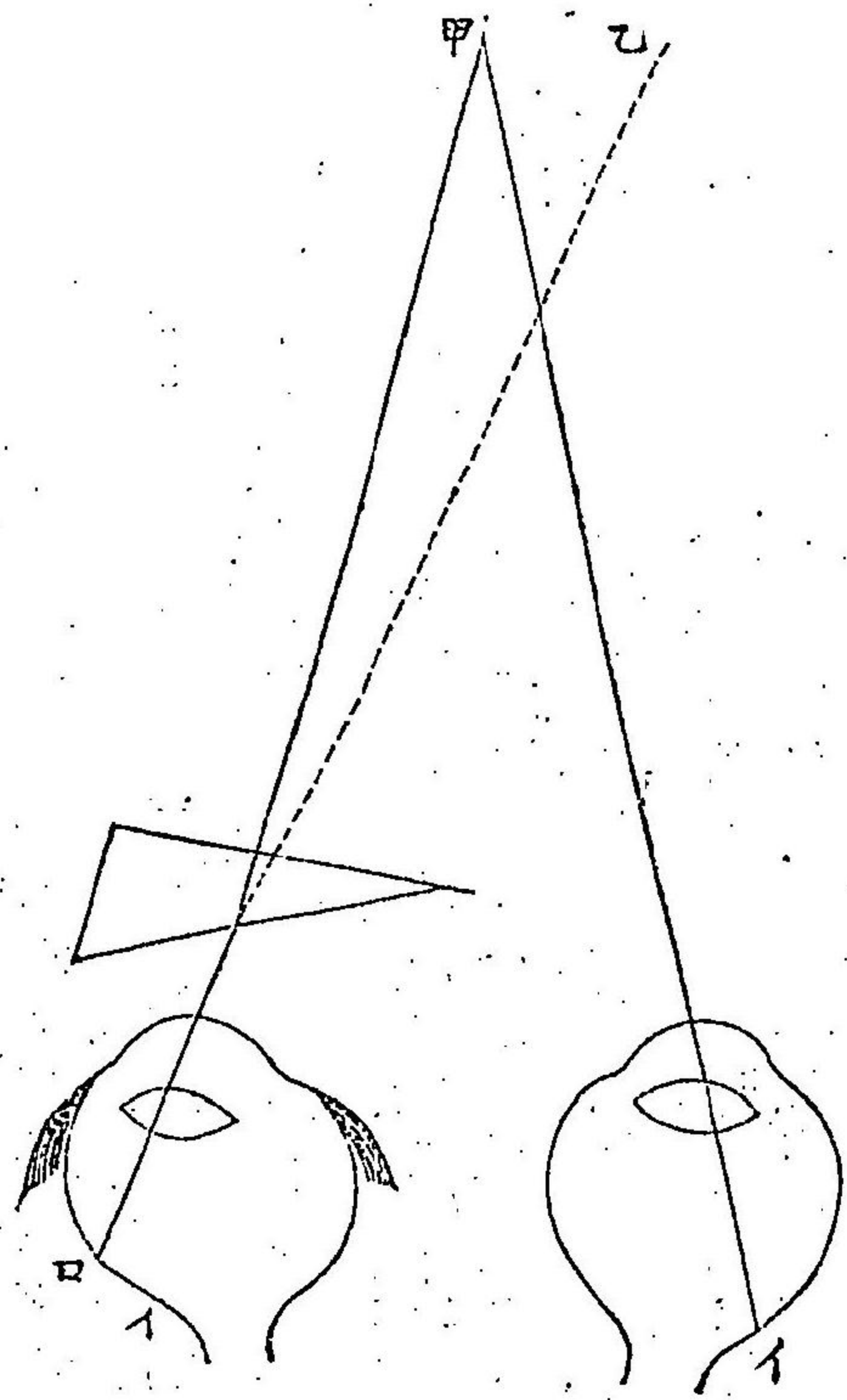


第六十七圖



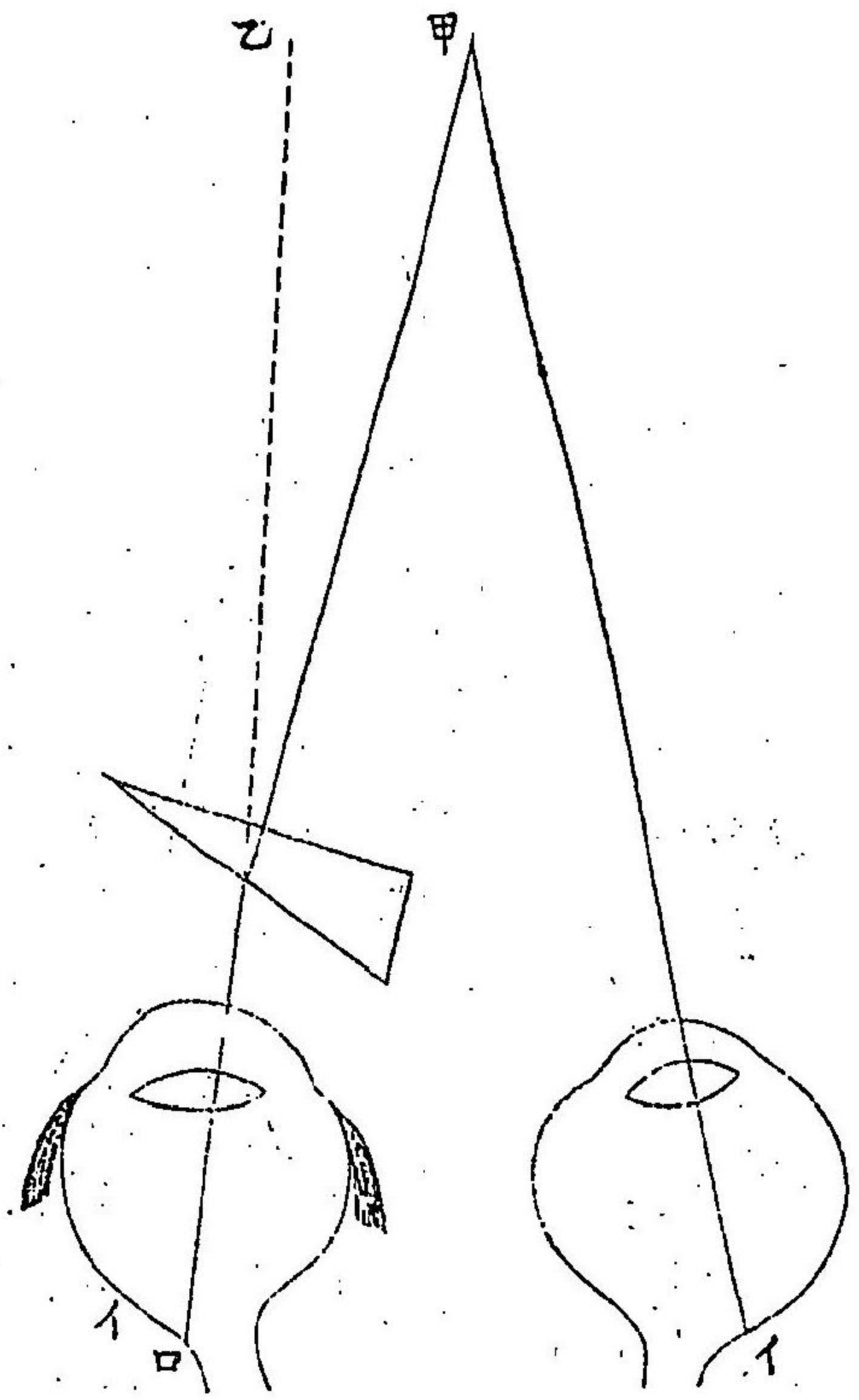
且ツ隨意ニ廻轉スヘキアリ、或ハ第六十六圖ノ如ク  
 各大ノ圓孔ヲ存スルアリ  
 〔三〕三稜眼鏡〔Prisma〕ハ之ヲ透過スル光線ヲ其基  
 底部ニ屈折ス 第六十七圖ノ如ク今兩眼ヲ以テ物體ヲ固視ス  
 ル際、一眼例之左眼ニ三稜眼鏡ヲ裝フキハ物體ノ像  
 ハ黃斑ニ映寫スルヲ能ハス、眼鏡ノ基礎部ヲ外方  
 或ハ内方ニ置クニ從テ黃斑ヨリ外方或ハ内方ニ映  
 スル者ナリ、而シテ左眼ノ網膜顛顛半部ニ映スル物像  
 ハ物體右方ニ存スルヲ示ス、鼻側半部ノ映像ハ左方  
 ニ在ル物體ヲ指ス、由テ此眼鏡ヲ用フレハ物體ヲ  
 複視スヘシ、今第六十八圖ニ示ス如ク兩眼ヲ以テ〔甲〕  
 點ヲ着視スル際、三稜鏡ノ基礎ヲ外方ニ向ケテ之ヲ  
 左眼ニ裝フキハ〔甲〕ヨリ來ル光線ハ左眼ニ射入スル

第六十八圖



前屈折シテ黃斑〔イ〕ヨリ外方〔ロ〕ニ射落ス、故ニ左眼ハ物體〔甲〕ヲ〔乙〕點ニ存  
 スル如ク認視シ、右眼ハ之ヲ眞ノ位置〔甲〕ニ看認ス、即チ之ヲ約言スレハ  
 右側ニ在ル物像ヲ左眼ヲ以テ視、左側ニ在ル物體ヲ右側ヲ以テ認ムト  
 云、斯ノ如キ  
 複視ヲ名テ  
 又狀複視  
 Anisometropia  
 (Cekrenizile  
 +メサ  
 Diphopie)ト  
 云フ、又第六  
 十九圖ニ於  
 ル如ク三稜  
 鏡ノ基礎ヲ  
 内方ニ置ク

圖九十六第

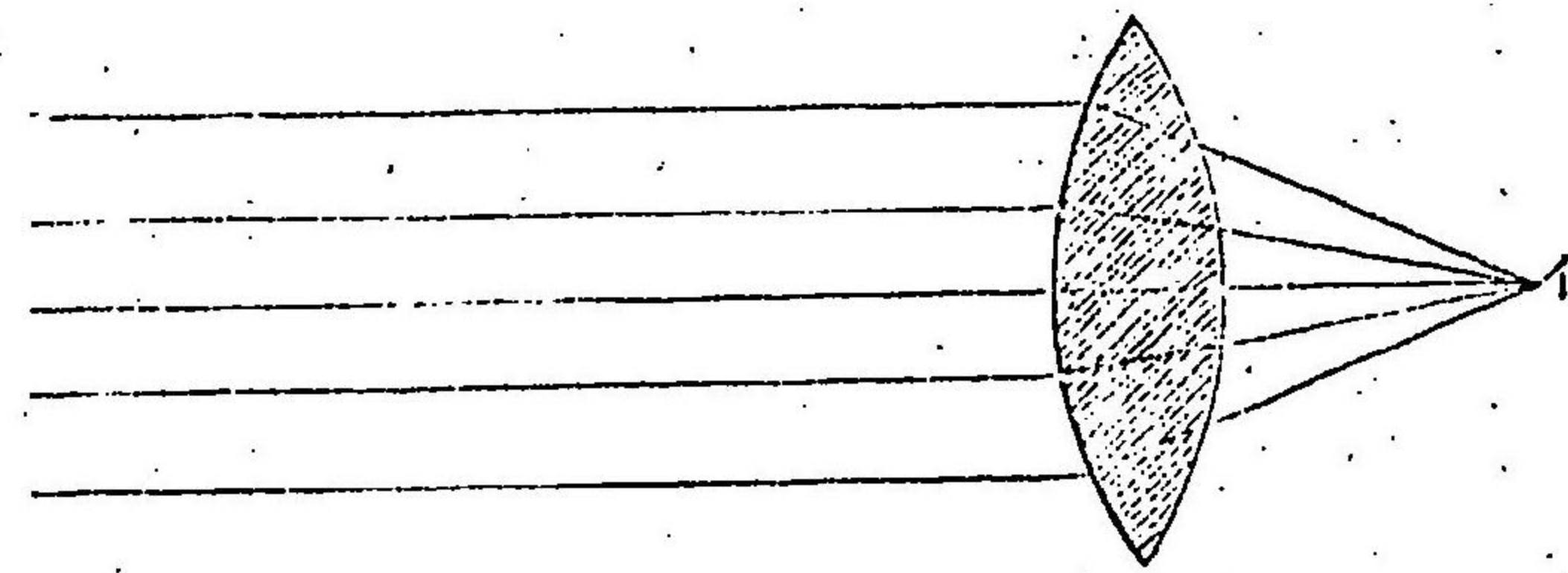


於ハ、左眼ニ  
 於テハ物像  
 [ロ]點ニ映ス  
 ルヲ以テ恰  
 モ[乙]點ヨリ  
 光線ノ射來  
 スル如ク看  
 認ス、即チ左  
 側ニ視得ル  
 物像[乙]ハ、左

眼ニ属シ右側ノ物像[甲]ハ、右眼ニテ視得ルナリ、此複視ヲ名ケテ**同盟複鏡** (Gleichnamige Diplopie) ト云フ、若シ三稜鏡ノ基礎ヲ上方或ハ下方ニ轉スレハ複像ハ從テ上下ニ位スル者ナリ

日常ノ實驗ニ由リテ之ヲ觀ルニ、基礎ヲ外方ニ向テ裝フタル中等強ノ三稜鏡ニ由リテ生スル複像ハ、暫時持續スルノ后漸ク近接シ終ニ一像トナル、而シテ此際眼鏡ヲ裝フタル眼球ヲ檢スルニ、眼球ハ稍、内方ニ轉斜スル者ナリ、凡テ物體ヲ單視セシニハ、物像ヲ兩眼ノ網膜正中窩若クハ網膜ノ一致點ニ映寫ヒシメサル可ラス、故ニ上例ノ眼鏡ヲ裝フタル眼ニ在リテハ、物像ハ黃斑ヨリ外方ニ映スルヲ以テ、之ヲ黃斑ニ映セシメメンニハ、眼球ノ后極ヲ外方又前極ヲ内方ニ轉セサル可ラス、而シテ此運動ハ内直筋ノ特別ニ収縮スルニ由テ發スル者ナリ  
 又三稜鏡ノ基礎ヲ内方ニ向ケテ眼前ニ裝フキハ、外直筋モ亦、内直筋ト同一ノ顯像ヲ起ス、只其異ナル所ハ内直筋ノ作用スルヤ、三十度ノ三稜鏡ヲ用ユルモ能ク複像ヲ避ルトヲ得ルト雖モ、外直筋ノ作用ニ在リテハ、否ラス、只僅ニ八度ノ三稜鏡ニ勝ツノミ、又二度乃至三度ノ三稜鏡ヲ用テ其基礎ヲ上方或ハ下方ニ向ケ眼前ニ置クキハ、上下ニ位スル複

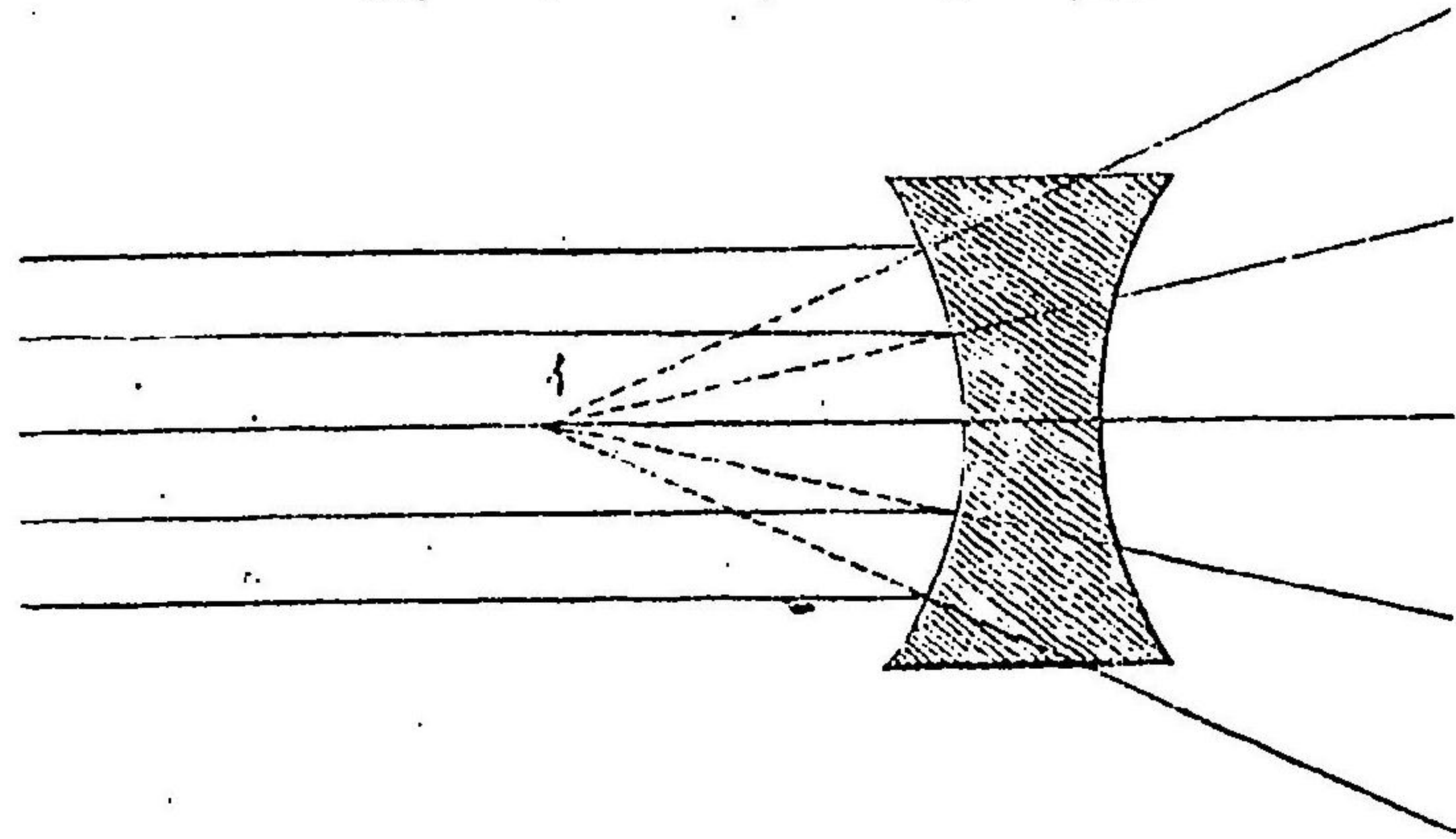
第七十圖



像ヲ遊ルコ能ハサル者トス

〔西〕凸面及凹面眼鏡 [Convex-Concave] 凸面  
照子ハ併行ノ光線ヲ集束シテ眞ノ例像ヲ結フ  
ノ作用ヲ營ナム但シ此結像點ハ照子ノ主軸ニ  
於テハ其視學的中心點ヲ遠サカルコ其彎曲半  
徑線ニ等シキ所ニ在リ之ヲ照子ノ主燒點  
〔Hauptbrennpunkt〕ト云フ第七十圖之ニ反シテ此主  
燒點ヨリ發射スル光線ハ屈折ノ后互ニ併行ト  
ナル者ナリ  
若シ併行ノ光線凹面照子ヲ通過スルキハ屈折  
シテ開散スル者ナリ而シテ今試ニ此開散光線ヲ  
后方射來スル方ニ延長スレハ即チ主燒點第七  
十圖ノニ集合ス此點ハ假燒點ニシテ映像モ亦直立

第七十一圖



ノ假像ナリ之ニ反シテ假燒點ニ向テ輻輳  
シ來ル光線ハ屈折シテ併行トナル

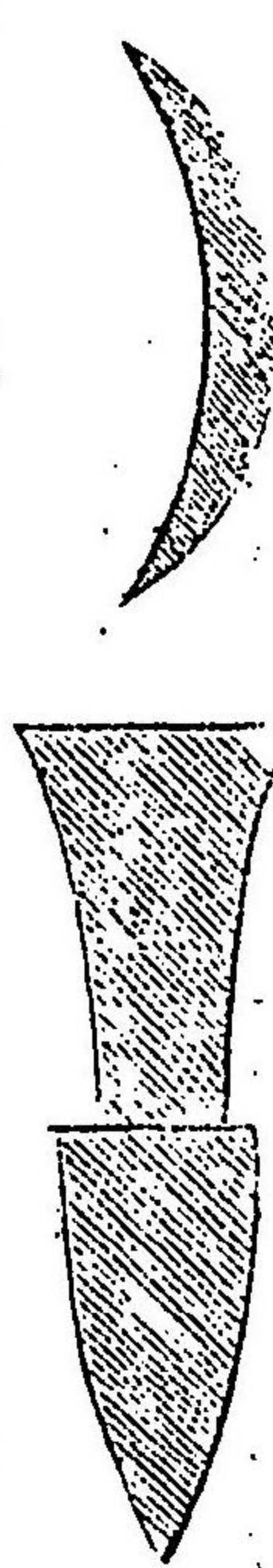
第七十二圖 其他一平一凸圖第七十二及

一凸一凹圖第七十四及第七十三

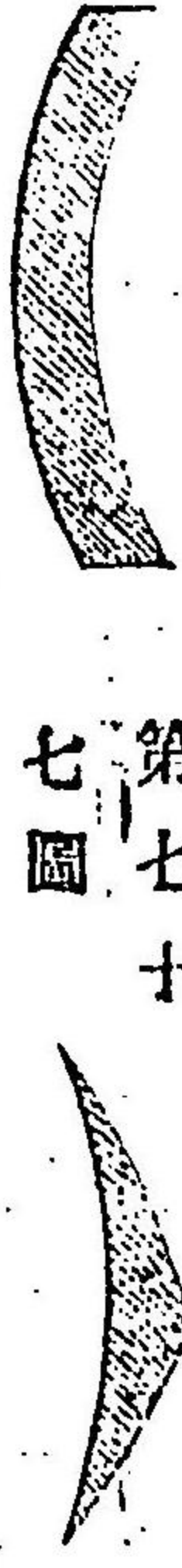
第七十三圖 一凸一凹圖第七十四及第七十三

一凸一凹圖第七十四及第七十三

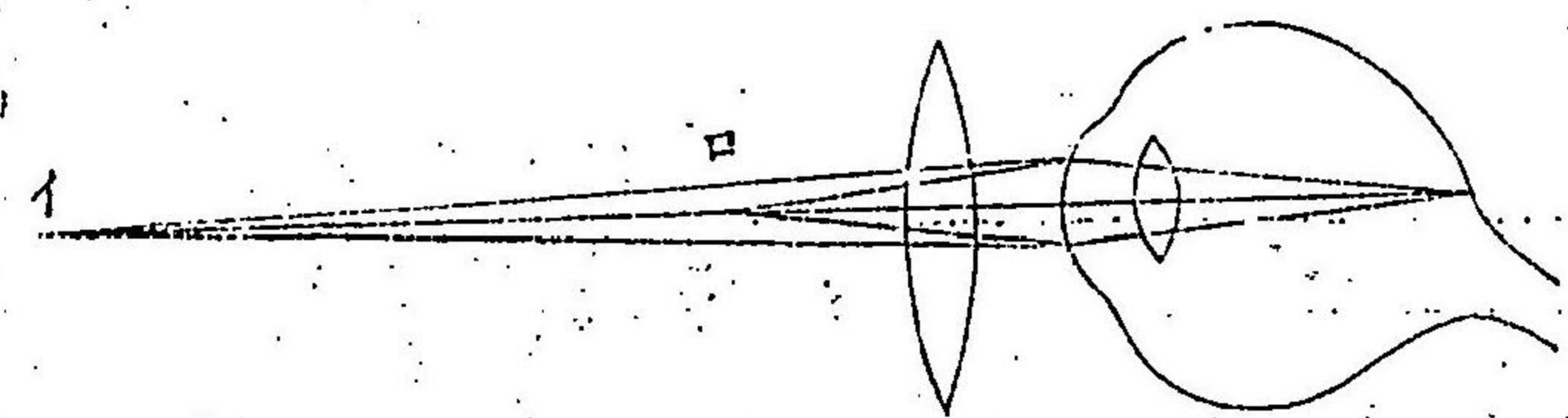
第七十四圖 凹一凸照子圖第七十五及第七十六



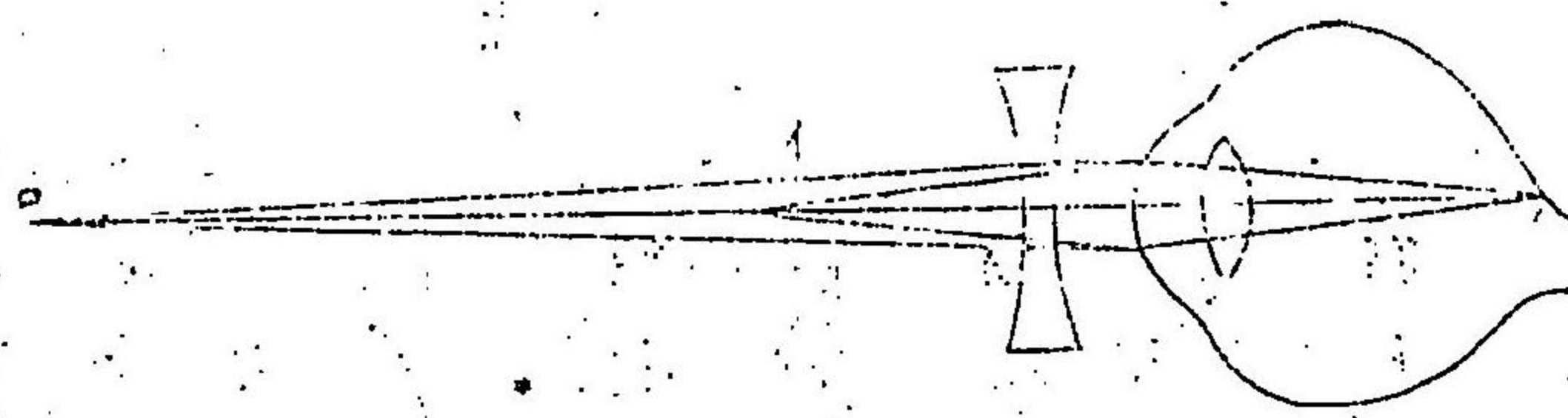
第七十五圖 第七十圖



第七十八圖

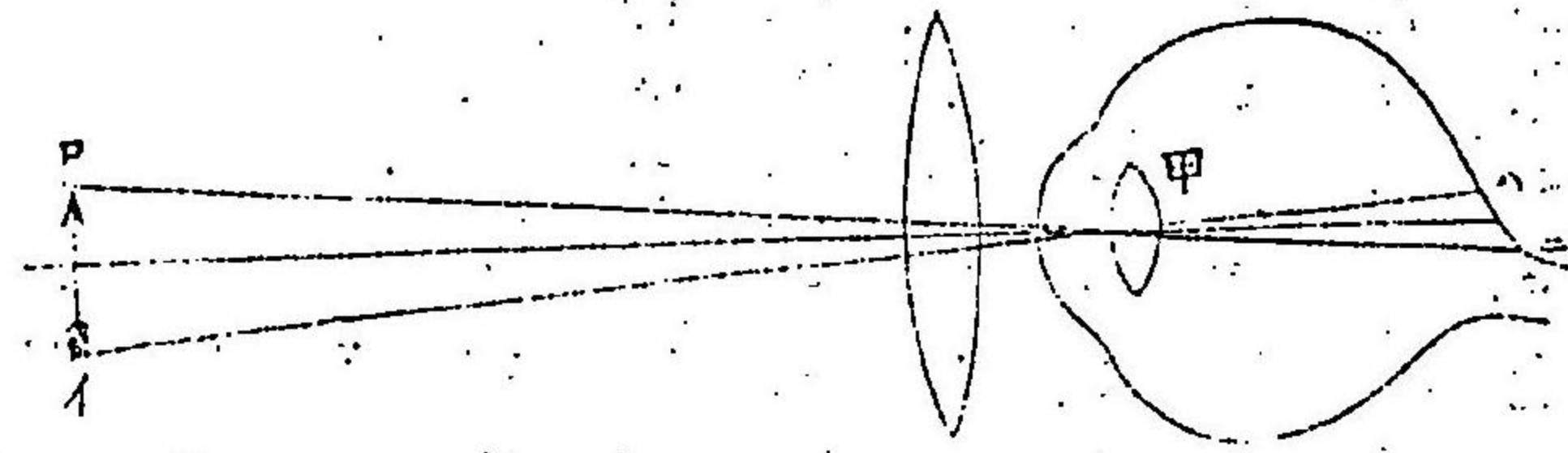


第七十九圖

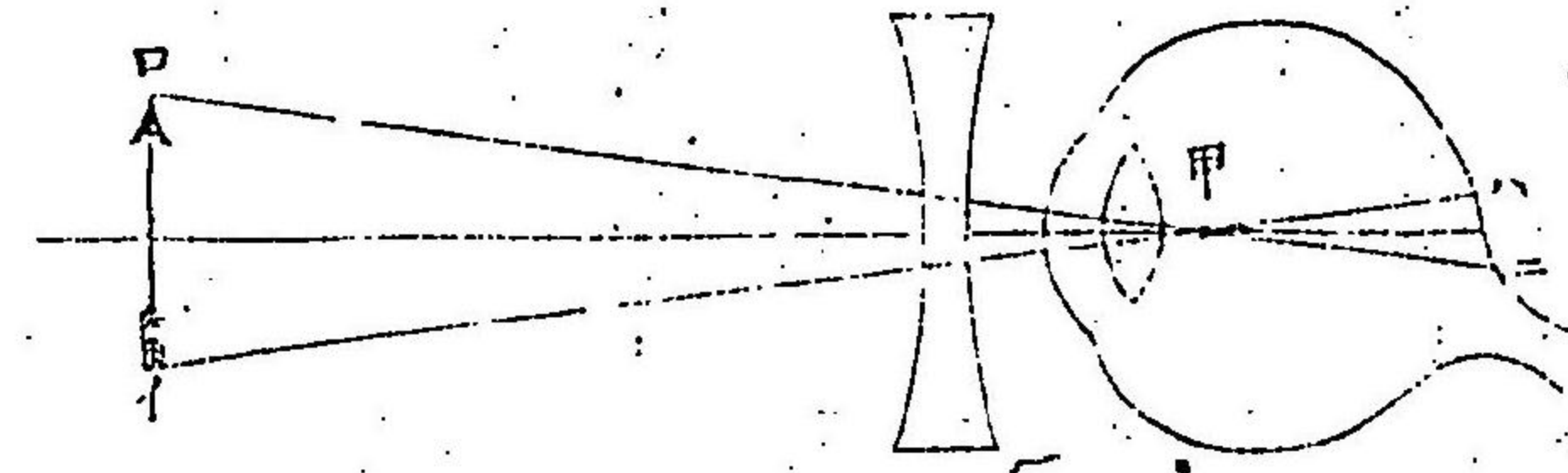


二燒點ヲ有スル眼鏡第七十七  
 レ其實用ノ寡キヲ以テ爰ニ之  
 略ナ又圓柱眼鏡ハ亂視症ノ條  
 下ニ詳論スヘシ  
 今爰ニ眼鏡ニ就テ緊要ナル一般  
 ノ法則ヲ述ブ即チ凸面照子ハ近  
 點及ト遠點ヲ眼ニ近ク轉位セシ  
 ヲ第七十八圖ヲ見ヨ凹面照子ハ之ニ反  
 テ光線ヲ開散セシメ以テ遠點ヲ  
 眼ヨリ遠サクルノ作用アリ第七  
 十九圖ヲ又全キ調節鏡ハ兩照子ニ由  
 テ其居テ變シ凹面照子ヲ用フレ  
 ハ眼球ヨリ遠離シ凸面照子ヲ用

第 八 十 圖



第 一 十 八 圖



フレハ眼ニ接近スル者ナリ  
 其他照子ハ物像ノ大サヲ變スル  
 者ニシテ其大サハ網膜像ヲ生スル  
 光線ノ廣狹ニ關ス而シテ射入光線  
 ノ結合點網膜ヲ離ルハ、愈々大ナ  
 ルルハ網膜上ニ射落スル光線ハ  
 愈々廣シ己ニ論スル如ク凸面照子  
 ハ光線ヲ集合スル作用アルヲ  
 以テ結合點ヲ網膜ヨリ遠サケ、從  
 テ網膜像ヲシテ大ナラシム 第八  
 ヲ見之ニ反シテ凹面照子ハ結合  
 點ヲ后方ニ轉位シ、以テ網膜像ヲ  
 シテ小ナラシム 第八十一  
 圖ヲ見ヨ

第三章

視力ノ年齢ノ關係

老視眼 [Presbyopia]

凡テ老年ニ至ルニ從テ視力ハ自ラ減退シ、調節機能モ亦漸衰弱シテ限制セラレ、而シテ此機能妨害ヲ起ス所ノ解剖的變狀ハ左ノ如シ、即チ角膜及ヒ結膜ハ光澤ヲ失ヒ、前房ハ淺狹トナリ、瞳孔ハ收縮シ、虹彩ハ脱色シテ鮮明トナル、且ツ同時ニ眼球硝子膜ハ透明質ヲ新生スルニ由テ肥厚シ、鞏膜ハ彈力ヲ失シ、又眼球屈折體ノ微ニ透明ヲ失シ硝子體ノ光線反射力ノ強劇トナルヲ以テ、檢眼鏡ヲ用テ之ヲ檢スルニ、眼底ハ充分明瞭ナラス、而シテ最モ緊要ナル變狀ハ水晶體ノ中心ヨリ周圍ニ向ヒ稍硬固トナリ、黃色ヲ帶ヒ兼テ強ク光線ヲ反射スル等是ナリ、之カ爲メ瞳孔ハ外觀ヲ變シテ微ニ灰白黃色ヲ呈ス、又水晶體ノ星形著明トナリテ、病初ノ白內障ト誤診スルコトアリ



以上諸般ノ變狀ヨリ中心視力ハ固ヨリ妨害ヲ受ル者ナリ、即チ五十年ノ齡ニ至レハ視力ハ五分ノ四トナリ、六十歳ニ至レハ四分ノ三七ニハ三分ノ二、九十ニハ二分ノ一トナル

又同時ニ調節機能ノ衰弱ヲ起シ、近點ハ漸眼珠ヨリ遠離シ從テ調節領ハ狹小トナル、今左ニドナルズ、氏表ヲ掲載シテ年齡ニ適スル近點ノ位置ヲ示サシ

年齡	近點ノ距離
十	〇、〇七二メートル
十五	〇、〇八三メートル
二十	〇、一〇〇メートル
二十五	〇、一二八メートル
三十	〇、一四三メートル
三十五	〇、一八二メートル

四十	〇、二二二メートル
四十五	〇、二八六メートル
五十	〇、四〇〇メートル
五十五	〇、六六〇メートル
六十	二、〇〇〇メートル

上論ノ如ク調節力ノ漸衰弱スルハ其原因全ク調節筋ノミニアルヤ將  
 タ水晶體ニモ亦存スルヤ蓋シ毛様筋ハ調節機減衰ノ初期ニ罹ル年齢  
 ニ在リテハ未タ其筋力ヲ失ハスト雖モ水晶體ハ己ニ幼少ノ時ヨリ漸  
 硬固トナリ之カ爲メ其球面ヲ變形スルコト漸次困難トナル者ナリ此ニ  
 由リテ之ヲ觀レハ調節力ノ衰弱スルハ多クハ水晶體ノ硬固トナルニ  
 基因スル者ナリ且ツ高老ニ至レハ水晶體ノ光線屈折力モ減退シ例之  
 ハ齡七十ニ至レハ遠點ハ眼球ヨリ離去シ正視眼ナレハ無限之カ爲メ  
 輕易ノ遠視症ヲ起ス

調節機能衰弱シテ近點ノ眼球ヲ離ル、<sup>Presbyopia</sup>「老視眼」ト云  
 ノ所ニ至レハ之ヲ**老視眼** (Presbyopia) ト云

夫レ斯ノ如ク調節力ノ減衰スルキハ通常ノ距離ニ於テ讀書スルコト難  
 シ殊ニ日晡ニ於テ調節筋己ニ疲労スルカ若シハ書面ニ光線ヲ受クル  
 コト不良ナルキハ然リトス故ニ老人ハ好ンテ鮮明ナル光線ヲ撰ヒ讀書  
 スルニ當テ書籍ヲ着シ眼ヨリ遠クル者ナリ然ルニ今斯ノ如クスル  
 所ニ文字等ノ如キ細小ノ物體ヲ視ルコト甚ク困難トナル視角細小ト即  
 チ此時期ヨリ老視眼ナルノ診斷ヲ下ス可キ者トス

老視眼ノ強弱度ヲ示スニ二十二センチメートルノ距離ヨリ來ル光線  
 ナシテ恰モ其近點ヨリ射來スルカ如クナラシムル凸面照子ノ番號ヲ  
 以テスルチ其トス例之ハ老視眼ノ近點ヲ四十センチメートルノ距離  
 ニ在リトシ而シテ此患者二十二センチメートルノ距離ニ於テ讀書シ得  
 ベキ凸面眼鏡ヲ探擇セント欲セハ二十二センチメートルヲ分數ニ爲

0.40  
0.20  
0.10

セル者ヨリ、四十センチメートルヲ分數ニ爲セル者ヲ減スヘシ、則チ〇、  
二二分之一ハ四、五曲光カトナリ、〇、四〇分之一ノ二、五曲光カトナルヲ  
以テ四、五ヨリ三、五ヲ減スレハ、二曲光カヲ得ヘシ、此二曲光カハ即チ今  
要求スル所ノ凸面眼鏡ノ番号ニシテ、同時ニ老視眼ノ度ヲ示スモノナ  
リ

今左ニ近視眼及ヒ遠視眼ハ老視眼ニ如何ナル關係ヲ有スルヤヲ論セ  
ントス

遠視眼ハ正視眼ニ於ルヨリ早ク老視眼トナル者ナリ、抑モ遠視者ハ  
遠隔ノ物體ヲ望視スルニ當リ已ニ夥多ノ調節力ヲ使役スルヲ以テ夙

ニ近部ヲ明視スルノ調節力ヲ失スル者ナリ、此老視眼ヲ診定スルニハ  
先ツ適當ノ眼鏡ヲ以テ遠視ヲ補正シ然ル后老視ノ強弱ヲ定ムヘシ

近視眼ハ其遠點二十三センチメートル以内ノ距離ニ在ルキハ決シ  
テ老視トナルコトナシ、弱度ノ近視ハ時期ヲ逐テ老視トナレモ正視眼ニ

於ルヨリ遲シトス

0.10  
0.05

〔治法〕老視眼ノ初候ヲ兆シ、患者讀書ノ際眼精ノ疲勞ヲ覺ヘ、文字等不  
明ニシテ、殊ニ細小ノ物體ヲ視別スルコト能ハサルニ至レハ、速ニ凸面眼  
鏡ヲ與テ些少ノ距離ニ細工ヲ營ムト雖モ眼力ノ疲勞ヲ來スコト無ラシ  
ムヘシ、徒ラニ眼鏡ヲ使用セスコト眼力ヲ強良ニセントスルハ甚ク不  
可ナリ、蓋シ反テ眼精ヲ衰弱セシムルノ原ナリ

輕度ノ老視眼ニハ弱度ノ凸面眼鏡例之ハ〇、七五ヲ與ヘ、唯黄昏及ヒ夜  
中ノミニ之ヲ裝用セシムヘシ、然レモ患者老齡ニ至リ調節力ノ減衰ス  
ルニ從テ漸強度ノ凸面眼鏡ヲ要シ、而シテ其之ヲ擇出センニハ、先ツ數箇

ノ凸面眼鏡中ヨリ其最強度ノ眼鏡ヲ試用シ、續テ漸強度ニ移リ、二十二  
センチメートルノ距離ニ於テ讀書シ得ル眼鏡ヲ以テ適當ノ者トス、蓋

シ此眼鏡ハ亦三十乃至三十五センチメートルノ距離ニ於テ讀書筆記  
等ヲ營ムニ足ル者ナリ

蓋シ正視眼ニ於テ調節力ノ減衰スルハ直ニ年齢ニ關スルヲ以テ、今左  
ニ各齡ニ準シテ其老視症ニ適當スル凸面眼鏡ノ表ヲ掲載セントス

年 齡 眼鏡ノ番號

四十五	凸〇七五曲光力
五十	凸一五曲光力
五十五	凸二二五曲光力
六十	凸三曲光力
六十五	凸四曲光力
七十	凸五曲光力
七十五	凸六曲光力
八十	凸七曲光力

上表ノ眼鏡ハ正視眼ノ近點ヲ二十二センチメートルノ距離ニ轉位セ  
シムルカ故ニ、亦老視ニ合併スルノ諸件ニ從テ各患者ニ就キ特別ニ眼

鏡ヲ擇ハサル可ラス、老視者若シ其職業ニ從ヒ細工ヲ營ナムト欲セ  
ハ、固ヨリ表中ノ眼鏡ヨリ強度ノ者ヲ與フヘシ、若シ營業ノ際、物體ヲ眼  
ニ接近スルヲ要セサルハ、弱度ノ凸面眼鏡ヲ與フヘシ、總テ此眼鏡ヲ  
擇フニハ上記ノ算法ニ據リ、或ハ眼鏡ヲ以テ直ニ試ムヘシ

若シ強度ノ眼鏡ヲ要スルハ、兩眼ノ眼鏡ヲ互ニ相接シテ、以テ眼鏡ノ  
外半部ヲ用ル如ク爲スヘシ、何トナレハ調節機能ハ凸面眼鏡ニ由テ多  
少弛緩スルモ、兩眼軸ノ輻輳運動ハ物體距離ノ接近ナルニ準シテ却テ  
増加スルカ故ニ、初テ眼鏡ヲ用ヒ、或ハ弱度ノ眼鏡ヨリ強度ノ者ニ轉ス  
ルニ當テ眼ニ甚シキ疲労ヲ覺フ、今凸面眼鏡ノ外半部ヲ用フレハ、恰モ  
三稜鏡ノ基底部ヲ内方ニ向テ、之ヲ眼ニ裝用セル如ク作用スルヲ以テ  
外來ノ光線ヲ内方ニ屈折シ、從テ眼軸ノ輻輳ヲ減少スルカ故ナリ

患者若シ眞ニ内直筋力ノ疲労ニ罹ルハ、凸面眼鏡ト三稜眼鏡ヲ併用  
セサル可ラス、其採擇法ハ后章ニ讓ル